THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿一年　第十一號

（第二百二十號）

中央公論第二十一年第十一號目次

此廣告ニヨリ御申込ノ方ハ中央公論ニ依ル旨御附記ヲ乞フ





第二十一年
第十一號
(二百十二號)

擧國一致益々急要ならざるか

一

進歩黨の名士犬養毅氏の今秋奥羽地方を遊説するや、到る處官民協力擧國一致の必要を唱導したりといふ、久しく在野黨として常に極力時の政府に反抗するを以て本色の如くにしたる憲政本黨の首領にして、此の事ある、恐らくは世の多く意外に感ずる所なるべし、然れども是れ意外にあらず、眞心に國事を憂ふるもの、素より犬養氏の如くならざるを得ざるのみ、日清戰役の後、世界に於ける日本の地位は一變したり、否、東亞の形勢は一大變轉を爲せり、睡れる獅子と稱せられたる清國は、其の實全く半死の豚なりき、明治三十三年の團匪以來此の情勢は益々明白となれり、大に伸んとしたる日本の頭を抑へたる露國は、事ある毎に其の爪牙を延して、幾んど全く滿洲を掩有し、韓國を籠蓋して竟に日本を威嚇し、同時に獨逸は膠州灣を占領して大に清國に利權を立てんとし、揚子江流域に於ける英國の利權を迫害せんとする氣勢を示したり、而して日本は十年計畫を以て軍備擴張を遂行せざるを得ざるに至り、次て日英同盟の締結を見るに至りたりき。

日露戰役に至ては、日本の地位をして太く昂進せしめたるのみならず、東亞をして幾んど歐米競爭の中心たらしめんとする傾向あり、韓國は玆に全く日本の保護國となり、長春以南の鐵道は日本の手に歸して、滿洲に於ける日露の勢力は少くも相伯仲するに至り、露

國の東亞に對する計圖將に一變せざるを得ざらんとし、淸國本土及び滿洲西伯利亞に對する歐米の競爭また一大轉進を看んとす。

此の時に當て日本の使命は實に重且つ大なり、能く之を成就せば、國光を六合に發揚して所謂天地の化育を贊襄するに足ると雖も、苟くも一歩を謬らん乎、國運頓挫して或は不測の變を來し、四十年來の鴻圖竟に一空に歸するも亦知るべからず、乃ち此の使命を果すがためには、凡そ生を日本の皇土に享くるもの、一意專心、戮力合同して以て事に當らざる可らず、何の暇あつて悠々浮華に耽る可けんや、何の遑あつてか區々の內爭を事として徒らに自から紛々擾々たるとを得んや、官民一致洵に已む可らざる也。

二

日本は東亞に於て少くも露國及び其の與國に下らざる陸海軍を有せざる可らず、露國と親交を訂して永く平和の福祉を享受せんとは吾人の本願なりと雖も、彼れ酬ゆるに砲丸を以てせば、我れ亦何時にても之に應ずるの備なかる可らず、正當防衛の實力を備ふるとは、一瞬時と雖も忽諸に附す可らざる也。

日露戰役の經驗によれば、而して露國が現在の西伯利亞鐵道の北方に更に一線を敷設するより打算するに、彼れは能く百萬の大兵を東亞に送るとを得るもの也、我れ韓國を彼れの脅迫より救ひ、滿洲に於ける我が利權を擁護せんとせば、亦同じく百萬の兵を大陸に動かすの準備を缺く可らず、況んや日英攻守同盟のため、印度に於ても亦英國の利權を防護するの義務を負へるをや、大兵を印度に出すがため、此の方面の海上權亦確實に保有の必要あり、之に要する海軍力亦頗ぶる大ならざるを得ざる也、

此の陸海軍備は、單に精神的のみにては支持するとを得ず、必らずや巨額の資を要す、此の資を供するの富も亦之を蓄積せざる可らず。

三

韓國は既に全く日本の保護國となれり、聖德太子以後、否神功皇后以來傳統の大政策は玆に至て緒に就け

り、宜しく善く統治して以て之を完成せざる可らず。

統治の最大主眼は、韓國民の最大多數をして生命財產の安固を保全せしむるに在り、其の智能を開發せしむるに在り、富源を開拓して文化を旺んならしむるに在り、此がためには法律、稅制、警察を始め、教育、衛生、交通等の諸事業を制定し實行せざる可らず、乃ち韓國のためには、少からざる費額を投ぜざる可らず、且つ政府のみならず、國民も亦多く韓國に其の智能と資力とを注入して、富源開發に鋭意すると共に、併せて韓國民を利益し、其の文化に潤はしむるを要す、是れ所謂化育贊襄の大義を全くする也、凡そ國家は單に利害のみを以て進退す可らず、利害を超越せる或る崇高なる目的をも併有するを大國家大國民とす、日本は韓國に對する權利の重大なるを知ると共に、其の義務も亦至高至大なることを自覺するを要す、嗚呼談何ぞ容易ならんや、官民共に眞摯に、誠實に、鋭意努力せざる可らざる也。

露國を旅順大連より驅逐したるは、東亞に於ける一大患害を除却せるものにして、其の效果の顯著なるや言を俟たず、啻だに我が十年の志を酬ひたるのみに非ざる也、然れども我れ之に據つて清國を脅威し、若くは膠州灣に於ける獨逸を迫害する野心なき以上、旅順を以て軍港と爲すの利害は實に一問題ならざる可らず。

但だ大連の港灣と東清鐵道とに至つては、滿洲に於ける通商の便宜を開き、滿洲の文化を開發するに於て頗ぶる重要視すべきものにして、隨つて日本の大に力を盡して經營すべき所とす。

第一撫順炭坑は一個の大富源なり、唯だ無限に之を採掘して近くは上海長崎より、遠くは香港新嘉坡に供給せば、我が九州炭に多大の打擊を與ふるが故に、採掘を制限して單に我が海軍用、御用船用とし、更らに浦鹽斯德及び西伯利亞鐵道へ供給するに止むることなるべし、而かも廣大なる西伯利亞に一の炭坑を有せざる露國は、撫順炭の最大華客たるべく、其の利潤の大

なるや推算に難からず。

第二鴨綠江の材も亦滿洲に於ける大富源の一にして、龍巖浦及び安東縣は此がため重要なる都市となるべし。

第三吉林の木材鑛物、蒙古の牛羊等も亦一の富源にして、之を輸出すると同時に、我が雜貨及び棉布を彼等に供給するの利益も亦頗ぶる大なるべし。

第四滿洲鐵道を巧みに經營して有利有效ならしむると共に、また能く其の沿線の治安を保たざる可らず、之を馬賊及び匪賊より防衛して鐵道の安全を保障し、併せて此の沿線に新設せらるべき彼我の新市街市場を護衛せざる可らず。

第五自由港と爲したる我が大連は、露の浦鹽斯德と共に東亞の最大港となるべきものなり。東清鐵道をして寬城子（長春）に於て十分に露國所有の鐵道と聯絡せしめ、以て歐洲より東亞に來るべき郵便物、旅客、貨物を吸集し、大連をして倫敦、巴里、アントワープ、伯林、維也納、莫斯科、聖彼得堡と東京、大阪、京都、長崎、芝罘、天津、上海、香港、マニラとの必經中心地たらしむるがため、汽車、港灣、船舶の設備を完全ならしめざる可らず。

第六滿洲の開放と共に、日本人をして滿洲蒙古西伯利亞等に於て歐米人と均等に利權を確立せしむるの必要なる亦多言を要せず。

凡そ此の數事のため、我が國庫の負擔の小ならざるは勿論、國民も亦智能資力を注入して極力經營せざる可らず、擧國一致、官民協力の急要なる、茲に於て益々切實也。

五

我が人口の增加するもの年々約五十萬、今や其の過剩に苦まんとす、然れども僅かに一津輕海峽を超ゆれば、少くも六百萬人を收容すべき一大富士（北海道）あり之を、開發するの急要なる何ぞ呶々を要せん、況んや樺太の南半また新たに我が領となりて、北門の經營轉た急を要するをや。

北海道開發の第一要務は交通の便を開くに在り、多

くの鐵道を布設し、且つ鐵道のため港灣を開築するに在り、吾人は素より所謂北海道十年計畫なるもの丶大要をすら知らず、随つて其の賛否を豫言すると能はずと雖も、北海道の開發に就ては、官民一致して成るべく之を急施するの必要なる、何人も異言なかるべし、但だ此の間に在て官吏黨人等の私心を加へて醜事を演するを排すべきのみ。

遼東半島の東海岸より、韓半島の全沿岸、日本海の幾んど全部を包括して樺太半島に至る漁業權は我が手に入れり、北海道樺太に近き北日本海は、北太西洋、ノースシーと共に世界三大漁場の一にして、其の利富實に無盡藏と稱せらる、若し科學の新理法を應用して其の漁獲物を醃藏し、燻製し、油藏し、之を鑵詰として東洋の各市場及び濠洲南米等に送らば、其の利の大なる幾んど測る可らざらんとす、樺太の南半既に我が領有に歸したる以上、此の一事最も注意せざる可らず。

六

我が過剰の人口を以て他の足らざる勞力を補ひ、兼て我が通商貿易の新路を拓くがため、移民事業を發展せしむるの要あり、記せよ、布哇の砂糖業は其の實幾んど全く日本移民の勞力に依て製出せらる丶ものなるとを。

北米のワシントン、カリフォルニア、テキサスの諸州は天然の富源甚だ饒かなるも、唯だ人力の足らざるがために未だ多く開發するに至らず、北米に於ける我が移民は將來實に多望なりと謂べし。

之にも優さるは中米の墨其哥と、南米の智利及び伯露、巴西等なり、近く智利には多くの我が移民を要するがため、新たにパルパライソに航路を開かんとを計畫するものあり、彼の巴奈馬運河一たび成らば（今より九ヶ年の後には必らず開通すべし）經度に於て紐育と智利とは幾んど同一なるが故に、紐育よりの船舶は一路南下して直ちに智利に至るべく、其の航路はシャトル、桑港等よりするものよりも却つて利便なるべし、即ち運河開通の後は紐育方面の豐富なる米國の資力と智能と沛然智利に流入して、南米開達の迅速なる、或

は世界を驚動するものあるべし、而して茲に勞力の必要なる殊に言を俟たずとす。

日本は宜しく此の形勢に鑑みて、速かに南米移民の大策を立て、移民と相次て大に南米貿易を開くの計圖に出でざる可らず。

七

清國の官民今や頗ぶる覺醒して、憲政の創設を試みんと欲す、現在清人の智識程度に於て其の成功するや否や實に一疑問也

然れども僅かに一部清人の思想生活を看て到底强大なる國家を再建し能はざるものと斷言するは、寧ろ早計に失すべし、漢唐宋元の如き光輝ある國家は、曾て彼等の祖先に依て建造せられたるとあるに非ずや、世界最古の大文明を製作したる印度人が今再び起つの能力を絶滅したりといふと勿れ、彼等は英國印度政廳のため有らゆる制縛を受くるがため、起たんと欲して未だ起つと能はざるのみ、近くば米人ブライアン氏も亦英國の處置を難じて「人道上默視すべきものに非ず」と絶叫せる程なるがために、印度人等未だ容易に國家を再造するに至らざるのみ、清國に至ては今や君臣倶に共に憲政を創設せんと欲す、早晩成功の期あるや幾んど疑ふ可らず。

果して然らば、吾人は清國を扶掖して憲政を完成せしむべし、四億の臣民をして德化に浴し文明に潤はしむべし、是れ世界人道のためにして、また化育を賛襄する所以ならずや。

吾人はまた併せて清國に於ける通商上の利益に均霑し、特に既得の南清に於ける優先權を失墜す可らず、夫れ北京より南清を通じて人口稠密、地力豐饒にして天富幾んど無盡藏なり。歐米列國人が競ふて目を茲に着け、通商起工の利を啓かんとを爭ふもの實に由緣ありと謂べし、我が日本僅かに之と一衣帶水を隔て、同文の國民たるに於て、一千五百年來互ひに相扶掖し開發し來りたる歷史に於て、豈一歩を歐米人に輸す可けんや。

八

東亞は今や實に歐米競爭の市場となり、世界活動の中心點たらんとす、彼の蘇士運河の開鑿に由り、印度及び東亞は偉大なる影響を受けて、歐洲文明の東漸を迅速にし、香港上海に第二の小歐洲を作りて、其の風化遙かに浦鹽斯德を經て西伯利亞に及ぶに至れり、西伯利亞鐵道成るや、歐亞の聯絡更に益々密ならんとせしも、露國は多く之を軍事的にのみ使用し、自由に通商的に開放せざりしがために、其の影響未だ著るしきものあらずと雖も、彼れ今や浦鹽斯德を自由港として歐亞聯絡の最大市場たらしむるの志あり、既に西伯利亞鐵道復線の計畫を立てゝ尚ほ足れりとせず、黑龍江の北方にも新線路を布設してハヤロスクより浦鹽斯德に出てしめんとす、歐亞の關係は之より益々密ならざらんとするも得べからず、况んや巴奈馬運河竣成せば東部米國及び西歐の貨物沛然として東亞に流入すべきをや。

更に記せよ、大北鐵道（グレート、ノーザン）の社長ヒル氏がダコタ、ミンネソタの如き一萬五千噸以上の大汽船を作りたるは、米亞の通商の近く大に繁榮すべきを見込みたるが故ならずや、又看よ、加奈陀太平洋鐵道が香港、晩香坡、リバプール回の行程を一ヶ月に短縮したると、シバースユニオン汽船會社が漢堡（ハンブルヒ）と東亞との新航路を開きたるとを、更に記せよ、英國の某會社が新たに十三隻の汽船を以て漢堡と東亞の航海を營まんとすると、佛國の最大汽船會社が政府の航路補助費を利用して、其の航路を柴棍以東に伸べ、我が神戸横濱を經て布哇より南米に廻り、以て世界一周の航路を開かんと計畫しつゝあるとを（彼の横濱より移民を搭載して布哇に寄港したるチユペレー號は實に其の第一の試驗船なりき）、更らに記せよ、露國が極東汽船會社に厚き保護を與へて浦鹽斯德より長崎、上海及び新嘉坡オデッサ等に頻繁なる往復を開かしめんとするとを。

凡そ此等の諸航路は、皆東亞を活動の中心點とし、世界通商の最大市場と做すが故ならずや、此の時に方つて其の衝路に立つ我が日本如何ぞ晏然たる可けんや、如何なる場合に於ても、我れは必らず東亞の主た

るべし、斷じて容たる可らず、而して是れ亦我が官民の鋭意して之に當らざる可らざる處とす。

九

日本は幸ひに日露戰役に由て武力の能く東亞に主たるとを明示し得たりき、然れども其の富力に於ては如何ぞや。

試みに東亞に勢力ある列國と我が日本とを比較し視よ、其の財政（歳入）に於ては實に下の如し。

露國	二、三三五、七三五、〇〇〇圓
佛國	一、四三二、九九七、〇〇〇圓
英國	一、四一五、四五五、八〇〇圓
米國	一、一二四、五一四、〇〇〇圓
獨逸	一、〇一六、二三八、〇〇〇圓
澳國	八一五、一四二、一〇〇圓
伊國	七四六、五一九、〇〇〇圓
西班牙	四〇〇、〇二七、〇〇〇圓
日本	二九二、〇五八、〇〇〇圓
白耳義	二五一、一〇〇、〇〇〇圓

僅かに蕞爾たる一白耳義より少しく多きのみ、老朽國と稱せらるゝ西班牙よりも下位にあり、更に轉じて貿易額（購買力を證すべき輸入額）を看ん。

英國	五、五一三、六二一、二四〇圓
獨逸	三、一六〇、五七三、〇〇〇圓
米國	二、〇六一、四六九、〇〇〇圓
和蘭	一、八九八、三三〇、〇〇〇圓
佛國	一、八一四、五六〇、〇〇〇圓
白耳義	一、〇六二、五六〇、〇〇〇圓
伊國	八〇七、五七六、〇〇〇圓
澳匈國	六八二、〇八三、〇〇〇圓
露國	六二七、七〇三、五〇〇圓
瑞西	五〇〇、八三七、〇〇〇圓
西班牙	三三四、二六八、〇〇〇圓
丁抹	三三三、二七四、〇〇〇圓
日本	三一七、一三五、五〇〇圓

即ち獨逸の約十分の一のみ、白耳義の三分の一にすら達せず、彼の山間の彈丸黑子地たる瑞西にも及ばず、極北の漁業國たる丁抹の下位にあり、武力に於ては實に東亞の覇者たりといふと雖も、其の富力に於ては實

に憐れむべき小弱國なりと稱せざる可らず。

若し此の狀態にして改まることなくんば、日本は武裝せる貧士のみ、其の甲冑堅實、刀槍精鋭なりと雖も、遠く往くべき馬を有せず、永く支ゆべき糧食なきもの也、武裝のまゝ竟に倒死せずんば幸ひのみ。

知るべし、今日の最大急務は實に富源を開拓し、利權を確立して以て益々通商貿易を發達せしめ、大に國富を蓄積するに存することを、天は幸ひにして日本の地位を東亞の中心に在らしめ、東西南北に多くの市場と富源とを置けり、日本の官民若し奮發し努力せば、其の富を獲るや斷じて不可能に非ず。

十

日本は宜しく英米佛獨と其の資本を共通すべし、同時に其の智能をも協同せしむべし、歐米人と共に西伯利亞及び清韓の通商貿易を盛ならしめ、其の利益に均霑すべし、唯だ獨り利益を壟斷することは素より不可なりと雖も、我れ主となりて其の利益を總てに均霑せしむるの意氣あるを要す、僅かに他の後塵を逐ふて走り、哀請して其の利益分配に與かるが如き陋態に出づ可らず。

我は東亞の覇主となり、世界一等國たるの名實を併有し、清韓を扶掖し擁護して以て世界の平和を保つがために、十二分の富力を蓄積するの外、差向き日露戰爭のために負荷したる二十億の國債は償還せざる可らず、而して是れ主として對外貿易の利潤に依らざる可らず、即ち一切の產業、多くの政治的、教育的、交通的、風化的施設、總て此の大方針より割出さゞる可らざる也。

更に意味强くいへば、一切の事業總て世界的ならざる可らず、之がため官民協力、擧國一致して事に當らざる可らず。

僅かに露國との戰ひに勝ちたるがため、早く驕泰の心を生じ、華奢の風に浸むが如き惰氣あらば、國運恐らくは是より傾かん、吾人は今や峻阪の中腹以上に在り、否、泰嶽の頂に達せんとして正さに七八合の處にあり、發奮激勵して頂上の平坦にして壯大なる風象を

觀望すべき處に達せずんば、或は困蹐して深谿に陷らん。

擧國一致の必要は今日以後に於て益々切なり、官民協力豈已む可けんや、憲政本黨の領袖の之を唱ふるは實に愛國の丹心より迸出せる也、今の政府に非常なる秕政醜事なき以上、區々政爭のために國事を謬まるが如き素より國士の爲さゞる所なるのみ。

世界語の將來

理學博士 丘淺治郎

先々月の「新公論」には私の名前で「世界語の發達と其現在」と題する短い一文章が出て居ますが、これは私が Romaji 雜誌に掲げたものが更に轉載せられたのであります、元來ローマ字を用ひて何等かの文章を書くと云ふことが主意であつて、内容の完全なることなどは素より望まなかつたのでありますから、簡單に過ぎて、殆んど表題にも相當せぬ程の不完全な書き樣でありました、私は從前から世界語には常に興味を持て居りましたし、又此頃幾つかの新聞雜誌から世界語に關する意見を問はれたりしましたから、此所に前の文章の不足を補ひ、且其將來に對する考へを述べて見やうと思ひます。

凡そ人が或る物を批評し、又それに就いて何か希望するに當つては、自身の見地からのみ之をなすを免れぬものでありますが、私が世界語に興味を有するのも、一は自分の專門學科の研究上、其必要を感じ、一日も早く萬國共通の用語が出來れば善いと思ふ希望に基いて居ます、今日では何學問でも少しく深く修めるには英佛獨の三ヶ國の語を知ることは是非必要でありましようが、場合に依つては尙其他にも多くの國語を知るの必要が生じます、私が數年前から特に研究して居る海鞘類と稱する海產動物に關しては新規研究の年報をイタリヤの或る學者が擔當してイタリヤ語で書いて年々出版して居ますから、是非之れを讀まねばなりませぬ、又スウェリゲ、ノルゲの二國には此類の動物を研

究する學者が比較的多くあつて、皆其結果を自國語で公にして居ます故、スウェリゲ、ノルゲの二ヶ國語も讀む必要があります、其他オランダ國にも此類の專門家があつて、東印度の海に產する種類を調べて澤山に發表しましたが、我國に近い所の產物に關する報告でありますから、これを讀むためにはオランダ語も知らずに濟ます譯には行きませぬ、尙或る時は少しく必要を感じて、同志の英人一名、米人一名と組んでロシヤ人について二ヶ年餘も六ヶしいロシヤ語を學びました、總て此等の國語を學ぶために費した時間と骨折りとは決して少々てはありませぬが之は皆各國の學者等が世界共通的の學問研究の結果を各自の國語で報告するより起ることとて、誰も均しく困難を感ずる點であります、若し萬國共通の世界語が定まつて何國の學者も之を用ひて報告することに成つたならば、今日に比して僅に幾十分の一かの骨折りて、同樣の便宜を得ることが出來ます、若し學者用の共通の世界語が一般に行はれることに成つたならば、今日數ヶ國の六ヶかしい語を學ぶために費す時間は殆ど全く之を他の方面に利用することが出來て、學問研究上如何に結構であるか知れませぬ、斯樣な次第であります故、私は自分の專門の學術研究上から成るべく早く世界語の發達し普及することを希望し、隨て世界語なるものに對しては常に興味を有して居たのであります。

然し私が世界語に興味を有するのは以上の如き學問上の點からのみてはなく、尙一つには生來の嗜好にも因ることと思ひます、私は元來種々の國語を學ぶことや、新しい文字言語を考へて造ることが甚だ好きて、恰も他の人等が謠や圍碁を樂しむ如くに、之を一種の娛樂として居りました、例へば明治十八九年頃には自分用の簡便な新しい文字を工夫して、常に之を用ひて居ました、又明治二十一二年頃にはヨーロッパ諸國の言語を比較し、之を基として Zilengo と名ける一種の世界語を考へ出して、Gramatiko di Zilengo と云ふ文法書や、Vortolibro di Zilengo と云ふ字引までも造らうと試みました、此語の一例を擧げれば「父」を Patr

「母」をPatrovoとしましたが、之は今日の「エスペラント」語のPatro, Patrinoと殆ど同じであります、又「私はあの女を愛する」はZa amos il homovo、「私は汝に此書を與へるであらう」はZa ve donis kest libroと云ふ樣な具合に組立てました、斯樣にして自分一人で種々に工夫して此語を完成しやうと樂んで居ります中、明治廿四年にドイツの國のフライブルグの書店でザーメンホフ氏の「エスペラント」の書物を見付け之を讀みました所が私のZilengoに似た所が頗る多く有つたので面白く感じ、不十分な點を追々改めて行つたならば終には好い世界語に成るべきものであると思ふて、稽古して見ました、尙其後明治廿七年に偶然一人の未知のロシヤ人からイヂオム、ネウトラル(中立語)で書いた手紙が來ましたが、未だ嘗て學んだことのない語であるに拘らず、直に讀めて、十分に意味が解かりました故、其由を返事に書いて遣りましたら、それが基となつて、其後歐米諸國の知らぬ人から「イヂオム、ネウトラル」で書いた手紙が幾通も來ました、此世界語も中々簡單で解り易く、至て便利なものの如くに見受けます。

以上私自身のことを稍長く述べましたが、凡そ一の事の將來を推察するには、其事の過去の變遷を調べ又現在の狀態に鑑みて推察するの外はありませぬ故、世界語の將來を論ずるに當つても是非其過去と現在の有樣から考へて掛らねばならず、隨て私の從來之に就て聞き知つて居たことを引き合いに出す必要があります所から、斯く述べたのであります、扨世界語なるものは將來如何に成り行くであらうかと考へますに、先づ世界語と云ふ名前の意味から定めなければなりませぬ、或る人は世界語は今日各國に行はれて居る各國語を止めて、其代りに立つべきものの如くに考へて居ります、異國人間は素より同國人間にも在來の國語を止めて悉く世界語のみを用ひ、地球の表面には唯一つの世界語のみとなることを理想として居る人もあります、「ヴォラピューク」語の發明者なるシュライエルが「四海兄弟、四海一國語」(Menade bal püki bal)と云ふたのは

此意味てありますが、之は全く空想てあつて、現實の世の中には到底行はるべきことてはありませぬ、各民族の有する固有の言語は孰れも長い間の歴史の結果てあつて、今後も其民族の發展と共に益々進歩發展すべきものてあります、我々が今日實際に其必要を感じて居るのは決して斯樣な意味に於ける世界語てはなく、現在の各國語の外に立つて、異國人間に用ひらるべき共通の補助語てあります、即ち各國人が自國語の外に學ぶべき共通の第二國語て、之さへ知つて居れば何國の人とも通信、談話が出來ると云ふ性質の言語てあります、若し斯かる共通の補助語なる世界語が萬國一般に行はれる樣になつたならば、日本人は日本語と世界語とを知つて居れば內外ともに用が便ずる筈て、イギリス人ならば、イギリス語と世界語、フランス人ならばフランス語と世界語と云ふ樣に、自國語と世界語とをさへ知つて居れば、學問上の報告ても、商業上の通信ても毫も差支がない譯てあります。

今日ては學問の研究上數多の國語を學ぶことの必要があつて、然も之には誰も迷惑して居ることは前にも述べましたが、先年或る學者は學術用の國語はイギリス、フランス、ドイツ、イタリヤの四つに限つて仕舞ふが宜しい、其他の國語て書いた論文、報告等は右の四ヶ國語の中の孰れか一つて丁寧な摘要ても附けてない限りは、全く捨て置くことに仕たい、と論じて、其說を萬國解剖學會の機關雜誌に揭げて主張したこともありましたが、我々日本人などから見ると、此四ヶ國語を悉く學ぶことが已に非常に大なる負擔てあります、此困難は外國人等も矢張感じて居ることてありまして、嘗て「ノヴィラテイン」と云ふ世界語の發表せられた時などは或る生物學の專門雜誌の編輯者は此世界語て書いた論文ならば雜誌に揭載すると廣告して此語を奬勵しました、今日數多の國語を學ばねばならぬと云ふ大負擔の苦痛は一般に學者等の隨分甚しく感じて居る所てあります。

共通の補助語としての世界語が到底出來ぬものならば致し方はありませぬが、現在とても多少世界語の性

質を帶びたものが實際に行はれて居るのでありますから、未來の或る時期に至つて一定の萬國共通の補助語が、學者間、商人間に廣く行はれることも決して出來ぬことでないと思ひます、現に船て用ひて居る萬國信號はＡＢＣに相當する二十六種の旗を用ひ之を種々に組み合せて何國の船に對しても「汝の幸福なる航海を祈る」とか「敵近くにあり」とか自由に通信をなして居るのでありますから慥に一種の世界語であります、又普通の言語の中でもMikroskop, Teleskop, Tabnk, Kafe, Hotel, Postなどは何れの文明國にも共通のもので、其儘に取つて世界語に用ひることが出來ますが、斯樣な言葉を集めて見ると殆ど八千もあります、此等を利用し、簡單な便利な文法を工夫して世界語を造つたならば、決して全く新しい語ではなく、從來已に用ひられて居る言葉に基ついたものであります故、何國の人に取つても之を學ぶことは極めて容易な譯であります、此事は今より十五年前に「ドクトル、リプタイ」と云い人が「文明國の共通語」と題する書物に詳しく述べました、

今日世界語と謂はれるものは數種ありますが、孰れも前述の主意に從ふて、現在行はれて居る言葉から語原が取つてあります故、總て大同小異で皆學び易いものであります、當時流行の「エスペラント」でも、前に述べた「イヂォム、ネウトラル」でも此點は全く同樣でありますが、之は世界語を造る最も適切な方法に適ふて居ることと思ひます、前の「ヴォラピュク」なども語原は總て現在用ひられて居る言葉に基いて造つたのでありますが、餘り變じ過ぎたために恰も全く新しい言葉の如くに成つて何國人にも覺え難いものとなりました、例へばVolapükのVolは英語の World と云ふ字、pük は英語の Speak と云ふ字を基として造つたのでありますが、餘り甚しく變へたために英國人にも覺え難いものと成りました、一時評判の高かつた「ヴォラピュク」の遂に不成功に終つた主なる原因は此點に存したのであります。

以上述べました通り、多くの外國語を學ぶことの困

難は誰も感じて居ることとて、一定の世界語が廣く行はれる樣になれば此困難を免れることの出來るは慥であります、又今日の世界語は孰れも根本の主義は同一であつて、唯細かい點で相異なるのみであります故、皆大同小異で、蜜柑と橙ほどの相違もない位で、何れを取つても追々好い世界語を造るための基礎としては十分に役に立つものと思はれます、現在は斯樣な形勢でありますが、さて世界語なるものは將來如何に成り行くかと考へますと、其一般に廣く行はれるまでに至るのは中々容易なことてはありませぬ、世の中には理窟上では明に極めて好い事でありながら、實際には容易に行はれぬ事が澤山にあります、束髮や改良服ならば贊成者が各自勝手に實行さへすれば、其當人だけは實際便利が得られますが、言語は思想交換の道具であります故、一方のみが如何に熱心に世界語を贊成しても相手の方が冷淡ならば、實際何の役にも立ちませぬ、それ故餘程多數の人々が之を用ふるまでに至らなければ、世界語なるものは學問上でも商業上でも唯之のみて濟むと云ふ程の便利なものとは成りませぬ、それまでは從來の通り多くの國語を一々學ぶ必要が消へませぬ故、尚其上に世界語を學ぶことは餘計な仕事の樣に思はれ、忙しい人等は中々斯かるものまでには手を出しませぬ、されば一定の世界語が異國人間に廣く行はる時期は餘程遠い未來に屬することとて、私なども自分の一生は素より、子や孫の代に成つても、各國の學者が皆世界語で報告を書く樣になるや否や大に疑はしいと思ふて居ます、凡何事を判斷するに當つても自分の欲する所、好む所に引き入れられ易いは人間の情でありまして、私などは世界語の未來を買被る傾きがありますが、冷に世人の有樣を觀察して見ますと、世界語の未來は決して容易なことてはなく、之を廣く行はれしめるには餘程の長い時日と熱心なる盡力とを要するは明であります、然しながら世間一般に世界語の採用と云ふことを考へる氣運に向いて來たと思はれる事實は近來澤山にあります、特に萬國學術會議などの節には異なつた國語を話す多數の人々が集まつて同一の事

柄に就いて話し合ふのてあります故共通語の必要を感ずることが一層著しく、去る明治三十三年のパリー大博覽會の時にも、佛國理學奬勵會、理學史會議、萬國哲學會議、萬國社會學會議などが主唱者となつて、萬國共通の補助語の採用に關することを調べる若干名の委員を選びまして、其委員の發した書類を私の所へも送つて來ました、此事などは世間が追々世界語を用ひ始める前徴かと思ひます。

先づ斯樣な具合て、今日の所ては世界語の必要を認めて居る人々が大勢ありながら、直に一の世界語を採用することは爲兼ねて居る有樣てあります、世界語が一般に用ひられる樣に成つて仕舞はねば、世界語のみに依て不自由なく何れの異國人とも通信し得ると云ふ譯には行きませぬ故、今日世界語を學ぶ人は矢張他の外國語をも學ばねばならず、從來に比して世界語だけが餘計な負擔となる次第てあります故以上の如き有樣も決して無理なこととてはありませぬ、それまては、有志の者だけが集まつて未來の他人の便利を圖るために現在に自分等が多少の勞力を犧牲に供する氣て、之に當り、一方には世界語を成るべく完全にすることを務め、一方には之を成るべく廣く擴めて一人でも多く世界語に興味を持つ人を造る樣にと骨を折るより外には致方がありませぬ。

終りに當時我國に於ける「エスペラント」の流行に就て一言しますれば、その始まつてから今年まて二十年の間少しの音沙汰も聞かなかつたものが、此頃になつて突然喧しくなつて、書物も出來、雜誌も出來、新聞にも其ための欄が設けられると云ふ騷ぎに成つたのてあります故、徐々と進んで來たのとは違ふて、一時的の流行物の如き觀を呈するは止むを得ませぬ、日本人同志の間て、態々「エスペラント」語の端書を遣り取りしたり、襟に星形の留針を刺して、旅行したりすることは、ハイカラ的流行とより思はれませぬが、之とても練習のため、普及のために成るならば、敢へて咎めるにも當らぬと思ひます、何分一時に數百人の「エスペラント」家が出來たのてあります故、その中には

全く「ハイカラ」的流行物として之を玩ぶ人も幾らかはありましやうが、元來「ハイカラ」的流行を追ふ樣な人ならば、「エスペラント」をやらなければ、何か他の流行に釣り込まれるに違いありませぬ故、叱つて「エスペラント」を止めさした所で大した效能もありますまい、まだペンを持つてローマ字を書くだけでも「エスペラント」の方が宜しいかと思ひます、之は此頃の流行に對して、「エスペラント」攻撃の文章が一二の新聞雜誌に載つて居るのを見ました故、餘計なことながら一寸書き加へたのであります、然しながら、恐らく今日の「エスペラント」贊成者の大多數は眞に萬國共通の補助語として「エスペラント」を採用しやうと云ふ眞面白な考への人々でありましよう、斯かる人々か多數集まつて、根氣よく力を盡したならば、前の羅馬字會の如くに立消えに成るやうなことは恐らく無からうかとも考へられます、

『見神』及び『自稱神佛』の精神病學觀

呉秀三

近頃世上に自から神なり佛なりなど稱へ又見神などとて自己の悟道を語る人出て來りて又之に對する批評も少なからずあるにより遂に余にまでも之に關する意見を徵むる人あるに至りぬ是れ所謂『見神』又『自稱神佛』(讀賣紙上芙蓉道人の用語)などのことを病の爲に然かるにはあらずやと疑ふ向も少なからねばなるべし

偖て然しながら此病といふことは健と區別することの最も難きものにして病める時に健康の時にはなき特別の徵號といふものはあらす病の症狀といふもの大抵は皆健康態にもあり唯程度の異なるばかりなり發熱といふ者を見よ人に溫氣のなき人あらぬに比べて考へ見よ負傷といふを見よ誰人にも皮膚の摩擦(コスレ)による程の微

疵なき人は非ざるを見よ必竟健疾の差別は大小多少輕重廣狹など分量の差等のみなり左れば精神病の徵候にして是あれは精神病に相違あらじと斷定すべきものは一つもあることなし精神病者に見る症狀が屢精神健全なる人にあり少なくも之に似た事は尋常の人にも稀ならずあるものなり迷信は妄想に似たるものにして想像の盛なる有樣は幻覺と同じ樣なるものなり故に或人の精神病に掛れるや否やは之を判斷すること容易にあらず著るしき疾病は誰の目にも直に分明なれど輕きものになりては專門家にも分らざる事少なからず又第一疾病を疾病と判斷するには其人に接して其人を診察せざれば分るものにあらず特に精神の變態を然りとす故に今の文書其他の片斑によりて其人が病める否やは甚だ論じ難き事とす余は重き精神病に罹れる人の著書が世に盛んに行はれて人に賞められつゝあるを知り又一方には精神病者にあらぬ人の書きし物か支離滅裂狂人の手に成りたる如きもの多きは誰も知るところなるべし一個の著述ありて其論旨の病める事などはそを熟讀するによりても容易に判斷すべきも是は各專門學家の能くする事にして專門學家を須つて知ることにあらざるべし世には自稱神佛又は見神に就きて言說したる哲學家宗教家評論家多し余が精神病學上の見地より之を觀察することと又多少の興味を讀者に與ふるなるべし

近頃世に喧稱する『見神』のことは綱島梁川氏が三十八年五月新人といへる雜誌にて『見神の實驗』と題して其信仰上の經驗を公にしたるより初まりたるなり『見神』とは文字の用ひ方新奇なり神を見るといへるか故に神を目にしたるものと思はるゝなり而して當今に於て神を見ると云ふは殆んど妖怪を見ると同樣に解釋せらるべきは自然の勢なり此の如き事ある人は精神病にあらざるも神經の常經を失したる人にてあるなるべし故に世人の多く見神を幻覺とし從つて又綱島氏を精神病人と認めたる人あり又同氏は重病に罹れる爲に神經精神に障碍を生じて之によりて幻覺症を惹起して玆に神を目擊せるものと判斷したる人あり是れ故なきにあらずいざや少しく之を講究し見ん

第一に研究すべきは綱島氏の所謂見神なるもの自己其(それ)にして即ち最初に彼が其實驗を記載せる文字を些細に點檢することを要す抑彼が見神の實驗は彼の記載によれば前後三回あり

其第一回は三十七年七月某日の夜半目覺めて床上に座したるときにありて四壁靜にして心澄み冴えに〱たるとき優に朧なる歸依の醉心地とも謂つべき歡喜心の奥に溢れ出でゝやかて徐に全意識を領し十五分間も打續きたりと覺しき頃仄に消えたりと云ふ是れ此記載によれば綱島氏本人は一定の原因となるものなくして(必ず然りとは云はず彼の記載によりて推するのみ)卒然爽快なる感情の興起せるに接着したるものならんと思はる此の如き事は常人にもあり又病によりて神經過敏となれる人にも屢見る所なり此の如き事ありとて不思議にもあらねば又珍奇にもあらず常人とて病人とて屢遭遇することある狀態なりとす只綱島氏の信仰心及び其宗教的思想が之によりて啓發を受けたることが他人に異なる所にてあるべし

其第二回は三十八年九月末の事にて霽れ渡りたる秋空の下に在りて町はづれなる林巒遠く夕陽を帶びたるを打眺めて何となく心躍り此刹那忽然として吾は天地の神と偕に此森然たる眼前の景を觀たりてふ一種の意識に打たれたりと云ふ是れ此記載は恐らく綱島氏が一定の視覺及び之に關聯せる全身の感覺に伴ひて卒然一種の宗教的興感を起して之を此視覺等に結びたることを其材料としたるなるべし此の如き感覺又は想像が五官の感覺に附帶して發動し來ることも亦常人に於ても時として之ありと雖ども精神發育の不十分なるもの(子供の如き)精神の衰弱したるもの(癡呆の如き)又は神識狀態が稍恍惚朦朧となるもの(宗教的其他のエキスターゼの如き)等に於ては屢見る所の狀態なりとす此點に關しては綱島氏の宗教的歸依的熱情と同時に多少の自體の虛耗あるによりて此狀態を惹き起したるものと考ふるも亦場合によりては甚しく不妥當にならず同氏自身を診察する場合には或は此の如き見解の却て妥當なるを見出すやも知れずと雖ども然れども未だ

此事あるが爲めに一も二もなく直ちに同氏の神經に故障あり又は同氏の精神に異常ありたりとは判斷し難しとす

第三回は三十八年十一月のある靜なる夜十一時頃一燈の下に筆を取りて何事か物せる折如何なる心の機にか唯忽然はつと思ふや今までの我が我ならぬ我となり筆の動くまゝ墨の紙に聲する儘すべて一々超絕的不思議となつて眼前に輝きたりと云ふ綱島氏は更に之を書き更へて『今まで我として筆を執りつゝありし我が忽ち天地の奧なる實在と化り我は沒して神みづからが現に筆を執りつゝありと感じたり』と云へり是第三回の所謂實驗も亦第一或は第二と同一樣のものにして第二とは殊に似たる者なり此際に於て同氏の注意は或一方にのみ凝集して他方には散漫となり精神恍惚として意識は或一點に擅施して專ら宗教的の興感をのみ發現するに適せしめたるものなるべし是れ屢宗教濫溺者に多く見る所のものにして精神に異常あるものに來る事も多しと雖ども此一事は宗教に熱中し信仰に深耽する信徒の如きものに屢あり得ることにして之によりて直に神經に異常ありとか精神に障碍ありとか推考すべからず又此場合に於て余が此問題に興味を有する人々に注意したき事は綱島氏は神を見ると云ひて其用語の新奇なるが故に誤解されたることも多かりしならんと云ふ事なり此用語は如何にも新奇なるが如くなれども是は恐らくは『心の淸き者は幸福なり其人は神を見得べければなり』との基督の語を用ひたるにて其信徒に取りては新奇にもあらぬ語なるべし彼は神を見ると云ひ又眼前に輝きたりと云へどそは自から之を眼前に物體などを視ると同じに目擊したりと云ふにはあらず我は沒して神現に筆を取りつゝありと云へど彼自ら我を失ひて不全又は完全の意識沒了の狀態に陷ゐりたるにも非ず彼は二我を生じ自己と神との二重の精神生活をなせるにも非ず自己の我は神靈の崇高なるを完全に鑒識して且之を深厚に景仰し自から之に接近して得達せんとするの感興を得たるのみなり(彼自身には否此の如き淺薄の事にあらずと云はんも)彼は故に其時の感を記

して『無限の深き寂さの底ひより堂々と現前せる大いなる靈的活物とハタと行會ひたる樣の一種の錯愕驚喜の意識は到底筆舌の盡くし得る所にあらず』と云ひて大靈なる活物に行會ひたる樣の感覺を生ぜるのみなることを告白せり彼は神に遇ひたるにあらず神に遇ひたらんか如き心地せるなり

之に由りて是を觀れば彼が見神なるものは其記載によれば古昔より類例の數多あるが如く又精神病者に屢見る如く神の形を目擊し神の聲を耳に聽き又は極樂又は地獄に往來實履するが如き事にあらずして唯精神内に於て深く感得して心を神にし心に神を見るのみなり目に見たらんか如くにて想像の活潑となりしものなるべし是れさながら昔時の神佛教徒の大家が大悟とか得道とか云へると類似したるものなるべし彼は單に一定の心身狀態を以て一定の周圍狀況によりて宗教的爽快感興を惹起し又は圓熟的認識(自信的に)を得たりと云ふに過ぎずして彼が果して所謂見神の悟域に達したるものなりや否や彼は果して其域に達すべき道途に上りたるや上りて其幾何程を了りたる者なりや等の如き事は決して容易に此事實の有と無とによりて推知すべき事にはあらず是故に綱島氏の見神を見て頭から幻覺なり妄想なりとするは恐らくは其當を得さるゝし實際に於ては或は是等の病症なるやも知れざれども其譬喩的彩藻的なる記載によりては未だ俄かに其病症あるが故に然りと斷定することを得ず綱島氏は曰く『神を見るは感ずる也アーネンする也實參實證する也觸發する也』と『見たり會たりとは皮相的なり神我の融會なり合一なり予自ら殆と神と融け合ひたるなり』と是れ正に目に感し視るにあらずして心に感じ心に證するを云ふものゝ如し

綱島氏の所謂見神は上に述べたる如くにして幻覺にも錯覺にもあらず妄想にも迷信にもあらず彼が實際の心的感得なりとす而して此心的感得を履むに至りたるは其身體の疾病なき場合に於ても之あらん其身體の疾病の爲に其神經の虛脫に陷ゐれるか爲めには猶ほ容易くも此に至ることあるべし故に彼の此實驗を得たるに

就きては或は疾病の之に關係せる事も所もあらん此事に關しては宗敎熱心家殊に所謂巡禮者行者の如きものが身體の虛脫（一時の衰耗）又は精神の不安等のある時に於て最もよく此の如き狀態に陷ゐる事あり甚しき場合に於ては幻覺錯覺をも生ずることあるを考ふれば思ひ半ばに過ぎなん然れども之が爲めに綱島氏の所謂見神の實驗なとをは同く疾病的なりと速斷することは此に反復して述ぶる如く恐らくは不妥當なるべし但し綱島氏の此記載が世上の宗敎家其他に及ぼす影響に至つては又別問題に屬し余は別に又精神病學上より是等の事に就きて懷抱する意見なきにあらざるも今は之を細論するの時機にあらず余は唯綱島氏が病間錄に於て見神に關して記載する文字の餘りに『辭藻やゝ繁くして意義明瞭ならざる』爲に讀者の間殊に低識者の間に誤解せられて以て世俗を蠱惑するの本源となることもあらんを恐るゝのみ

綱島氏の此記載の出でたるは時勢にもよらんか是に前後して同樣の揚言は所々より起れり後段猶ほ別に述ぶべき豫言者宮崎某の如きも『月島の月夜に靈覺に觸れて廓然一大悟す』と云ひ追立某なる人は『一夜心機一變して頭を擡けると朗耀して一個の像が現れて音聲を聞くではないが心を便りて像が私に通告したのか恰も聽覺による如く感じた』（求道二卷十號）と云ひ中島某も綱島氏と同樣に見神の實驗を描きて『神の內に我が溶解込んだ樣な感がして神と自分との間が明瞭でなくなつた』と縷述したり此諸氏が感得せるものは互に相ひ類したれども各人の精神界吾人の意識內容及び其狀況の異なるによりて其感じたることは各殊なるべし假令其感じたる所及び事は同樣にしても之によりて到得たる各人が宗敎的見地は必ず各殊ならざるを得ず從つて又所謂見神の實驗即綱島氏等が記載せる如き狀況の經驗ありたればとて之なければとて其人の道德心又は宗敎心の高下輕重は其詮衡を變化することあらず從つて又此の如き經驗を累ねたればとてそは必ずしも大會得大得道したる人にてもあるまじ況んや若し其經驗にして尋常精神の產物たらず又は世に衒ひ人を賣るた

めに虚構されたる場合に於てをや

見神に關することは既に說き了りぬ是よりは少しく自稱神佛に論じ及ぼさん

自家を評價することは甚だ難きことなり自家を明瞭に批判することは更に猶ほ難し而して人々皆各自己に關する明白なる又は暗昧なる觀念を有し之によりて所謂自覺てふものを生ず自覺は時として亢盛し自己を實際以上に感覺す是に於て自負を生ず之に反するとき又自己を實際以下に感覺す之によりて自卑となる自負を生ずるとても其人は尋常の人なること甚多し其感或は正當にして或は不正當なり不正當なりとて其人は必ず病めるにもあらざれども病人に於て自負の心甚く顯著となるもの多し多數の精神興奮せる病人は然りとす又生來より精神の常規を失へる謂はゞ半狂人にも此の如きこと多し而して此自負自尊は精神發揚して心氣爽快なる一徵候として來ることもあれば又妄想と稱する徵候より起ることもあり妄想とは事實なき空想を云ふにて友人が親切に世話をなすをは自己を殺さんと謀るものと信ずる如き被害妄想自己に少しも金錢又は才能なきに鉅萬の富あり又は絕代の偉人なりと信ずる如き皆妄想なり(誇大妄想)誇大妄想ある病人には自負自尊の心あると考え易き事なり彼の自稱神佛者を見るに動物神を唱ふる宮崎氏數學敎を唱ふる齋木氏又神なる人と稱する末廣氏等の言ふ所は稍正道より蹈み迷ひたりと云はざるを得ず是れ哲學者宗敎家批評家一般學者の知る所なるべし余は敢て一々其言說に向つて駁擊をなすことをなさゝらんとす唯其雜駁なる所說を以て眞理とし又之を基礎として稍宗敎的容儀を潤飾して之をは神儒佛耶以上の宗敎なりとなし輕きは『眞理の榮光と權威とを天下に發揮せん』と云ひ甚しきには自己を自から指して釋迦耶蘇の後なる『第二豫言者』とし我を見るは『神を見るなり』我は『救世の大使命を帶ひて生れたり』我は『眞理の使者なり』『萬能者なり』『我は乃ち神なる人なり』と揚言するが如き自己の價値を知るを得さる不明僭越の言にて其人は所謂自覺に於て尋常の度を失するものと云ふべし從つて彼か自己の周圍を判

斷するの明を欠き居るを見るべし然らされは此の如き揚言をなして憚らさることなきを得べき道理なければなり故に彼等の言は狂者の言に類し彼等の思想は誇大妄想に酷似したり

然れとも此の如き自覺の錯誤は前にも述べし如く病によりてのみ現はるゝにあらずして尋常精神の人にして此の如き過失に陷ゐるもの世に幾人ありや知るべからず故に此の如き事故ありたればとて直ちに是等の人々は精神に病ありとも其神經に異常ありとも謂ふことを得さるは明なり余の見る所によれは前三氏の説は皆迷謬たるを免かれされとも其中にて齋木氏の言説の如きは途方もなき自負心の開陳なく其論法より見るも熱誠に餘りて全く偏信の過重なるより來りたる錯誤に出てたるものゝ如く病の爲らしき點は更になしと云ふも可なれとも宮崎氏末廣氏の言説の如きは稍尋常以上なる所あり宮崎氏に就きては神は則ち我、動物も亦我、早く云はゝ神則心靈動物則肉體と云はんか人間は神と動物の合一取も直さす人即神神即人神の以外に人間なく人間以外に神なしなとの卓絕非凡の議論を開く他に自から第三豫言者と稱しメシヤ佛陀と稱し自己の出現により『光は世に照れり』『天國は早や近つけり』耶蘇も佛陀も歸一せり東西の宗教的信念は統一せりとし自己を以て『宗教の大王』『絕對の顯現眞如の現化彌陀如來の出現とする等太古か中世ならは兎も角現世に於て此の如き揚言を敢てするものは誰の目にも稍異彩ありと感せらるべし今の世に於て二十二歲の淺學の少年か山中に引籠んて沈思默考したり又は月夜に靈光を浴ひて物に感したりして千歲罕聞の大哲理大敎念なとを發明することありと云ふともそを信するものよもあらじ此の如き事を揚言して眞實自から然りとするものは精神に異常あるものか左もなくば自己精神に節度を加ふる能はさるまでに變質せる人か抑亦是等に精神狀態の近接したる偏見狹識の人なるべし

宮崎氏の著述なるものを見るに右の形迹言説の他には言説も手短にして文筆上に於て異常らしきことも見されとも此よりも稍常徑よりを離れたるは末廣氏の言

說なり余は勿論大坂タイムスにて其筆錄を見しのみなれとも彼は尋て諸新聞紙に廣告して自から『我は救世の大使を帶びて生れたり』『我は現世を破壞して新國を建設せんか爲めに全權を帶び來れる眞理の使者なり』『我は萬能者なり』『我は大和魂の精華也』『我は乃ち神なる人なり』など宮崎氏程度の誇大的思想を發表せるの他彼の言說を見るに思路紆餘として條理曖昧なる所多く讀んで徒らに長々しきのみにて其主旨は中々に捕捉すべからず其言辭文體は精神病者殊に其一種なる妄想性癡狂患者の記述する所のものに酷類したり而して此種の患者にも亦誇大妄想なるものゝ現はるゝ事多く宗教的大妄想を懷抱して癲狂院内に捿息するもの類例に乏しからす然れとも余は同氏に接したることなければ從つて又同氏の身體精神の狀況を知らす同氏は恐らくは病者にはあらさるべし誇大の言は謬信に基き紆餘の文は不學に基く等其他色々の事にて然ることもあらん余は唯某氏の望によりて余の思ふ儘を記すのみ

想ふに是等自稱神佛者は皆既に常經を離れ常識を失したるものとして精神尋常なる人もあり精神異常なる人なしとも限らす然も此の如き人の輩出するは宗教の發達に變調あり又は其狀態に擾動あるによるものならん余の信する所によれは是等の人々の言說は其人か精神に變調あるか神經に異常あるか又は常識に乏く論理に疎きより謬見僻思に陷ゐりたるによるか或は又何か爲にする所あり自己の利益の爲に殊更に奇言を弄し奇蹟を衒ふに基くものなるべし

抑宗教思想の完全に發達せさる時代に於ては此の如き尋常ならさる主張をなす人多數を生するは已むを得さることなり此の如き人多數を生する時代に於て其時代其方面の識者又は先輩は最も愼重に身を律し世を率ゐることを要す余は此點に於て綱島氏にも亦其の言說の稍愼重ならす其餘りに彩麗にして又餘りに神秘的なりしことを惜む

清廷の大謬見

福本誠

一

昨今北京よりの飛信は頻々として官制改革と憲制採用との議あるを報じ來る。是れ曩に東西列强に派遣せられたる出洋大臣等が歸朝復命の結果にして、北京の廷上には守舊派、革新派、滿人派、漢人派のマンダリン輩相聚まりて、日に論戰の花を咲かすが如し。愚なる哉清廷の擧や。彼等は開國八十餘年、歐米と國交を聯ねながら、未だ今世國家の意義を知覺せざるに似たり。其倥侗愚劣以て譬ふ可き無し。之を敎へ、之を戒め、其れをして革政の正鵠を得せしむ可きは、唯彼の善隣たる我國これあるのみなるに、未だ我國の政府にして切實なる一忠告すら與へしを聞かず。又東京及大阪に在る所の新聞といふ新聞の之を論ずるを看るに、一併に皆枝葉瑣末に走り、一も肯綮に中るものあらず。其他善隣の國誼に資す可き堂々の機關として、東亞同文會、東邦協會等の如き、帝京の中央に併立しながら、茫々として相關せざるものに似たり。豈に明は秋毫の末をも察しながら、輿薪の大をも看ざるものは、即今の政事家及政論家の特質なる歟。清廷の愚や笑ふ可しと雖も、邦人の迂も亦愍む可きなり。抑々制度の死文を以て天下を治め得べしと思惟するものは、清國人の病根なり。其れにして果して天下を治め得べくば、從來在る所の「大清會典」にして萬事足れり。「會典」往々今日の事宜に合せざるもの無きに非ざるも、若し善く之を充實し來りなば、彼國は決して今日の如き紀綱の失墜を見ざりしならん。請ふ試に彼の六部を稽へよ。内政には吏部あり。財政には戸部あり。兵政には兵部あり。司法には刑部あり。善く時と變通せば、工部は以て農商工務に應じ、禮部は以て文部及敎務に應じ得べきなり。當初の會典に缺げたるものを求むれば、獨り對等の外政を治理す可き外部あらざりしのみ。然るに彼は六部を荒廢し、其名あれども、其實あらず。是に於て乎兵備整頓の必要に會するも、兵部に能力なく、

海には海軍衙門を新設し、陸には練兵處を創建せざるを得ず。海關は戸部の一掌程たる可きものなるも、戸部は無爲にして、雇傭の外人をすら統御し得ず。是に於て乎別に海關衙門あり。萬機の主裁處に於ても亦又然り。「會典」には初より内閣あるも、内閣は宛然たる養老院となり、天下の大政を出すに足らず。故に之を前にしては、別に軍機處の現ずるあり。之を後にしては更に政務處の出づるあり。統體の解けざらんと欲するも得んや。清國の事多くは斯くの如し。故に彼國に於ては、制度なきに在らずして、之を死文にして、廢て、實行せざるに在り。終に有名なる公法學者アルチュール、デジャルダンをして、支那人には行政的能力なしとまで激言せしむるには至れるなり。之に關して端なく想起する事こそあれ。我曾て知を蒼海副島先生に辱なくし、又深く清國の亡命梁啓超と相識れり。啓超一日蒼海先生を訪ひて、談日清の國勢に及ぶや、啓超進みて問て曰く、日本の明治維新、一擧にして彼が如き宏業を成功し、彼が如き隆政を復興せり。知らず中興贊襄の諸氏、何種の書史を讀み、何等の泰西に獲る所ありて、斯くの如きを致ししや。先生幸に其書名を惠示せられよ。之を漢譯して、以て本國に傳播せんと。先生之を聽き、喟然として曰く、貴國の開國、我國に先だつこと數十年、泰西の書史早く貴國の飜譯に上るもの尠からず。吾人が始めて歐米の情勢並に其制度文物の一斑を窺ひ知るを得たりしもの、多くは貴國の惠に頼れり。予が中興の盛運に際觀し、外務大臣の重任に膺りたるも、其元はといへば、夙に漢譯の萬國公法を讀み居たりしを以てなり。乃ち知る可し、爲さんと欲すれば、一部漢譯の萬國公法を以て、帝國の外政を燮理するを得べし。憾むらくは貴國の士太夫爲すあるを思はず。萬卷の佳書を譯出すと雖も、徒らに瓶を覆はんのみと。啓超赧然辭なくして退けり。今日清廷が制度の改革に狂騷する、亦是れ日歐萬卷の佳書飜譯業と一般のみ。我をしていはしむれば、請ふ其本に反れと喝破せんのみ。

二

清廷が官制の上に反省を加へ、從來在る所の內閣及六部をして太祖創設の本旨に復せしめ、能ふだけ他の官衙を廢して、閣部の管掌に歸し、中央政府の政策及政務をして一途に出てしめ、同時に地方の諸省割據の陋體を一新し、京の內外を通じ、國政統一の形體を官制に現出せんと欲するは、強がち非斥す可きに非ず。然れども彼等の主とする所は、單た死文の官制のみに在り。官制をだに一新すれば、統一の實得て庶幾す可しと思惟するもの、是れ彼等が政事の第一義に覺到せざるの證據なり。何を以て之を立證すといふ歟。同時に彼等が憲制創設を計畫し來れるに由りて之を知る。是れ此計畫は明かに彼等が未だ今世立國の眞諦を領得せざる者なることを、自ら天下に表白し來れるものなり。

茲に後學たる清廷の爲に今世立國の要義を概說す可し。即ち今日世界に在る強國といふ強國は如何なる政史を通じ來りて、強國たるの實體を具備したる歟。試に之を佛、獨、墺、伊、日、露、米の七強に徵せよ、歐洲の中世即ち封建割據の時代に在りては、佛、獨、墺、伊、露の五國は、一も今日の如く大なりしものあらず。而して時世は漸く統一したる大國家を要求せり。是に於て佛國は內亂の忌諱を冒して、國內を統一し、ブルボン家の王政を扶植したる結果、朕即國家とまで公言せし路易十四世の全盛を現じたり。故に佛の強國たるは、大革命を待ちて始まりしに非ざれば、拿破崙一世を待ちて起りしにも非ず。國政統一の日に於て既に強國たるに至りしなり。獨逸に視るも亦然り。此國が久しく列強兵馬の巷となりたるものは、境內に幾多の王公國ありて、久しく紛爭したるに由れり。ホーヘンツォルレン家一たび興りて、次第に勢力を擴大し、普墺及普佛の二大戰役を經て、盟主の權を王家に收め、茲に統一せる獨逸帝國を結晶するに及び、其勢威は始めて世界に伸張し來りたり。即ち獨逸の強大なるは、國內統一の賜のみ。次に墺國の強大を致したるは、オートリシャ、スチリー、チロール、カレンチー、トリエストを統一し、進みて匈牙利を併せ、謂ふ所の墺匈帝國を建造したりしに由れり。而して今日其國勢の動

もすれば昔日の如くなる能はざるものは、漸く統一の要素を失ひかゝりしを以てに非ずや。伊國に至りては、最も近世の創建に繫れば、人々善く之を知らん。其邦土は久しく分離し、强國の爲に齒せられざるもの數百年なりしを、ヴィクトル・エムマニュエルの撒爾塞より起り、之を統一して伊太利王國を開くに至り、始めて强國の一とはなれり。大露帝國に於ても亦又然り。此國が草昧野蠻の狀態より一出し、始めて西歐の列强に抗禮し、遂には世界に雄視するに至りたるものは、彼得大帝が壯圖を企て、爾後の列帝が其遺旨を承け、固有の露領を統一し、兼て波蘭、高加索韃靼、西伯利等を併呑し、「パンスラヴィスム」を實行したりし由りてなり。今日國內に紛擾ありて、政變往々測る可からざる情態に陷れるも、依然外に對して其國威を失墜せざる所以のものは、國政の統一せられたるを以てに非ずや。我大日本帝國の國運隆々として興りたるは、維新の壯擧、以て國內の三百諸侯を廢止し、政權を帝室に收復して、國政を統一せられたるの結果なることは、接近したるだけ、それだけ清廷の善く目睹せし所ならん。故に多く細說を要せず。獨り米國は建國少しく異なるも、彼の富强なる所以の主因は、名詮の自證するが如く統一國（ユナイテツト、ステート）たるに由れり。而して彼が近世列强の間に聲威を振ふに至りしは、國內の南北戰爭を平定し、益々統一の實を鞏固ならしめたる以來に非ずや。

三

佛、獨、墺、伊、日、露、米の七國が堂々たる强大國となりたるものは、皆幾多の困難を冒し、國政を統一したるに基するや彼の如し。强大國の强大國たる、今世國家の今世國家たる所以のものは、主として此に在り。何となれば之に非ざれば、內は其國の秩敘を維持し、外は其國の獨立を捍衛し得べからざればなり。今其れ淸國の現狀如何と顧みよ。其面積は一千百十一萬五千平方基魯にして、其人口は三億六千萬乃至四億と稱せらる。之を歐洲の總面積一千萬基魯、總人口三億に對比すれば、面積に於ても、人口に於ても、淸國は全歐洲のそれよりも多大ならずや。斯る廣土稠民を有

しながら、高の知れたる拳匪の內亂すら、之を鎭壓する能はず。一旦外國の來侵に會すれば、其席卷掠略に委せ、未だ嘗て頸を其の前に抗するを得ず。最近の適例は日露戰役に在り。露國縱まゝに大兵を滿洲に入れ、其儘此土を橫領せんとするに、淸國は之を擊攘するの力あらず。日本起ちて露の無法を嚴責し、終に戰端を開くに至れるも、淸國は日本軍に合して、倶に征討に從事することをすら敢てせず。是れ一に後難を畏怖するに由りてなり。淸廷たるもの之を思へ。今の世界に堂々たる一獨立國として建立するものにして、自國の領土內に他の二强國の會戰するに當り、其領土を抛却して戰場に委し、他の自國の爲めにする義軍をすら援け得ず、局外中立として傍觀するが如き阿房ある歟。國として意氣地なく、名譽なく、義を知らず、恥を知らざる、以て焉に加ふる莫けん。是れ實に今世國家の意義に照し、全く無資格なるものなり。是れ畢竟國政を統一せざるの致す所のみ。故に今日淸廷が列强に學ぶ可き所のものは、第一に國の統一なり。統一的國家の建立なり。試に思へ。淸國の領土は日本に十餘倍し、其人口亦日本に八倍する以上は、之を有効に統治するには、亦日本に數倍するの國費を要す可きは、事理の最も明白なるものには非ずや。然るに東京の政府は四億圓以上の國費に生活せるにも關はらず、北京の政府は一億兩(テール)足らずの國費に食めり。一千百萬平方基米と彼の所謂四萬々の人民とに臨みながら、一億兩足らずの國費にて統治も何も出來るもの乎。是れのみにても彼れ淸廷が國家を代表し得ざることを天下に公表して餘りあるものなり。

然らば淸國は遂に今世國家を成し得べき要素なきかと問へば、斷じて然らず。人民の資力は優に大國家を構成するに餘りあり。現に此國の經濟及財政に精通せるロバート・ハートの調査に據れば、一エクタール即ち我一町歩二十五畝每に壹兩(テール)半の地租を徵するは、民度に於て決して過重に非ず。而して是れのみを徵するも、優に四億兩を收むるを得べしといへり。是に由りて之を觀よ。淸國の財政にして善く統一せば、六億乃

至七億兩の國費を中央國庫に集中するは、不可能の事業に非ず。既に中央に六七億兩の財本を備へん乎、ハートの設計の如く海に八十隻の軍艦を浮べ、陸に百萬人の精鋭を蓄ふるは、意に随ひて成就せんのみ。既に海に八十隻の海軍あり、陸に百萬人の陸軍を備へん乎、内は内亂を鎮壓して、秩叙を維持し、外は外寇を擊退して、獨立を捍衛するに、力の足らざるを憂へざらん。故に我は重ねて之を言ふ、清廷の今日列強に學びて、全力を用ゆ可きは、國政の統一に在り。少なくも財政及兵政の統一に在り。是をこれ察するの明なく、徒らに諸制度の死文を修めて、國家の再造を贏ち得んと欲す。無緣の衆生度し難き者歟。

四

愍む可きは清廷の出洋大臣輩なり。彼等が歐米及日本を巡回したる結果、立憲制度に歸依したる動機を一番射中て丶遺はさん。歐米は勿論、歐米に模倣したる日本までが、揃ひも揃ひて文物燦然として、國運隆盛ならざるなく、而して其國は又揃ひも揃ひて立憲制度を採用せり。是に於て乎無識なる彼出洋大臣輩は速了せり。歐、米、日の今日あるは、立憲制度の結果なり。立憲制度をさへ採用すれば、清國は忽ちにして歐米たらしむ可く、又日本たらしむ可しと。斯くてぞ歸朝復命するに、立憲制度の必要を以てし丶なれ。而して在廷の一知半解的高襟輩亦た和して之に同し、終に昨今の廷議とはなりしなり。彼等にして此言を傳聞せば、其れ我を以て伏羲氏の遺法者とし驚かんのみ。我が彼等の倥侗を愍笑する所は實に此に在り。彼等の無學無識なる原因と結果とを顚倒せり。アングロ・サクソン系の人民が立てたる國家を除くの他は、大國家を成したるが故に、立憲制度を採用せり。換言すれば、強大國となりたるが故に、立憲制度を採用したりしのみ。其故如何、請ふ少しく之を詳説せん。

立憲制度なるものは、其性質上働き掛けの制度に非ずして、受身の制度なり。進攻の機關に非ずして、防守の關門なり。上に我概論したりしが如く、十七世紀以降歐洲の列國は、存立の必要上より國政を統一し、

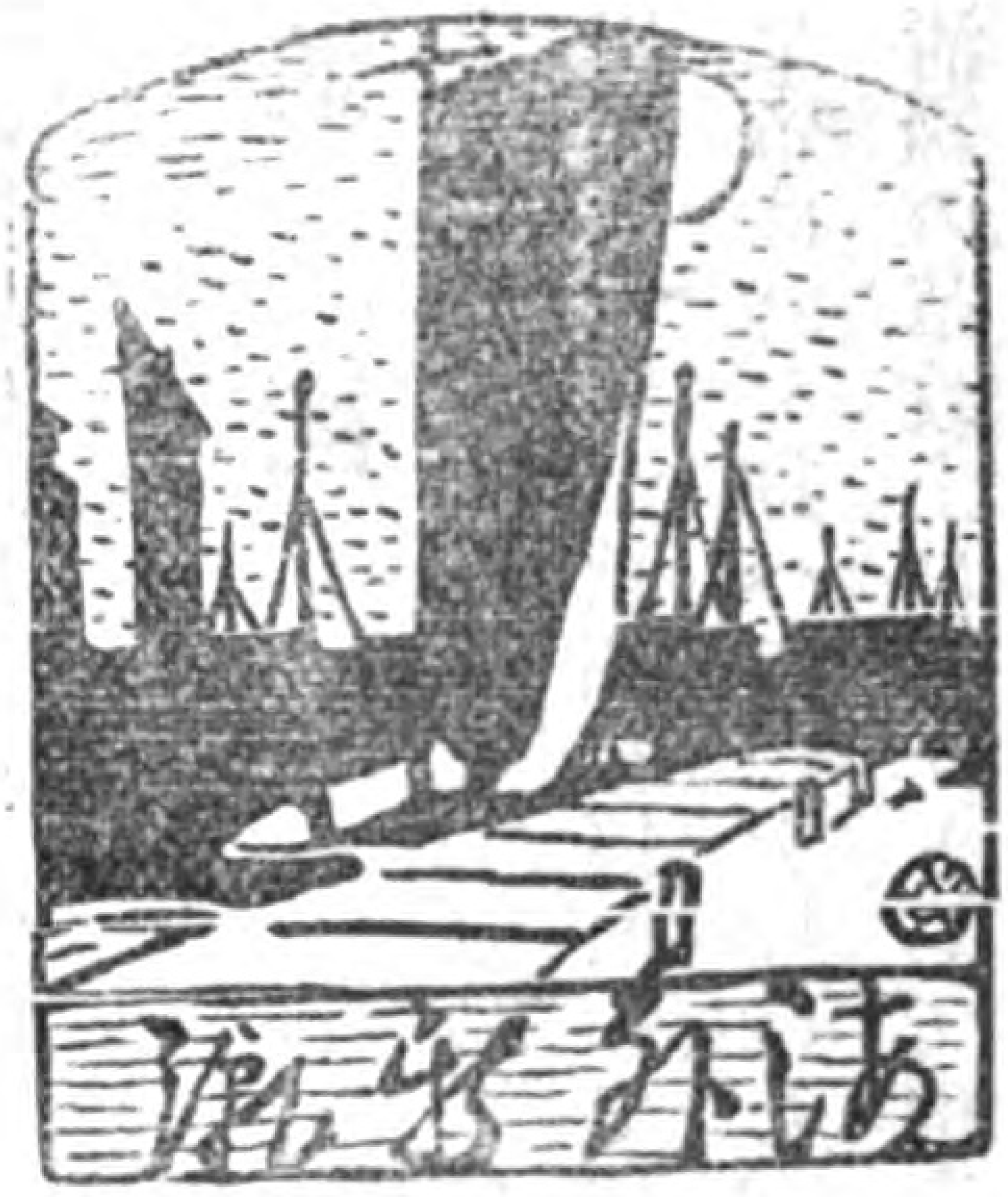
且つ之を擴大し來りたれば、孰れも前古未曾有の大國家となれり。國家既に未曾有の大國家となれば、之を代表する大政府の權力も、亦た未曾有の强大を加へたり。甚しければ上にも擧げしが如く、其君主にして朕即國家とまで公言する者あるには至りたり。國家の權力此に至れば、當然其國家は大有爲の資を負ひ來る。是に至りて之を思へ。凡そ大有爲の資を負ふ者は、動もすれば事を好むの偏傾を免かれず。即ち善事として大善事をも爲し得る代りに、惡事として大惡事をも成し得べし。故に君主にして土功を好めば、無用に一國の財力を窮竭し、主權者にして侵略を喜べば、無益に全國の紅血を漲流せしむ。是が爲に直按無限の荼毒慘害を被る者は、則ち多數の國民なり。是に於て乎始めて立憲制度の必要あり。立憲制度は國家をして大それたる惡事を爲さしめざる關門なり。一定の區劃を設け、之より外に逸出せしめざる爲の閾なり。列强の國民が國家を奉じて憲制に納れたるは、則ち是が爲なるに外ならず。淸廷の卿相は定めて盲史に熟す可し。其盲史には「納二民軌物一」といはずや。今は「納二國軌物一」たるなり。歐洲の憲制は是に由りて始めて生ぜり。日本に於ても亦又然り。維新の大革命は大國家を産出し、一たび産出せられたる大國家は、大善事を成し得べき資質を具へたると同時に、大惡事をも敢行しかね間敷形體を成し來れり。是に於乎明治五六年より國民の先覺は立憲制度を要求し始め、約二十年の後に之を定立せり。今日露國の國民が身家を賭して、之が必立を爭ふも、亦實に如上の必要を公認し來りたればなり。故に露國立憲の要請の如き、自然の催促にして、毫も、間然す可きなく、吾人無關係の國民と雖も、亦露國の希望に同情あり、獨り淸國に至りては、未だ統一したる大國家をすら建立し得ず。即ち一國として大善事は勿論、一國の忌諱を犯す可き大惡事をすら爲し得ざる國家なり。最も短直に之を言へば、未だ今世國家の列に入らず。今其れ今世國家の階段にすら其脚を踏みかけずして、立憲制度其物に藉して、國を强大國たらしめんと欲すとは、見戲も大見戲、寧ろ是に由りて政想

なき人民に參政の權利を與へ、さなきだに口より先に生れたるに等しき小やかましき人民をして、其妄議を逞しくせしめん乎、其の到り極まる所、果して奈何と爲すや。多少高等なる常識と政想とを有する者は、容易に之を判斷することを得べし。之を要するに清廷大臣輩は歐、米、日の美觀を皮相し、結果を原因と誤了せり。事も笑止や、結果は結果なり。原因は原因なり。原因は必らず結果を生ずるも、結果は斷じて原因を造らず。我は最後に清廷に對し、重ねて丁寧に告げんと欲す。請ふ其本に反れ。統一は刻下の急務、憲制は未來の業務のみ。垂死の老國を現代に復活せしめんと欲しなば、意義の世界に適用する今世國家より先づ定立し來れ。

追記

本論を草したる後、倫敦及北京よりの電報に接す。曩に清國出洋大臣等が歐洲を巡回して伯林に到るや、獨逸皇帝は意を加へて之を款待し、延見の日皇帝親しく清國の革政上に諄々として何事をか懇諭し給ひしと。而して在北京駐剳の獨逸公使は近ごろ北廷の諸大臣を歷訪し、說くに日本的革政の愛親覺羅家に大危險なる理由を以てし、清朝の泰安と清國の自彊に適合するものは、獨り獨逸流の國家主義あるのみなることを盛に稱道したれば、清廷の議大に之に傾き、日本を疎外し、獨逸に信賴するの風日に滋長しつゝありと。是れ早晚必至す可き事相なり。我、本論の首に於て我當局が切實なる忠告を敢てせざりしを遺憾とせしも此に在り。惟ふに斯くの如きの事相は、今日に在りては未だ甚しきに至らざる可きも、歲月の進移するに從ひ、革政の失敗するに伴ひて、大反動の飈起するに會す可し。我見謬れる歟。將た謬らざる歟。茲に記して以て異日の後驗に備ふ。

紙面狹隘の爲前號に豫告せる原稿を盡く收錄する能はざりしこと偏に讀者並に寄稿諸大家の諒恕を請ふ次號の豫告は各欄の終を見よ



波斯問題

『デーリーメール』

近時の電報は益々波斯問題の逼迫せることを報導す。「中東(ミツドル、イースト)に於ける病人」の分裂も將さに近きにあらんとす。

最近二世紀の間露國は常に其眼を波斯より放たず、孜々として之を自國に吸入するの策を講ぜること、殆かも彼が極東に向て施せる所と異ることなし。然れども日露の大戰一度び開けて、露國の勢力失墜し、加ふるに國內に於ける革命の運動益々盛なるや、露國の中東に對する政策も遂に一大頓挫を來しぬ。而して露國に代て中東の勢力として現出したるものは他の一層恐ろべき國家也。近十年來獨逸も亦波斯灣に向て其眼を注ぎ、灣に臨める該都市に向て領事を派遣したり。然れども露國が今回の打擊を蒙るまでは、其野心を露骨に表示し、灣內に於て主權を要求するの意を明示することは獨乙に向て危險なることなりき。然れども露國が外には極東に於て大敗し、內には革命騷動のために疲弊せる今日、獨逸は何の忌憚する所なく、直ちに其假面を剝ぎ捨てたり。露國の友情及び恩惠は最早や獨乙に於て要なきものとなれり。而して今や彼は中東に於ける主權者の位置に立たんことを目的としつゝあり。

然れども彼獨乙が波斯に於て相對抗せざるべからざるは英國也。若し獨乙の目的を實現せんとすれば英國の利益を侵害することゝなり、二國は互に相扞格することなくして自國の權利を伸長することを得ざる也。露國が極東に於て旅順口を奪掠せしや、獨乙は膠洲灣を奪掠して東洋人殊に極東人をして恰かも警鐘の耳に迫るが如き危險の感を起さしめたり。是に於て日本は起て滿洲の廣野及び支那海の波濤の上に此大問題を解决せり。獨乙が今や極東に於ては忌憚なき威力を振ふ能はざるに至りたるもの全く日本の勃興によることは言を俟たざる所なり。

然れも波斯灣には日本の如き國一もあるなし。而して日英の間に結ばれたる印度國境に對する攻守同盟の如きも實際波斯灣迄は含まざるものとすれば益々其然るを思はざる能はず。されど此攻守同盟の範圍に至つては未だ世間一般に知られざる所なればこゝには論ぜず。兎に角英國は何れよりも印度を侵害せられざらんと欲すれば必らず堅忍不拔の勇氣を以て準備せざるべからざるなり。何となればマハン大佐の明言せるが如くよし形式なりとも、はた亦商業上の實際利益なりとも、若し英國が波斯灣頭に於て一歩を讓れば、是れ英國の東洋に於ける海上權、印度に於

ける支配權、商業權、及び英濠間の結合を危くするものなること必せり。此論をなしたるマハン大佐は決して、妄言以て世を驚かすを好む人にはあらず、實に公平にして沈着に、其戰術及び海戰上に於ける見識は世の等しく嘆賞する所の人也。此人にして此言あり、以て如何に英人にとつて波斯問題の重大なるかを見るべし。

然れども確實にして動搖せざる外交は必ずや其背後に確實にして動搖せざる國民の助力なかるべからず、而して國民の助力よく國家の實力をして充實せしむるに至て初めて眞に力ある外交をなすことを得べし。今や英國海軍の擴張は甚だ思はしからざるの位置にあるに拘らず、獨逸海軍は戰々として膨脹しつゝあり、加ふるに陸軍の精鋭他に比すべきなく、又其外交に於ても毫も感情に支配せらるゝことなく常に一定の目的を貫徹するに勉む。偉大は決して廉價を以て買ふを得ず。若し波斯に對する政策にして誤らんか、英國の前途甚だ杞憂に堪えざる次第也。



KIKT OUT.
—Morris in the Spokane *Spokesman-Review.*

日英の交誼を害せんとするは誰ぞ

『ナショナルレヴュー誌』

昨年八月日英同盟條約の更新ありしより以來、英國が日本と交誼を厚うするの必要は益々明瞭となり、國人の之を歡迎するの意向も愈々確實となれり、然るに彼の「不平好き」なる新聞通信員等が漫りに日本に對して惡言を放ち、日本の陸海に於ける戰勝の一主因をなせる聰明なる秘密主義を以て甚だ惡むべきものとし、又彼の滿洲開放の如きも只徒らに好辭を振り撒きて一時を瞞着するの手段に過ぎざるべしと攻擊しつゝあり。而して假令此等の記者流の惡言は度外に附して可なりとするも、外に容易ならざ

ろ日英交誼の沮害的勢力のあるあり、即ち外交界の一部に於て彼の記者流と同一の思想を以て兩國の交誼を沮害せんとするものあることなり。こは世間に流布すること甚だ少きも、其少き丈け却て危險の分子を含むことの多きは少しく政界の事情に通ずるものゝ知るに難からざる所なり。吾人の見る所によれば、英國の内閣が更迭して自由黨(リベラルス)内閣となりし以來日本に對して頗る冷淡となり、却て露國と交情を溫めんとしつゝありといふ誤りたる觀念を東京に於て流布せしめつゝあるは疑もなく獨乙の外交策より出でたるものなりと信ずべき充分の根據を有す。然れども日本は決して昨日生れたる小兒にあらず。故に吾人は固く信ず。日本は決してかゝる見え透きたる僞言に欺かるゝことなかるべきを。現英國外務大臣サー、エドワード、グレーは最も國民の信賴を保ちつゝある政治家の一人にして、彼が外務大臣となりし以前に於ても亦大臣となりし以後に於ても、常に明かに日英同盟の贊同者なることを表白し、且つ此同盟に不滿を抱く意見の如きは世人をして徒らに英國民が確固たる政見を有せざるべきを疑はしむるに過ぎざるものとして大に之を非難せり。若し全國擧つて日英同盟を非とすることありと假定するもサー、エドワード、グレー一人は、久しく實効ありし同盟に代ふるに、新たなる其否何れとも決する能はざる同盟を以てするの非なるを主張して止まざるべきを信ず。日英同盟は彼が外務大臣たる間は安全なること疑なく、假令露國と英國との間に今少し接近の策を講ずることありとするも、そが爲めに兩國同盟に僅少の影響をも及ぼすこと決して無かるべし。日露戰爭によつて露國の大敗北以來、歐洲の權力關係に大いなる狂ひを來たし、今や或一ヶ國の野心によつて歐洲の平和を攪亂せらるゝの恐あること恰かもルイ十四世及びナポレオンの時代に於けると同一の有樣にあるご



TREPOFF —"Set him in motion, sire.—It is easily done."

"— — — — — — !!!"

THE FAITHFUL ARMY.

—*Wahre Jacob* (Stuttgart.)

とは日本人の充分諒知する所なり。夫れ故に聰明にして且つ愛國心に富める英人は何人も皆此際露國と反目し來りたる從來の關係を一掃し、成るべくは英露の關係をして千九百四年に於ける英佛の關係の如くならしむるの獨り英露二國の爲めのみならず實に歐洲全體の利益たるべきを感ぜざるなし。故に英國は英國外交政策の二大柱石となれる日英及び英佛との關係を損ずることなくしてかゝる計畫を成功せしめんことを欲す。然れどもこは日本をして決して日英合盟の關係を疎からしむるの所以にあらざることを知らしめたる上にあらざれば能はざることなり。彼の日英の間を割かんと計畫するものゝ如き甚だ惡むべきの徒といはざるべからず。



"REFORM IT ALTOGETHER."

WILLIAM II.—"The spelling reform is certainly worthy of Teddy. A better plan would be to make German the universal language and abolish every other." —*Fischietto* (Turin).

英獨關係

『ノイエ、チュルヘル、ツァイツング』

八月十五日フリードリヒホーフに於ける英獨兩元首の會見は、抑もこの兩國が現在及將來の關係に如何なる意味をか有するなるべき。互に叔甥の關係を有するこの兩元首が過去に於ける交情は決して親善なる者ありしとは云ふ可らず、彼等の性格が明かに相反對せるのみならず、由來英國王家と普魯士王家との間には極めて密接なる親族關係の存するにも關らず、この兩家が常に相反目して毫も一致するところなかりしは、恐らく何人も首肯する所なるべし。加之この兩國民が互にその政治上の主義方針を全然異にするの事情が、益々この兩王家の親善を妨げたる事、亦爭ふべくもあらず。兎に角從來の英獨兩國の關係を見るに、元首も國民

も共に相手方の態度を最早善意に解釋すべき能力さへ全然欠如せるの觀ありと云ふも敢て過言には非さるべし。

然して英獨兩國間の敵意は前年前に於て最も著しく發表せられき。當時彼我の新聞紙は全力を盡して互にその敵意ある論戰の刃を交へたり。當時佛國をして獨逸と戰を交へしめ、然して英國がその艦隊を以て佛國に援助を與へんとの計劃は實に英國王の企圖に歸せられたりき。時の外相デルカッセ氏が發意にかゝる危險なる戰鬪準備に對する首相ルビエー氏の強硬なる反對は、漸くにしてその狂氣じみたる戰爭より獨佛二國を救ひ得しと雖、この事實が如何に獨逸國民の感情を害せしかは又多く云ふを須ゐざる可し。かゝる戰爭によりて利益を獲得するは單に英國のみにして、これが爲めに當の關係國たる獨佛は何れも痛ましき衰滅の悲界に陷るの外なきは、識者の夙に認めしところなりき。

亦數年前英國艦隊がオストゼーに於て演習を爲したるの際、同艦隊が獨逸の海岸に於て頗る冷遇を受けたるの事實、並に英國王エズアルド陛下が獨逸國を通過してマリエンベードへ旅行せられし際、偶其近傍に滯在せられし獨乙皇帝に何等の挨拶をも爲さゞりしの事實は、以て倫敦と伯林との皇室の間の險惡なる關係を證するに足りぬべし。この不和の狀態は實に全冬期を通じて繼續しぬ。英國がかのアルビシラスの談判に於て、佛國の要求を全然承認せしの事實は、亦獨逸をしてます／＼英國に對する惡感情を增加せしむるの原因とはなりき。されどアルセシラスの協商も漸くその局を結びて、聊くとも獨逸の主張の一部が容れらるゝと共に、佛國は最早モロッコに對してその專權を振ふを得ざるの結着を見るに至りて以來、始めて兩國確執の狀態は著しく緩和せらるゝに至りき。かくの如くにしてやがて兩國の不愉快なる關係を融和せんとするの一團體は倫敦に於て組織せらるゝに至りたり。この團體は實に英獨兩國の關係をして、全く英佛兩國間のそれと同樣に最も親善ならしめ、更らに兩國の間の友誼的關係を新たに復活せしめん事を以て、その唯一の目的としたりしなり。かくて英國各都市の代表者はその設立と組織とを正式に通告し談合せんが爲めに獨逸の各都市を訪問するに至り、かくて又獨逸よりも多數の新聞雜誌記者英國を訪問するに至り、彼地にて非常なる歡待を受けたり。爾後英獨兩國の新聞紙は筆を揃へて、均しくその親善なる關係を明かにし、如何なる意味よりするも、その親善なる兩國民を離間すべき眞面目なる原因の存在せざるのみならず、その商業上の競爭の如きに至りても、充分平和なる方法に於て之を爲すを得べき所以を辨明するに至りぬ。これ實に今日兩國を通じての一般の輿論なるなり。英國王の今回の訪問の如きは實に機宜に適したる者といふべく、その目的の如きも亦今日の兩國間に於ける平和的關係を證せんが爲めに外ならざるべし。

當面の所吾人は兩國間に於けるこの現象を以て滿足せざる可らず。これ以上の結果、殊に一九〇四年四月八日英佛兩國間に締結されしが如き方法に於て、英獨間の友誼的結合を證せん事は到底不可能なるべし。何となれば兩國の間に一點の邪念をも交へざる赤心の親和的關係を樹立せ

んには、獨逸がその世界貿易並に工業上の競爭者として余りに優勢なると共に、その艦隊の増加が（但しそは英國のにすれば九牛の一毛にだに如かずと雖）英國の安全に對して、尠からぬ危險の可能を感得せらるれば也。人は寧ろその同胞縁者よりも他人と和合しやすきものなり。さればにや英國は佛國と提携しぬ。蓋し日進月歩の勢を以てその勢力を扶殖しつゝある甥姪の獨逸が、英國の禍たるに反して他人の佛國は毫も英國の恐るゝを要せざる所と爲したると覺ぼし。されば吾人は近き將來に於て英獨兩國の間に戰爭の危機の存せざる事とその遠き將來に於ては又、かの通商貿易に於ける獨乙國の漸進的勢力、從て又之に從はざる可らざる艦體の增加は毫も英國に對して危險なる意味を有する者に非ずとの意見が、時と共に漸時英國人士の承認するところとなるべき希望ある事との二事を以て滿足せざる可らず。



THE RUSSIAN PUPPET-SHOW.
—*Nederlandsche Spectator*. (Amsterdam).

日本人と羅馬字

『エヒヨー』

八月十四日倫敦發行の「國民新聞」が記載せる所に依れば

泰西文物の吸收に營々たる日本人の企圖の中にて羅典文字の採用に過ぎたる緊要事はあらざるべし、今此に就て些しく述ぶる所あらむとす。かくの如き思想は要するに決して斬新といふべからず、而も未だ嘗て之を實行し得たるものはあらず。然るに彼等が此事の結果の上に多大の期望を屬せる所以のものは爾、彼等が採用し來れる泰西の文化は此國に於て着々其効を收め成果頗る看るべきものあるに依る、更に英吉利語が各學校科目の一に採用せられ居る事が又彼等の自覺を滿足せしめたるにも依るべし。凡ての場合青年たるものは羅馬字を知るべき機益多かるべきを以て羅馬字の利用は此際日本語の爲

めには當面の急に屬するものならむ。日本に於ては近頃如是の問題が熱心に討究せられ、此羅馬字採用を唱導する會を日本羅馬字會と呼び之が機關雜誌として羅馬字と喚ぶ雜誌を發刊せり。彼等は漢字の使用に就いて久しき以前より不滿足を感じ來りたり、何者之を學ぶは徒らに勞多くして効績擧らざるの弊を免るゝ能はざるを以てなり、加之漢文なるものは一字にして多義を有するものなれば用語として明晰を欠くの虞あり。羅馬字雜誌最近の號には羅馬字の可なる所以として次の如く論結せり。(一)、羅馬字は短日月に於て習得し能ふ利あるを以て讀書家の數を増加するを得。(二)、讀書の困難が漸く減ぜらるるを以て智識の收得が一層容易に爲し得らるべし。(三)、漢字の習得は貴重の光陰を浪費するを以て之が爲近世科學の研究に費すべき時間を失ふ。(四)、漢字は具體的の意義を表はす故に學ぶ者は其字の發音の價値を知ると同時に、此字が現はす困難にして紛糾せる標徴的意義をも併せ學ばざるべからず。(五)、以前は日本は其文明を支那より得たり、かるが故に支那の文字をも傳へ來れり。然るに現今支那は日本に向つて何物をも貢献する所なく、却て日本は歐米の諸國より之を仰げるが如き狀體にあるを以て英吉利及亞米利加の國語を學ぶ要あり。(六)、吾人が支那の思想或は左もなくとも支那に就て回想し來る事物に就て得來れるは隆盛時也。左り乍ら吾人は久しく漢文を使用し來りて身邊未だ漢臭あるを免れず、全く此等の因襲を脫すると難し。漢字を知ること多きを加ふるに從つて漢人の觀察や傳說の感化を蒙ると彌々深し。(七)、吾人は漢文が果して支那語の意義を傳ふるものなりつを知らず、多くの場合漢字は日本の眞義を傳ふるものにあらず。(八)、吾人は目下之事々物々を西洋に求むかるが故に必ずや西洋の語を學ばざるべからず、而して又羅馬字は此際極めて有利なるものたるを信ず。吾支那本國に在りても自國語の繁瑣なるに煩はされざるもの多く、文化の民庶の間に普及せざる障屏は一に國語の然らしむる所にありとなせり。往古に在りては全支那の青年は讀、書の二技を以て西歐の人に對しての誇りとなせり。然れども若し支那人にして簡單なる實用を辨ずる爲めに、即ち簡單なる書籍の閱讀を爲す爲めに必要なる一定の語數を知らば足れりとなすが如くんば此にて可也。左れど書を讀まんとするには未だし。支那の人口男子百分の十及び女子百分の一が讀書に要するアルハベットを知れるに過ぎず、是れ國語に對して不滿足なる所以なりと云々。

次號の公論欄には

非武士道論　戸川秋骨

獨逸皇帝と社會民主黨　マスター、オブ、アーツ 千葉鑛藏

死刑存置論　法學博士 古賀廉造

の三雄篇を掲ぐべし



自殺問題

ドクトル 富士川 游

自殺の問題は重大なるもので、社會學上より、法學上より、心理學上より、深く研究せねばならぬことであるが、余は今、その一端、すなはち醫學的心理學的の見地よりして自殺を研究したる要點を略述しようと思ふ。

それで、自殺といふものは民族と時代との變遷中、最も複雜なる現象の一て、これを解釋することは、隨分困難てある。從てこれを判斷するにも、感情的の方面に走ることが多く、眞面目の研究を遂ぐることは出來悪い場合もあるから、これまで、宗教家や、道德家の説では、自殺といふものの評價は隨分區々てあつた。しかしこれは多くは自殺の結果を見たばかりの議論て、自殺其物の原因、及びその本態を調べての話では無い。

余がこゝに述べようと思ふのは、自殺其物を醫學的心理學的の方面から研究したので、單に自殺の結果を論ずるのでは無い。

自殺の種類

自殺といふことは何れの時代にも行はれ、又何れの人種の間にも行はるゝものであるが、しかし今日の文化人種の間に行はるゝ自殺と、古代の人民又は野蠻人種の間に行はるゝ自殺とは、全然同一のものとは認められぬものがある、古昔我邦にも例があつたことてあるが、主人の死亡した時にその從者が自殺するが如きは、今日の文化人種が自殺するのとは、心理上の關係が全く相異せるのであるから、今はそれ等の場合に論及せず、こゝには今日の文化人種の間に行はるゝ自殺

の事のみを述ぶるのである。

又、自殺には人のためにするものと、己のためにするものとの二種がある。人のためにするといふは、國家や、神や、家族の爲に自殺するので、所謂社交的自殺といふものはこれに屬する。しかし此種の自殺は、今日では甚だ稀である。

文化人種の間に、今日多く行はるゝものは己のためにする自殺で、畢竟自己の苦痛に堪ゆることが出來ず、自殺に依りて、その苦痛を免かれむことを欲するに由來するのである。

自殺の方則

自殺問題の研究の順序として、先づ自殺といふ現象がドウいふ具合に現はれるかを調べて見るに、自殺の一國內に行はるゝには一定の方則がある、諸學者の研究の成績を纏めて言へば、其方則は大略左の通りである。

自殺は男女によりて異なるもので。歐洲では男子の自殺者は女子よりも多く、其比例は凡そ一と四との割合である。日本では女子の方が男子よりも自殺することが多いとガウプが言つたのは間違て居る。

自殺の數は年齢に比例して增加する。

結婚者は未婚者よりも自殺することが少ない。又小供を有する兩親は小供を有せざる兩親よりも自殺することが尠ない。

自殺は季節に關係する。概して冬季は夏期よりも自殺者が尠ない。

宗教と自殺との關係は明白でない。西洋人の說では佛敎は自殺を增加せしめ、猶太敎の如きは自殺を防止せしむといふが、宗敎上の信條が自殺の數に關係するといふことは確認せられぬ事である。

經濟上の事情と自殺との關係もまた明白でない。

職業と自殺との關係も確定して居ない。

自殺は敎育の度に關係し、敎育者は無敎育者に比して自殺することが多い。

大概右の通の方則で自殺は行はれる。

それで、此の如き忌むべき社會の病的現象を治すに

はドウすれば宜しいかといふ問題が出る。この問題に答辯するには、先づ自殺といふものは何によりて起るかといふことを研究せねばならぬ。

原因と動機

自殺の原因を調査するのには、その眞の原因と、動機とを區別せねばならぬ。この事に就て近頃大なる著述をしたのはウンガルンのレウエスであるが、同氏の説に依ると

各個人の狀態と社會的の狀態との內て、その人をして自殺を企てしむるに至つた所の諸種事項を集めたものが、自殺の眞の原因

自殺の傾性ある個人をして、自殺を企てしむる各個の事項が、自殺の動機

てある。

例之、獨乙國の某地に、齡十五歳の少年が居つた、一日或物品を買ふために持つて居つた所の銀貨少許を紛失した、所が其少年の母は繼母であつて、平生その少年を呵責して居つた、それて該少年は銀貨紛失のことを繼母に告げたならば定めて打擲せらるるてあらうといふ恐怖から、遂に自殺を企てた、(ロートフックスの例)。この場合に於て、自殺の原因は繼母の平生の呵責て、銀貨の紛失は自殺の動機たるに過ぎないのてある。

然るに、これまて、自殺の原因を研究した諸家の統計報告を見るに、精神錯亂のために自殺したものが何人、病苦のための自殺が何人、失戀、生計困難、破產家內不和等のために自殺したものが何人といふやうな風の調査て、いづれも家內の不和、戀愛の失望等を以て自殺の原因として居る。これは自殺の動機と原因とを混同したもので、自殺原因の研究材料とはならず、却てこれが爲に疑惑を生ずることがある。

全體自殺の原因を科學的に研究することは大難事てある。例之こゝに一人の銀行員があつて、銀行の金員を私消したことが露はれて、法律上の罪人となることを恐れて、自殺した場合があると假定する。この場合に於て、その自殺の原因をドウ説明すればよいか。

精神病專門醫家の經驗に依れば、自殺者の多數は精神病者である。名高き精神病學者エスキロルの說では自殺は精神病の一種であるとまで言つて居るが、しかしすべての自殺が悉く精神病に因するものと斷ずべからざることは今日多數の精神病學者の確認する所である。現に前述の場合の如きは、精神病のための自殺とは認められない。

社會學者は、此の如き場合に於て、その人の境遇を以て、自殺の原因と認め、貧困、遊蕩などの原因から自殺を企つるものと說明するを例とするが、これは餘りに社會の影響を過大に見たものと云はねばならぬ。

宗教家又は道德家などは、右の如き場合の自殺は信仰の念の缺ぐるか、又は卑怯なるに依るとするが、これは畢竟その自殺といふ現象の動機を見て言ふので、その自殺を企てた人その者に就て說くのでは無い。

自殺の原因

故に自殺の原因を論ずるに方りては、先づこの點に顧慮せねばならぬ、それで右に述べたる諸點に顧慮し、科學的、客觀的に研究した所で、自殺の原因と認むべきものは次の諸項である。

精神病のために自殺するもの　これは隨分多い。しかし此場合に在りては、自殺の動機は道德的の人格より出づるのでなく、腦髓の變化即ち疾病に依るものであるから、道德上よりして彼此論ずべき限でない。

財產消失、苦慮、家內不和等は單に一の動機で、自殺の原因は精神異常にあることが多いが、しかし素人の常識を以てはその精神病たるを認むることが六ヶ敷場合が多いといふことは、自殺の原因の研究に方りて、顧慮すべき要件である。

酒、阿片の中毒のために自殺するもの　酒、阿片の中毒は、疾患、道德の墮落、家計の困難を致し、遂に精神障碍を起して自殺の原因となることが多い。

ヘルレルは自殺者三百人の屍體を解剖した中に、百四十二人、即ち百人中四十七人六分は酒毒に中つたものであつたと言ふて居る。ロートフックスも五十三人の自殺者を解剖して見て其多數に酒毒の徵候を見たと

言ふて居る。その他精神病の原因も酒毒に歸すべきものが甚だ多い所より見れば、酒毒が自殺の原因をなすことの多い事實が認めらるゝであらう。

通例、自殺者の統計的調査は自殺して仕舞つたものに就て、詢究するのであるから、科學上より十分信賴すべき成績は擧げられぬのである。しかるに近頃ロートフックスが公にしたる報告は、自殺企圖のために負傷して、ハムブルグ病院に入院したものに就ての調査て、科學上の價値十分なのである。其報告に依ると一九〇一年至一九〇五年間自殺企圖にて入院したる患者の數及其原因

	男	女	合計
震惕譫妄	一三	—	一三
酒毒	一五	—	一五
精神病	三七	一一	四八
身體苦痛及病を苦にして	一二	八	二〇
家內不和	二七	二一	四八
經濟上の關係	四八	一三	六一
失戀	一三	二八	四一
羞恥	五	一二	一七
親の苛責を恐れて	—	二	二
刑罰を恐れて	一九	一九	三八
憤怒	六	一七	二三
不明	四九	一〇	五九

右の通で、明かに精神病及び酒毒のために自殺したるものは隨分多い。その外に家內不和とか、失戀とか、刑罰を恐れて等の原因で自殺を企てたものが尠なくない。しかし此等の事項は前にも言つた通、自殺の原因でなく、單に自殺の動機の一に過ぎぬのである。

そういふ次第であるから、精神病及び酒、阿片の中毒の外にも、なほ自殺の原因たるべきものがあると做さねばならぬ、それは自殺的氣質ともいふべき一種の精神狀態である。

自殺的氣質

自殺的氣質といふべきものは、精神病者では無いが、其精神狀態は健康のものと異なつて、醫學上より云へ

ば、精神病的又は先天性變質者と名づくべきものてある。この氣質のものは酒客、虚弱の兩親、神經病又は精神病を患ふる兩親の間に生まれたる小兒て、其理解力には異常を認めないが、意思薄弱て、激し易く、さめ易く、神經過敏にして、利己の觀念が强いのてある。精神の狀態が此の如くてあるから、容易に厭世の觀念が起り、從て自殺の思想が生ずる譯てある。

自殺の原因及び動機を綿密に調べて見ると、此の如く、精神錯亂に由るものの外は、所謂自殺的氣質といふものが自殺の原因て、家内不和、失戀、煩悶などは皆自殺の動機に過ぎぬといふことが明かてある。そうして、この自殺的氣質といふものは、文化の進歩と共に、酒荒その他淫佚の生活のために益々これを增加する一方てあるから、從て自殺の數も愈々多大となるのは無理もないことてある。

近頃、中學の生徒などて、煩悶の結果、自殺を遂ぐるものが多くあるのは大抵この類のものて、その素因は所謂自殺的氣質と名づくべき、刺戟され易き性質て、到底人生の波瀾に堪ゆることが出來ず、些細の事項に對して、多大の反應を呈するが爲に、遂に自殺を企つるといふことになるのてある。そうして此類の自殺には摸倣が多いことは諸家の已に唱道した所て、自殺の光景を目擊するか、又は自殺の記事を讀みたるために、間もなく同一の場所て、同一の方法て、自殺を企つるといふことは實際に多くあることて、摸倣といふことは自殺の原因の內にて奇異なる現象とすべきものてある。

自殺の豫防

此の如く、說き來た所て、さて自殺を防ぐには如何にすべきやといふことになる。

(其一)根本の點よりすれば、自殺的氣質を持つ人を無いやうにするのが第一てある。これは言ふまでもなく、兩親の酒荒、淫佚の生活、神經病、精神病等、その小供に自殺的氣質を與ふべき事項を除くべきてある。

(其二)既に自殺的氣質を持て生まれたものに在りて

は、其教育に注意し、殊にこれを普通の小兒と區劃して教育することが肝要てある。

右の兩項は神經衞生及び教育治療學の範圍に屬することて、各々其專門學者の研究を要する所てある。

(其三)自殺の摸倣を防ぐといふことも肝要のことてある、此點から言へば、自殺の記事が仰山らしく、新聞紙上に載せられるのは害があつて益のない事てある。

(其四)孤獨の精神生活を避くるといふことは、自殺の豫防上最も必要の事てある。平たく言へば、自殺的氣質を持てるものをして社會的公共の利害問題に關係することを務めしめ、共同運動を喜びて爲さしむるやうにする。

孤獨の精神的生活は、動もすれば厭世的觀念を起し易きものなれどもこれを社會的公共の利益問題に關係せしむるときは無謀の擧に出づるを防ぐに足る。これは結婚者が未婚者より自殺すること尠なきこと、小供を持てる兩親が小供なきものより自殺すること尠なきにてよく知らるゝ事實であるが、更に面白きは戰爭などがあると自殺の數が著しく減ずることである。これは歐洲にては諸學者の研究があつて、疑を容れざる事であるが、我邦でも、次の表に見へる如く、明治二十七八年日清戰役のありし時、即ち明治二十八年には自殺の數が著しく減じて居る。

自殺者の數	男	女	合計
明治二十五年	四四一〇	二八三〇	七二四〇
同 二十六年	四五八七	二八〇二	七三八九
同 二十七年	四六二五	二九二〇	七五四五
同 二十八年	四四四九	二八一三	七二六三
同 二十九年	四四八〇	二九七九	七四五九
同 三十年	四六二五	三〇三三	七六五八
同 三十一年	五三六八	三三二九	八六九七
同 三十二年	五〇三八	三三三四	八三七二
同 三十三年	五一七七	三二五六	四四三三
同 三十四年	五二二七	三三五五	八五八二
同 三十五年	五四一三	三三七〇	八七八三

同　三十六年　六一五三　三七一一　九八六四

右の統計によりて見ると、自殺者の數は年々增加の傾向があるが、日淸戰役の當時即ち二十八年には自殺者の數が著しく減少したことが明瞭である。この經驗からして孤獨の精神生活を避くることが自殺豫防の一方法であるといふことは斷言して差支ないことゝ思ふ。

(其五)宗敎的信仰が自殺を防ぎ得るや否やといふことは尙ほ硏究を要することゝである。

歐米旅行見聞錄

戸川秋骨

ミッドウエー、アイランドの沿岸に於ける乘船の坐礁

威風堂々群小の船舶を睥睨して横濱の埠頭を發した吾がモンゴリア號は航海一週日、九月十六日の夜を以て太平洋のたゞ中にある一孤島ミッド、ウエー、アイランドの沿岸に於て座礁して仕まつた。太平洋通航の郵船が此の島に立ち寄る事は一年に二三回に過ぎぬといふ。其二三回の一つに吾がモンゴリア號が撰まれ、余が又初めの航海に於て此の災難に遭遇したとはよく〳〵のまはり合はせてある。此の島に吾が船の到着するのは暗夜であると聞た時第一に吾れ〳〵の心に起つた事は淺瀨に乘り上げは仕まいか、暗礁に打ち付けは仕まいかといふ考てあつた。さて船長は島の燈臺の見ゆるや先づ船の速力を緩める信號を擧げた、暫くして先方からも合圖があつた、それまでは至極良かつたが、船長は何と考へたか、改めて船を盛んに進行させ初めたので、吾々の心配は益々甚深になつて來た、後て聞けば永く勤續して居る日本人のデッキ、ステワードは頗る形勢の怪しいのを見て先づ事務長に注意したが、かれは笑つて應じなかつたのださうである。暫時にして忽ち二回の異樣な衝動を感じた、此れが則ち座礁てある。吾れ〳〵の杞憂は終に事實となつた。天氣は晴朗、風靜かに波も穩かで何等の故障若くは口實とすべ

きもの丶なきに拘はらず此の變事を惹起したのは單に船長の不注意、失錯に歸せざるを得ない。此れは船客一同の一致する意見である、苟も常識を以てすれば斯く考へざるを得ない。初めから船長は至極ボンヤリした男であると思つて居つた、ボンヤリ、は兎に角、暇があると酒保へ來て賭博ばかりやつて居つた。座礁の時もキットそれをやつて居つたのだらうと惡口を言つたものもある、まさか左樣でもあるまいが兎に角此の變事の前後に於ける船長の態度と處置とは甚だ其意を得ない點のみである。

さて斯くなつては極力車輪を逆轉して引き下すの一事あるのみである然るに終夜回轉を繼續しても岩に嚙み付いた船はビクとも仕ない。翌日朝になつて――翌日も矢張九月十六日である――いよ〳〵船首の方の荷物を海中に委棄する事になつた。船首の方を輕くして船を岩から下さうといふのである、且つ海水が約三尺ほど其方に浸入した事實もある。併し荷物をすてるにしても積込みと同樣容易な事ではない。船では三等船客の日本人に其助力を依賴して相應の報酬をする事を申し込んだ、然るに日本人は金では動かない。かれ等は若し布哇若くは桑港到着の節上陸拒絶の不幸に遇つた時充分周旋して上陸の出來るやうに仕てくれるなら手傳はうと言ひ出し、船の方でも同意してこゝに日本人は荷物を海中に投入する手傳を始めた。(後ち日本人の中には船中に働いて一日一弗をもうけて居たものもあつたさうである)第一に投入されたものはセメントの樽詰め、酒樽、茶等で船の周圍にはそれが無數に浮んで居る。だん〳〵に各種の荷物が棄てられて終には二浬三浬の彼方まで荷物の浮動して居るのが見へる。光景何となくすさまじい。森村組の荷物がすてられた。イヤ某の荷物も同樣だと。眞か僞か噂はトリドリである。形勢頗る宜しからず、乘客はいよ〳〵島に上陸する事となつた。各手提カバン一個を以てボートにのるべしといふ事である。此に於て吾々は愴惶手荷物を整理し、トランクはあとに殘して、甲板に出た。波は靜かであるが、太洋のたゞ中而も島嶼の沿岸であ

れば大きなウネリは寄せては引き、引きては寄せ、ボートに轉乘する事も中々容易でない、先づ生命からがら轉がり込んだは良いが、中に入つてからが、[illegible]なて桶の中でサツマ芋を洗ふやうに、獨逸人も佛蘭西人もアメリカ人も而して吾等日本人も——支那人は漕手の外同乘しなかつた——ゴツタ混ぜにコロガされコネまはされたのである。コンナ事で如何して無事に上陸が出來るかと頗る懸念に堪えない。併しイザ進行となると左程でもない大ウネリにフワリとのり又フワリと下りる工合がむしろ中々愉快である。此の吾等の乘つたボートの出たのは九時半頃であつて上陸か十二時少し前であつたが、此の間漕手の支那人は頗る疲勞の體に見えたので、先づ吾等の仲間のサンフランシスコ君——余は某君をかく命名したのである——が助手となつて舵をあやつった。次て某貴公子もやをら上衣を脱ぎすてゝ舵に取り付いた、米國人の一人も手傳を始めた。余もまた袖手して居られない。飛び出てゝ助手となつて働いた、此に於て船は大に景氣づき調子よく進行する、暫らくにして先發の一ボートを追ひ拔いたのである。かくして吾等は二十世紀のロビンソン、クルーソーとなつたのである。

島は則ち嘗て地理書の畫に依て見た珊瑚島で全體が白砂を以てなる此の白砂は則ちコーラル、サンド（珊瑚砂）であるさうだ。吾がモンゴリアをして坐礁せしめたのは則ち島を圍むで居る地理書の畫て見た事のある環を成した岩（リーフ）であつたのである。

上陸及び上陸後の困難はた旅程の上に於ける齟齬に拘はらず、余は此の坐礁に依つて却つて尠なからぬ愉快を得た、此れに依つて余は始めて熱帶的風光の驚くべき美觀を得たのである、此れに依りてコーラル、アイランドの如何なるものなるかを見たのである。萬里の孤島に於ける旅商のあはれさを感じたのである。鷗（シー、ミユー）の——なるほど猫のやうなやさしい哀れ氣な聲でなく——夜の寥しさを添えるのを感じたのである。海の色の著しく美しきを見たのである。恐らくはたとへ千金二千金を積むも此れ等の事は余の一生

に得られぬ經驗であらう。多少の困難は此れに對して喜んで獻(サクリフアイス)する事を辭せぬ。況んや此の一孤島に於ても食は食ふてあまりあり、家はテントの内で少々感心出來ぬが雨露を凌ぐに充分である。更らに嬉しきは島の總主といふべき電信局長及びそれ以下の人々が頗る好意を表し、出來得る限りむしろ限り以上の待遇をしてくれた事である。此の島は周圍約六哩、太平洋の中心にあつて、此の太洋を通過する凡ての電信の取次ぎをする處である。吾が日本と米國との電信が近時早く且つ廉價になつたのも一つは此の島に其ステーションの出來て太平洋海底電線の通ずるやうになつた賜である。島に居る人は電信局の役員、此れを保護する米國兵士の一小隊、料理人たる若干の支那人、而して四人の日本人である。日本人は極めて無邪な質朴な太古の住民らしい男等で、余等の到着するや、かれ等はなつかしげに余等に島のものがたりを始め日本の近況などを尋ねる。かれ等は實に一年二三回の外その故郷と通信する事は出來ないのである。實にかれ等と語るにつけても吾等の遠き孤島に來り、また不思議な運命に導かれて各國の人種がかゝる處に集り寢食を共にするに至つた事の夢の如きを感ぜざるを得ない。

島上の天幕生活

晝食はすんだ、日はやうやく傾きかけた、併しながら吾れ〳〵の寢るべき宿がきまらぬ。歐米人は大低宿所が極つたらしい。例もながら余等と白人との待遇に等差のあるのは頗る其意を得ない。但し余は憤慨は仕ない。憤慨は徒に己を損するのみである。併し此の際躊躇は事をあやまる。余は先づ島の電信局員に就て余等一行中の婦人携帶者のために室を求め、さらに船の給養掛に余等自身の宿所を求めた。給養掛は驚いてまだ極らなかつたか、「ソレハ〳〵」と言つて支那人に命じて余等を案內してある天幕につれて行かした。早く言ひ出して良い事を仕たと思つてなほ支那人が枕とケットーを持つて來るのを待つて居ると此れは又失敬千万な白人の一群は傍若無人にも此の天幕に入つて持つ

て來た寢道具を据ゑ始めた、余等は素より抗議を呈した。併しかれ等は疾くに此處を占領して居るといふ、島の兵士の一人も其言を證明する、而もかれ等はすでに寢道具を持つて居るに對し吾れ等は何物をも持つて居ない。形勢頗る宜しからず、一と先退却と決した。甚だ意氣地のない事であるが、吾れ等は早く晩食をすます必要に迫られて居つたからで、又其晩食を急ぐのは、まご／＼して居る內に食品の食ひ盡される恐れがあつたからである。それで一旦引きもどして食事をすました上さらに交渉を始めた。こんどは島の守備隊の隊長が周旋してくれて一個の大きな天幕を貸し渡す事にしてくれた。此の時はすでに夜に入つて燈火はなく吾れ／＼の動作には頗る不自由であつた。天幕の中にはすでに白人が二人居る、而して無數の箱が一方に積み重ねられて居る。サンフランシスコ君は余等のために其箱を一つ／＼都合十五個ほどを下して三人の寢臺をつくつてくれた。多分石油の箱であらうか、大きさは丁度それほどである、併し石油の香の仕ないのは些か怪しい。かくの如くにして寢臺は出來上つた、サテ枕とケットーである、それを取りに行くと疑さに支那人が持つて來てくれたのは此れ又白人に占領されたやうである。重ね／＼の屈辱に、こん度は斷然武力を以て戰ふ事に仕て白人の天幕に押し寄せた。時はすでに暗夜である道は白砂の原である。旅順若くは滿洲の野に於ける夜襲或は偵察もこんなものかと思はれる。進む事暫時イザ天幕に近附いて見ると內部は閑として音もない、則ち突貫して見ると守將もなければ守備もなく、枕と毛布とは整然と置かれてある。余等はこれ幸と直ちに室に入り並べてある其の枕と毛布とを盜み出し、兎に角任務を完ふして自分等の天幕に引きかへした。時はすでに九時半、一同は此の怪しき寢臺の上に熟睡したのである。

翌早朝眼をさまして天幕の外を見れば一面に雪の降つた景である。轉じて內を見れば昨夜石油罐の箱と見たのはビスケットの箱である。なほ片隅には無數の玉葱が貯藏されて居る。さらに天幕を見るとカーキ色の

頗る地質の良きキメの細かい布て。こゝは常に驟雨の襲ふ處てあるが、如何なる雨も通らぬといふ完全なる天幕てある。かくして余等は天幕生活の第一日を迎へたのてある。

「お早やう」と言ふのはいふまでもなく吾れ〳〵の仲間てあるが、忽ち向ふの天幕から出た男が「グーテン、タッハ」といふ、こちらから來たのが「ボン、ジユール」といふ。チヤンが妙な英語て「モーニング」とやる。東西の各人種が互に片言交りの外國語を用ひ合ふ。朝起きる、兩手を以て白砂を掘り用をたして居る、と兵隊が向ふから殆んど裸てブラリ〳〵とやつて來て、余の醜態を見ながら、何とも思はぬらしく前を通つて行く、余もスマシてやつて居る。實は自分ながらあまりみとも好いとも思はない。用事がすむとこんどは兩足て砂をかける。よく余の家の猫が畠てそれをやつて居るのを見たが、余は今恰もかれの態を學んて居るのてある。吾等の生活は殆んど禽獸に等しくなつて仕まつた。天幕へ歸つて來ると同室の露西亞人が屈みながら余に向つて「ボン、ジユール」と言ふ。「ボン、ジユール」は至極結構てあるが其口から約一尺五寸ほど下に當つて怪しきものが此れも「お早やう」と言ひたげに首ばかりてはない全體を顯はして居る。實に左も右も名狀すべからざる體のみてある。

島の氣候は餘ほど暑い、九月十七日の今日丁度八月末の陽氣てある。且つ日の出る頃から無數の蠅に襲はれるので天幕の中には居られない、それ故身支度がすむと直ちに食堂のある二階の廊下に集る。こゝに海風に嘯て海上の風光を眺めて居る其心持は實に比べるに其物のないほど快い。且つ此の空氣此の陽氣は頗る健康に適する。島の人の曰く此の島ては風を引く事はないと、さもありさうに思はれる。從つて余等の食欲は非常てある。早朝から食堂に攻めかけ、出す丈の皿はみな平げる。喰ひ終るすぐ昼食が待ち遠になる。食ふ事の外余の腦裏には殆んど何者もない。尤も日本人のうちにも急ぎの用事を持つて居るのもある。此の先如何なるかと頗る取越し苦勞をする人もある、併しなが

ら大抵は仕方ないと諦らめて居る。諦らめざるを得ないのである。何とあせつても仕様がないのである。

一日二日と過す內色々な事を發見する。余は浴場を見付けて獨りで淡水の溫浴を貪つた。初めは誰れにも言はぬつもりであつたが、內々で一二の人に話した。それからそれと傳はつて終に日本人は凡て此の利益に浴する事になつた。此の發見と共に余は海水浴を始めた、朝先づ海水に浴し終つてそれから溫浴を取る。それから食事にかゝる孤島に居つても最早何の困る事もない、二十世紀のロビンソンは誠に贅澤なものである。

此の記事の終りに一寸言つて置くが、此の內には少しも婦人の事を言はなかつた。かれ等白人の婦人連は此の孤島に於ても非常な好遇を受け吾等の上陸後直ちに島の人々の住居を占領し、夕方にはすでに例の如くに粉裝に身をやつし、玉突室に出入し、翩々として戯れ、朝には寢室に朝食を運ばしてすまして居る。斯くの次第であるから島の生活としてはかれ等に書くべき特出の事件はない。かれ等は船に居るよりは便宜を得て居るのである。自分等も女をつれて來れば良かつたナアとは吾等の仲間のものが凡て口にする處であつた。

尤もこゝに婦人といふのは白人の婦人をいふのである。日本人の內で婦人を連れられたのは白井君の一行で、君は夫人令孃の御蔭を以て特にロッグ、ケビンの樣な十疊ほどの一室を與へられて寢臺も椅子も給與されて居る。其の位置は余等の天幕から約一町である。余等は夕食後いつも其處を休息所としまた談話室として居る。一時間二時間の後ビスケット箱の上に身を横たへるべく此のロッグ、ケビンを出れば地上只眞白に、全く雪の夜の如く、サクリ／＼と砂を踏みながら歸る時は何か山里の隱れ家に向つて行くやうな心持がして、アメリカの殖民時代に方けるロッグ、ケビンの事も思ひ出される。こんな有樣で昨日と送り今日と過して此の島に居る事全一週間やうやく救助船が到着して、吾れ／＼はそれに收容せられハワイへ送られる事になつたのである。なほ暇があつたなら島の事を書き送る事に仕やう。

ミツド、ウエーアイランドの天幕内に於て

九月二十二日　戸川秋骨

瞥見佇想録

村山鳥逕

△美しき火宅

机上の一輪挿なる撫子も早や色褪せて萎れにけり。愛憐(いとほし)むものゝ末期(まつご)見まくもあらず、却りて未然(おはかた)の中を今はと思ひ切りて打棄てつ。木鋏を手に庭下駄の音を樂しみ、室より見たりし小萩の下豪吾(つはぶき)の隣なる、優しく可懷しき色の水引草を、挾み取らん下心に降り立ちぬ。晴れたる秋の午後の事なり。

十歩に足りぬ庭ながら、秋の草茂らせし中を漸く水引の下に屈みて、物選みするは人間の質よ、彼是と長短を圖る目に、日の下なれば殊に顯證に、思ひ掛けざる微隱を見て、手は自ら膝の上に還りぬ。見劣りするは世の常を、こは又殊の外なるあさましさ。ジャミ珊瑚を貫きしやうなる色の、しをらしき美しき水引草は水引草ながら、本より末かけて、花を電柱と見立つれば丸の内なる電線にもたとふべく、網を引き渡して、青き色したるいと／＼小き蜘蛛ぞ、主顏して中央の處に來る餌とならん程を待ちて屈み居たる。

大凡二十にも餘らんを、皆毒蟲の住家となり了んぬる秋の色に、近寄れば此許も火宅と興さめて室に還りぬ。併而遠目には今もやさしき姿かな、一度切られなば、二日三日して又棄てらるべき水引草の、今も土にありて榮ふる緣は、我よりも蜘蛛に深かりしか。

△海の幻

ふと目覺めたり。宵の間は唯靜けき天地を蟲の音のみ、庭の緣床の下などに、唧々のあはれは秋に深かりしを、今は夜半、何時よりか風吹き出てし外面の景色の哀にかよひ、あはれに加へて淋しき可怖しさの身には染み、しかすかにいもねられず、天井なる昔の雨漏の跡を仰ぎて臥し居たる折しも、嵐の音に呼ばれてか荒海の光景ぞ目には浮びし。その海より空にかけて、

大なる梯子ぞ天地を結ぶやうに立ちたる。何事ぞと思ふ間に人の叫喚水のゆらめき耳に聞ゆらんやうなるに、幻の海の中に瞳を凝らせば、數限なき人衆の浮きつ沈みつ、肌摩り群れ合ひて、その梯子に縋り昇らんとはするなり、されど梯の下の階は、人の丈程の高さを拔きたれば、容易に足蹈掛け難く、或は蹈掛くるものありとも、下より足を引きて獨り昇るを許さゞるに、大方は過ちて元の海に還るなりけり。中に一人竟に取付きぬ。猿が木に昇るにたとふべく、勢よく天に向ひけるが、高く行くに隨ひて勢は前に劣り、折々下なる海の其所彼所打眺むる氣色なりしが、何思ひけん又降り掛けたり。今少しにて雲の中に入るらんものを、將た雲に入らば飛行自在の翔を與へられ、再び海に沈み行かざる妙なる身ともなりなんを、何とて中道にして降るやと、氣もそゞろに我は惜しみつゝ見てあるに、一度躊躇ひしも竟に降りぬ蓋し下なる人衆を見捨てゝ獨り昇天せんをうしろめたしと思へりしや

降り來し人を見て海中の衆は喝采したり、人は歎ばしげに微笑みつゝ下階より手を伸して下なる一人の手を取りしに、四邊の人々は一人を遣らん事の片腹痛しとや、將た己も倶にと望む心に驅られてや、爭ひ群れて一人を引きぬ。降り來し人はその援ぎの如何になり行くらんかと茫然たる折しも、背後より誰とも知れず力任せに前に突きければ、復元の海の中に陷りて、何れをそれと其顏も分かず、前の民衆と同じ群にぞ入りたりける。

と見る間に幻は消えたり。現の今も目を閉ぢて其夜の事を想ひ出づれば、心耳に響く海の音人のをたけび、さりや我のみには宛らに世の一面の寫し繪とも思はるるに。

△水馬

雨上りの夕方を久しぶりの散策高足駄に泥迸を厭ひながら、往來を隔てし前の小路を入り半町ばかりにして田圃に出でたり。稍實りし稻は青く、遙の森は綠も老ひて黑ずみ亘り、今し雲を漏りたる夕陽を受けて、水彩畫といふもの見るやうなり。

尙行く事一丁ばかり、朽ちたる板橋掛かる小川の邊に達す、今日は水嵩增りて色濁りたり、風に吹き靡きて折れたる岸の尾花、水に浸りて流れの儘にゆらめく樣のおもしろさに、少焉と立停まれば、その尾花の下に水馬とやらん脚長き小さき蟲の水面に馬の形して立ち、流に向ひて進むあり。

緩かに流れ行く水に身を任せて一二間は下に移され行けど、又遽に心附きしやうに溯りて、先づ一息と言ひたげに息ふ、止まるは遲る世の數に漏れず、息ふ間を又押流され、流されては又進み、進みては又退き、同し處を行きつ流れつ、己は何とか思ふらん、よしなき身の一事を繰り返し〳〵てぞ遊ぶなる。

是を汽車の機關方電車の車掌にも似たりと思ふ、然りその同一線路を行きつ戻りつする點に於て。

是を彼の年若うして老ひたる藝術家にも似たりと思ひたりしが、こは我が過なりき、見よ水馬は流れても又元の處に溯る、彼に至りては一度流るゝや奈落に至つて初めて停まる。

細長主義と太短主義

（左に揭ぐるは博士が徒步主義講談會にて演說せられたるものなり）

法學博士　和田垣謙三

私はどうかすると云ふと、例に依て演題未定などゝ云ふビラを下げられることがある、誠に精神の定らぬ奴で、中々前以て演題を定めて置くと云ふことは困難てあります、併ながら未定が果して未定であるか、其邊に又言ふに言はれぬ趣味がある、此處に參つて始めて徒步主義信條と云ふものを拜見しました、その中に面白いことがある、又唯今三宅君の演說を拜聽しながら國民新聞を讀んだ、其中に石黑男爵の安宅(あたか)談、附たり西鄕月照の事、と云ふものがある、此處に亦ちよつと面白い事がある、それから霄越してはあるが、既に多少拵へてあるものもある、あれやこれやを搔き集めて、幸に面白いお話が出來たらお慰み。

一つ前以てお詫びと言つて宜いが、兎に角諸君にお斷りせねばならぬことてある、先刻此方へ參りましたら、成程徒步主義講談會の事てすから、此門內に車が一輛も無かつた、所が斯く申す拙者は車に乘つて來た、併ながら敬意を表せむ爲に門前て下りました、門の中は確に三宅君の先刻言はれた通り、二本の足を運動させて參りました、斯く申すと、汝の如き演說にさへ車を飛ばせて來る樣な人間は、此徒步會の講壇を瀆す資格を有たぬぢやないか、抑々何故に此處にやつて來たと云ふお問ひが有るかも知れぬ、實は先達發企人でありますか、或るお方が來て私に話せと云ふことてありますから、吾輩は元來徒步を好む、此團體をして、是ても富士山には二度登つた、淺間にも登つた、歐羅巴ても山川を跋涉した、處が近頃は忙しいのて、何とか暇なしと云ふことがある、存外時間を有たぬ、それ故に寧ろ例外が常例と成つて、不幸にして、心は彌猛にはやれども、徒步主義の人間徒步主義の實行者となることが出來ないのである、併ながら若しも精神的徒步主義と云ふものがあるならば、吾輩は確に徒步論者てある、斯く申しました所が、それて可い、精神的徒步主義を論じて呉れと云ふことてあつた、又先達或る處て送別會が有つた、其席で吾輩がテーブルスピーチを餘儀なくされた、所が前申すお方です、即ち其邊にお在てになるお方が、其演說は妙だ、即ち吾々の主張する徒步主義だ、あれを一つやつて呉れと云ふことてあつた、併し今ては何を言つたか覺へませんし、同じことを二度言ふのは閉口だ、そこて前申す出來合ひの品物、即ち國民新聞と徒步主義の信條此二品を加味致しまして、どんな物が出來ますか、それが問題であり又即ち演題てある、本年大學の試驗問題に私が太短主義と細長主義と云ふ題を出した、問題は、日本語と外國語と兩方で出す、さうすると意味が明瞭に成りますから——。それて太短主義はスタツト、ショルトイズム、細長主義がリーン、ロンギズムとした、前の Stout-Shortism はエスと云ふ字の頭韻を踏んて居る、次の Lean-Longism はエルのアリテレーションに成つて居

ります。

そこて此の太短主義と細長主義と云ふことを、極く分り易く言ひますれば、燕主義と大根主義と言つても宜い、或は一面から言ふと、走馬主義と牛歩主義と言つて宜いかも知れませぬ、多少方面が違ひますが、結局は一に歸する、牛歩主義、大分徒歩に近く成つて來た、或は圓顔美に細面美、これ等は多少觀察點は違ひますが、太短細長と云ふことは、其れらの言葉を以ても言ひ現はすことが出來やうと思ひます、乃ち玆に此二つの主義を比較研究して見たい、

或人は曰く、何も此二つを擇ばなくとも、其二つよりもつと好い物があるぢやアないか、太くて長ければ一番好いぢやアないか、僕は其れを採る、太短主義でもなければ細長主義でもない、太長主義だ、それは勿論結構だ、けれども世の中に太く長い物はタント轉げて居ない、又其正反對に、細くて而も短い、是亦た論ずる迄もなく、誰も好む所ではない、乃ち問題になるのは、太いことは太いが併し短い、細いことは細いが併し長い、其處に一長一短と云ふものがある、事物皆一長一短は免れぬ、長に短所あり、短に亦長所もあり、そこて此太短細長主義の是非とか優劣とか云ふことを論ずるに當つて、勿論絶對的に其一を是とし、又其一を非とすることは出來ないのである、社會と云ふものは、申すまでもなく活動して居る、世は活物である、人は活器である、而して世事人事は活動して併て歩まないものである、それ故に一の杓子定規を以て萬事を律すると云ふことは、無論其當を得て居ないことである、利害と云ふものは、總て比較的、相對的のことである、俗に鶴の脛鴨の足と云ふことがある、鶴の足は長い、けれども鶴自身は其長きを便として居る、鴨の足は短い、鴨は其短きを利として居る、故に之を斷たば悲しまむ、之を繼がば憂ひなむである是は、即ち一長一短、各々其宜きを得て居るので、詰り優劣是非絶對の獨斷を許しませぬ、寧ろ相對的の利害を究めて云ふに他ならぬのであらうと思ひます、併し一々兩方の利害をべると隨分時間が掛かる、此信條の中にも『無用の

談に耽り貴重の時間を徒消するは我等徒歩主義者の到底忍ぶべからざる所」とある、吾輩も忍ぶ能はざる所だ、そこで太短主義と云ふのは、先づ受けの宜い方だ今日は割合に青年が少ない、青年以上の人が御老年―てはない、青年と老年の間の人が多數を占めて居るやうに見受けますが、青年の如きは殊に太短主義を歡迎する方であります、それから國民としてはどうであるかと言へば、日本人は概して太短主義を奉ずる者であらうと思ふ、勿論太短主義利無きにあらず、其利を一々喋々するは、是亦た吾輩の到底忍ぶべからざる所である、故に之を略して、細長主義の方の長所に就て諸君の御考を煩はしたいと思ふのであります、而して先づ多くの人がどちらを採るかと云ふと、概して太短主義を採用すべきものとする、異口同音とも申せぬかも知れませぬが、多數の人がさう信じて居る。其ことを一つ論じて見たいと思ふ、即ち多數の人が太短主義を適用すべきものとする者の中に、其中最も著しいものは戰爭であらうと思ふ、兵は迅きを尙ぶ、即ち太短主義である、孫呉も之を言つて居れば、又近代に於てナポレオンも之を唱へ。又之を實行したのである、併ながら果して太短主義が、兵家の虎の卷であるか、金科玉條であるか、必しもさうでない、古今東西の戰史、を調べて見るならば、此點に就て豐富なる材料が十分に有る、併ながら、最も近く又著いものを藉りて御話するならば、則ち輓近の日露の戰役に於て、旅順の攻擊が如何なる敎訓を吾々に、又天下後世に與へたか、聞く所に據れば、旅順は初めは二日間に之を陷れると云ふ計畫であつた、所が中々さう往かなかつた、唯多くの死傷を生ずるのみである、そこで今度は一ヶ月、少くとも二ヶ月、の中には是非陷落せしめなければならぬとて、短兵急に掛つた、總ていけない、それで御承知の通り、先づ細く長く穴を堀つて、而して此細長主義に依て開城を數月の後に見たのである、而して是が原則である、勿論戰爭に依て、場合に依れば猛烈激烈なる强襲、或は吶喊、それを要することがある、又それの有効なこともある、併ながら是は能く其時機、

又事情と云ふものを詳かにして、而してそれが眞に必要であり、又有効であると云ふことを看破した場合てないと、濫に之を施すべきものではないのである、唯無用の犧牲を生ずるばかりである、旅順は、所謂難攻不落とか、金城鐵壁などゝ稱せられるが、軍學上から謂ふと、要塞戰と云ふものは守つて居る者が敗け、攻める者が勝つ、此勝敗は極つて居る、是は道理上と云ふよりも、寧ろ物理上極つた話だ、唯時間の問題のみてある、其時を計算して、是だけの間に其ものを陷れねばならぬ、それを標準としてさうして計畫をすれば宜い、一日二日を爭ふて、さうして却て効無くして而して害を被ると云ふやうなことは、決して兵家の爲すべきことてない、則ち緩りと急くより外途はない、急いて急いては必ず徒勞に屬するのである、そこて乃木大將が二人の子供を失はれたと云ふことは、誠に彼の衷心憫むべく又敬すべきことてあります、是は私の考へる所に據ると、彼は多くの人を殺した、相成るべくは自分も屍を曝したい、それまでに往かずとも自分の子供、是は多數の者と共に犧牲に供さなければならぬ、一將功成つて萬骨枯る、それを見るに忍びぬと云ふ所から、彼の悲慘なる所の歷史の一節が綴られたものてあらうと考へる、此短兵急の太短主義、其失敗、其失敗より生ずる所の、慘憺たる歷史と云ふものは右の通りてあります、それから又南山の役、是も其當時其處に列して居つた人の話を聞くと、或る方面ては吶喊を七たび或は八たびしたと云ふ、是はどうてあるか、吶喊と云ふものは屢々すべきものてあるか、喩へばボートレースにヘビーと云ふことかある、ヘビーを掛けると云ふことがある、けれどもそれは二度かたか〳〵三度、もう一本と云ふ時にやる、無闇にヘビーを掛けたらヘビレケに成つて仕舞ふ、南山に於ても、敵の方は充分の準備があつて、防禦が出來て居て、此方は殆ど裸て攻めると云ふ話だ、それても相當に時間を費せば、あれ程の惡戰を爲さずして之を拔くことは出來るのてある、けれども太短主義が實行されて、是亦た多大の損害を被つたのてある、犧牲に成つた人に對しては、

充分の尊敬を拂ふのでありますが、若も冷靜なる頭腦を以て之を考へて見るならば、戰略上、兵學上、兎も角批判の餘地あることと考へるのである、此の如く太短主義の最も適用されべき戰爭に於てさへも、必しもそれが始終原則となすべきものでなくして、寧ろ細長主義を採用すべき場合が多くあると云ふことを一言申して置く、

方面を變へて今度は臺灣、二十八年後の臺灣統治の歴史を繙いて見るならば、是亦た吾々に多くを教えて居るのである、要するに太短主義ではいかぬ、細長主義で兎に角今日の成功を見るに至つたと云ふことは、喋々するに及ぶまいと思ふ、或は又外交の事に就ても、同じやうな道理を外交史から發覺することに於て、左程の困難を見ぬであらうと思ふ、抑も露西亞と云ふ國は其國の恰好は先づ太短主義である、けれども露西亞人と云ふ人間は、其地形とは正反對で、寧ろ細く長い物を好む、必ず長靴を穿いて居る、それが外插品となつて日本へ來て、私の友人なども穿いて居る、私も穿いて見たが中々細くて長い、兎に角露西亞人の主義精神と云ふものも矢張細長イズムである、彼得大帝から後今日に至る迄其政略を見て御覽なさい、皆それである、彼の東洋政略もそれであつた、けれども何日か其れを棄てゝ却て太短主義を採り出して來た、即ち露西亞の歴史のトラヂションに背いたのである、それが即ち彼の大蹉跌を爲した理由の主なるものゝ一でもあらうと私は考へる、さて日本はどうかと云ふと、是は露西亞と正反對で、國は誠に細くて長い、今度樺太が半分入つて益々長くなつて來た、けれども人間はどうかと云ふと、太短主義の信徒が多いと思ひます、現に此演壇でした、一と月ほと前に或る文學博士が、日本人は櫻を好む、歐羅巴人は薔薇を好む、印度人は蓮を好むが、支那人の好む花は何であらう、菊か、否ず、梅か、否ず、李か、否ず、抔と論じたから或人が曰く支那人の好むのは菊でも李でも何でもない、支那人は日本に於ける櫻、歐羅巴に於ける薔薇と云ふ如く、全體に愛する花と云ふものは無いのである、それが支那の

支那たる所以、或る地方では李を愛する、或る地方は牡丹、或は菊かも知れぬと云ふことを話した、其れは即ち拙者である、其時に文學博士の辯者は櫻を好むと云ふことの說明に、櫻は早く開いて潔く散つて仕舞ふ、誠にどうも未練を殘さぬ、さつぱりして居る、即ち太く短くやつ付けて仕舞ふ、それ故に日本魂を櫻に比したものであると云ふことを言つた、其說はどうであるか、兎に角「咲くからに見るからに花の散るからに」と云ふ句があつたかと思ひますが、是は無論櫻のことでせう、是等は所謂太短主義を現はしたものである、之に反して歐羅巴人、殊にアングロサクソン人種と云ふものは、どう云ふ人種であるかと云ふと、所謂一に根氣二に根氣而して第三にも根氣、而して之に多少の鈍氣を加味した者であらうと思ふ、所が日本民族は如何なる氣であるかと云へば、吾々は寧ろ一氣、一氣呵成の一氣、或は短氣、若くは勝氣、さう云ふ氣の一の塊まりてある、勿論それにも長所がある、けれども長所の在る處即ち短所の伏在する處であると云ふことを反省せねばならぬ、今私が此方に來る途中で、二三の子供が面白さうに無邪氣な顏色で何か唄つて居た、幼稚園か何かで學んで來たものか、兎さん、何とかで龜さん／＼何とかでちよつと此處らで一と眠り：：なんと言つて歌つて居りました、それを聽いて私は面白い感じを起したのであります、兎と云ふ先生は、其體格が見ると如何にも細くして長い、其耳を見ると、是も矢張細くして長い、さうして足、殊に後足を見ると、是も亦著しく細く長い、併ながら其の龜との競爭に於て、彼は如何なる政略、如何なる主義を取つたかと云ふと、豈圖らむや太短主義を採つたのである、而して他の競爭に於て美事に月桂冠を得た龜は、是はどうかと云ふと、確に是は太短主義の姿勢である、併ながら其勝を得た政略と云ふものは何であつたかと云ふと、所謂太短主義にあらずして細長主義である、だから人：：ではない、物は見かけに依らぬものである、英國人は Slow and steady と云ふことを言ふ、或は In the long run と云ふことを言ふ、即ち龜の採つた主義は、

英國人種の謂ふ其主義である。

ちよいと語を變へませうが、玆に泥棒と云ふ棒が有る、泥棒と云ふ棒は肉眼では見えない、併ながら若し泥棒と云ふ棒が有るとしたならば、其棒は即ち太く短き物であらうと思ふ、信條に曰く『忽ちにして富豪たらむとし、忽ちにして英雄豪傑たらむとする者が、其容易に求めて得べからざるを見るや、或は失望し、或は落膽し、其極精神に異狀を呈し、若くは一轉して强竊盜の群に投ずるあり』云々、徒歩家には泥棒などは居ない、然らば辛棒と云ふ棒はどうか、辛棒と云ふ棒は、言ふまでもなく細くして而して長き物であらうと思ふ、棒にも色々ある、滅ぼうだの篦ぼうだの、其れは細くもあるし太くもあらう、短いのもあるし長いのもあらう、或る人は問ふた、君は貧乏と云ふ棒を知らぬか、是は太いか細いかも知らぬ、其れに就ては有繋の吾輩も一言もお答へが出來ない何者經驗がないからと言つた、或は諸君の中に其資格を有つて居らるる方があるかも知らぬ、是は失禮――、』偖て今一つ具體的に此主義を明にする爲にお話したいことがある、

是は新聞に有つたことですが、英國大使マクドナルド君が、先達妻君並に從者を連れて內地を旅行された、して天龍川を船で下られた、兩岸の景色は絕佳言ふべからず、日本に來て始めて見た、雄壯々嚴、先生近頃驚いた、けれどもそれより尙一層驚いたのは、船が着して上陸するに當つて、船頭が船賃として五十圓請求した、是には一層驚いたと云ふ話である、如何にもです、天龍川は細くして而して長い、けれども船頭共の政略は太短主義である、彼は濡手粟主義であるが、其粟と云ふ字を、あはゝあはだが水泡の泡と云ふ字に改めなければならぬと云ふやうな寸法に成つて來るかと思ふ、此二三の船頭のことで、事些細のやうでありまするけれども、一葉落ちて天下の秋を知る、軈て日本人、吾々同胞のサイコロヂー、を證明したものだ、前申した所の日本民族の短所、即ち太短主義は、諸君の反省を要する短所であると云ふことを明かにして居る、

終に臨んでもう一つ申したいことは、それも徒歩主義信條の第十六條、に『涓滴能く石を穿ち、細流遂に海を成す』と云ふことがある、面白い、それに就て御話したいことがある、先達中上野博物館に特別展覽會があつた、見に往きた、種々様々のものが有つた、其中で面白いと感じたのは、泰西文明の輸入者とも謂ふべき高野長英先生が、座右の銘として書齋に懸けて置いた小さな額であつた、和蘭語で先生自ら筆を執つたもので、千八百三十六年、今から丁度七十一年前、それを讀んで見ますと

Studie Kamer!

We water druppel maakt den steen hol, niet met geweld, maar door er dikmaals op te vallen.

1804 Door Takano Tjooei.

と云ふ文字がある、それは左程むづかしい言葉ではない、涓滴石を穿つと云ふことて、涓滴は石を穿つ、併ながらそれは力を以てにあらず、其上に落ることの屢々なるが故の爲なりと云ふことてある、涓滴主義は言葉を換へて言へば細長主義である、高野長英の如き、其れを以て自ら戒め、今日の日本史の準備をしてくれたのてある、吾々も今後其精神、其筆法を以て、彼等が吾々に遺したものよりも、一層より善きものを後世に傳へねばならぬ、

要するに槿花一日の榮、松柏千年の心、詰り太短主義と細長主義てある、灼々たる園中の花、鬱々として晩翠を含む澗畔の松、是亦た細長主義と太短主義である、又信玄が『立ちならぶ甲斐こそなけれ山櫻、松に千歳の色はならはて』是亦た細長主義と太短主義である、

併ながら前申す通り、是は相對的の話て、決して絕對的に一を排斥することはならぬ、石黒男爵の安宅談に。「大西郷先生が月照を逃がす時の話がある、一部を讀んて見ませう『西郷が僧月照の幕府の捕吏に縛されむとしたのを逃れしめむとて、婦人と見せて京都を逃れ、西郷と海江田子爵が同伴して西下したる際、伏見の先きて水茶屋に駕籠を下して憩んだ、茶盆に茶を載

せ駕籠の窓に出した時に、月照がうつかりと窓から手を出して、茶碗を取つて、飲んで返へした、其時に捕吏四五人か其茶屋に居た、海江田子爵が、是は見付かつたなと、大に心配して、西郷の耳に口を寄せ一刻も早く此處を去れと言つた、西郷は首肯したが、更に駕籠昇に向ひ特に大きな聲て、まだ先きは長いからゆる〱憩めと言つた、其うちに捕吏は、是は怪しい者てないと見たか、去つて往つた、すると西郷は、さあ早く往かうと言つて酒代を遣つて一入急いて西下した、」是は太短主義と細長主義て、初めは細長主義、後は太短だ、取捨長短、其時に應じて其宜しきを制さねばならぬことてある、」

今まで話したことは、即ち徒歩主義てあるのてす、此信條に『吾等は單に肉體上にて徒歩主義を主張するに止らず、又精神上に於ても之を主張す』ゝ徒歩主義信條の第二條にある、今日の演題は即ち一種の徒歩主義、精神的徒歩主義てあつたのだ、演題が極るも極らぬもあるものか、徒歩主義の會に來れば徒歩主義のことを話すのは極つたこと、まだ言ふことは澤山ある、例へば昔の歴史談に、或者が阿弗利加に殖民をしやうと云ふ其時に、土人から土地を巧く取らうと云ふのて、牛の皮を一枚持つて來て、オイ〱お前方に願がある此牛の皮一枚て覆ふだけの土地を――九十九年と言つたかどうかそこ迄は知らぬが、貸しては呉れまいかと言つた、要求が餘り小さい、宜しうございますと言つたら、大に悅んて、其牛の皮を、まるて素麵のやうに細く長く切つた、其れをズッと繼いて何十町何里と云ふ様にした、其れを以て取卷いた、二百坪や二千坪てはない、確に覆ふたのです、是は牛の皮てはない嘘の皮てあつた、是などが太短主義と細長主義、又羅馬人は、えらい人種てあつたが、隨分缺點も多い、殊に經濟の方面から言ふと、多々缺點があるが、羅馬には羅馬道路と言つて非常に立派な道路がある、日本の故三島君の如きは羅馬的知事と言つても宜い、羅馬の道路と云ふものは今ても他の模範に成つて居る、即ち道路と云ふものは細長主義である、それて羅馬が細く長く

あれだけの壽命を繼續した、又西伯利亞鐵道の如きは、是亦た細長主義である、又男子と婦人と比べると、婦人は頭の髮が長い、さうして氣も長い、男子は之に反して頭髮が短い、又短氣である、又支那人は、男女を問はず髮を細く長くして居る、而して其國の人民は、其髮の如く細長主義と言ひたいが寧ろ悠長主義だ、所が此頃は、日本に來り外國に往つて長い髮を短く切つて仕舞ふ、其爲か少しく氣が短く成つて來て、動ともすると是までとは違つたやうな傾向が現はれつゝありはせぬかと思ふ、是も亦一顧を煩はすことだらうと思ひます、又商賣は濡手主義てはならぬ、商賣は商ひと言つて、飽ぎず倦まずやるべしてある、實業にても從事しやうと云ふ人は、細長主義を以てやらなければならぬ、其他尚ほ申上げたいことが澤山ありますけれども、徒歩主義の信條に背いてはならぬ、「無用の雜談に耽り貴重の時間を徒消するは、我等徒歩主義者の到底忍ぶべからざる所、」此邊でやめやう。

謹て諸君の靜聽を謝します



鐵道十五年計畫

『東京朝日新聞』

遞信省にては今回鐵道十五年計畫なるものを立て、今後十五年間に約四億圓を支出して新鐵道を敷設し、若くは舊鐵道の改良費に宛る計畫なりといふ。是れ單に遞信省部内の希望に止まる乎、將た政府の決定なる乎、又線路は何處なる乎共に未だ知る可からずと雖も兎に角四億圓の經費を要するものとせば其大袈裟たる明かなり。第二十二議會に於て買收に決したる鐵道は、殆んど私設鐵道の全部といふも不可なし。而かも其の建設費の總額は、漸く二億六千萬圓に過ぎず。故に今回敷設せんとする鐵道は、其建設費に於て今春買收に決したる總ての鐵道よりも約三割方多きを見る。近來物價の騰貴著しきを以て、建設費の高き割合に、新設線路の延長は大ならざるべしと雖も、尚二三千哩の新線を敷設せん

畫なると、略推想するに足る。若し計畫の大要右の如しとすれば、吾人は其の大膽なる無謀に驚かざるを得ず、而して愈之れが實行に着手せらるゝ曉には、今後の財政は宛かも日清戰後の財政と同様の困厄に陷るべきを疑はず。日清戰後に於て繼續費を要したると最も多きものを、第一回及び第二回の海軍擴張費となす。而して之れに亞いで最も巨額の費用を要したる繼續事業を、遞信省の鐵道敷設計畫とす。而して日清戰後の財政に於て、海軍擴張費の負擔には甚しく困却せざりしも、鐵道の敷設計畫實行には著しき壓迫を加へられたり。是其計畫の杜撰なりしに因る。蓋し當時の計畫に據れば鐵道は收益を生むものなるか故に、之が敷設改良の爲には何程の公債を起すも可なり、公債の元利は將來の收益にて償却するを得べしといふ主旨なりしが、此主旨少しも貫徹せず。戰後金融市場逼迫して、政府は豫定の公債を募集する能はず、而して一方には計畫通の豫算にて引足らず、政府は雙方より責立られ、之を奈何ともするを得ず、已むを得ず一旦着手したる事業を中途に見合さんとすれば、爲に工事上非常なる不經濟を忍ばざる可らざるのヂレンマに陷りたりき。仍りて更に種々財政上の遣繰を附け、漸く敷設したる曉に、豫定の收入あるやといふに亦然らず。收益を以て公債の元利を償却せんと思ひも寄らず、動もすれば營業費すらも償ふ能はずして、折角敷設したる鐵道に、車輛を運轉すればするほど、損失を増加する場合さへも少からざりき。是れ吾人が日清戰爭後我財政の窘迫したる最大原因として屢論述したる所なり。此苦境を經來りたる遞信省は、今度は又何の頼む所ありて右の大計畫を立てたる乎。まさか泡沫會社の泡沫的目論見にも非ざる可きが故に、吾人は其見込を聞きたる上、更に論評する所ある可きが、取敢ず此だけ言述し置くものなり。

無名も亦可

『日本人』

倫敦タイムスの評隲に載れるは謂ゆる世界的人物なり、洋の東西を問はざるより推せば、今後我が國人中にも死して評傳を其の紙上に載せらるゝもの少からざらん、現に兒玉大將は其の中に入れり、伊藤山形大山東郷等の諸公亦た皆な然らん。

謂ゆる世界的人物とは要するに先づ此の如き人物を指す、此等の人々は皆な多少傑出せる力を有し、常人の能く企て及ばざる所なるも、世界的人物たると然らざるとは特に重きを置くべきにあらず。國内に在りて眞に超群絶倫の器ならずして而も嘖々として世評に上るもの少からざるが如く、世界にも亦た此類あり。夫の百四十五人は倫敦タイムスが一世の偉人として評傳を掲げし所なるも、中に就て眞に世界的として目すべきは多からず、名のみを聞きて其の何者たるやの知られざるも少からず。而して聲名藉甚、遠く世界に聞えし者にして實は特に賞讃を値ひせざる、亦た之れ有り、ブーランセーの如き、一時世界を噪がしゝかど、元と虚名の僞英雄にして、何等稱すべきありしを見ず。ドレイフユスも亦た講

ぐれたる偉能あるに非ずして、廣く世界に知らる。

老西郷は我國に於て近世第一の人として稱せられ、確かにガリバルヂー以上の人物たるに、世界に在りて之れを知る者極めて稀れなり、向後日本の益〻世界に知らるゝと共に此人も亦た知らるゝに至らんが、今日に在りては毫も海外に顯はれず。大久保も老西郷に亞ぎての人物なるに、其名廣く知られず、近頃モーリス氏の著はしゝ『日本建國史』中に大久保一翁と混同せられ、子爵として記されたり。則ち老西郷や大久保や、爾かく世に知られざるも、知られざるの故を以て偉人物たるに累する無し。

國内に在りても名の廣く國人に知らるゝ所より言へば、岩見重太郎の如き、平井權八の如き、實に何人の上にも出づ。單に名を知らるゝが偉ならば、岩谷松平の赤馬車にて自から廣告せしを偉とすべし、されど斯かる評判を念頭に置きて或は偉なりとし或は否らずとするは、適〻其の人物の小なるを表はすのみ、最も力ある者は往々にして最も知られざるに終る、日蓮は法華宗徒の崇拜する所にして國内に大なる聲名を荷ふ、而も原坦山は新井日薩を評して日蓮よりも偉なりと言へり、評や必ずしも當れりとせざれど、亦た多少見る所なしとせんや。たゞ世上評判の嚣しきと否とに據りて人物の大小を說くは、眞に凡俗中の凡俗たりと謂ふべし。

南米視察談

『新日本』　伊藤幸次郎

南米の視察談といつても私の歩きましたのは極く一部分であつて、智利、亞爾然丁、ブラジル、秘露四ヶ國であります、ブラジルを除くの外はすべて西班牙語であります、ブラジルは葡萄牙語であります、又第二の國語として佛蘭西語が通用して居ります、物產は秘露では砂糖、綿、牛馬の皮、珈琲、ブラジルでは珈琲、牛馬、智利では硝石、菓物、羊、羊毛、亞爾然丁は羊、羊毛、牛馬、牛馬の皮、小麥、護謨であります、硝石は肥料に好し每年歐洲へ百四十萬噸程輸出されます、是等が此四ヶ國の重なる產物であります。此南米では其製造品は極めて人工を加へたものは少ない、多くは天然の物であつて、人工を加へて製造したものはすべて北亞米利加から供給を仰いで居るのです、歐羅巴及北亞米利加から南米に向つて輸入する製作品はなか〳〵分量が多い、詰り南米は製造業が發達して居らぬといつて宜のであります、智利の如き此二三年前製造業に向つて政府がこれを奬勵する事にして居りますが、其結果智利には小なる資本を以つて製造場が澤山出來て居ります、けれども依然歐羅巴北亞米利加から種々樣々なる、製造品、食料品、罐詰類其外セメントなどが大層入るのであります、東洋から米が入ります、日本の米は入りませぬが、柴貢米、ランゲー米などは盛んに入ります。

それからもう一つ南亞米利加でドン〳〵輸入を仰いで居る重なる物は

人間であります、前に申しまする通り南米は人間が少くないから人間を頻りに入れたがつてをる、秘露、智利、ブラジル、亞爾然丁などは盛んに人間を入れて居ります、そこで移民法を寛大にして白人の移住者を頻に奬勵致して居りますが、容易に入つて來ない、其内にも秘露は丁度今から五十年程前に智利と戰爭のありますまでは、餘程秘露の國は盛なる機運に向つて居りまして、大統領は何うしても秘露は人間の輸入をせなければならぬ、併ながら秘露の國情が歐羅巴人の輸入を勸める程に發達せぬから、何うしても勞力は東洋から入らなければならぬといふ考を起して、數年前に支那人を入れました、最も盛んな時は五萬人程入れたのでございます、秘露の農業殊に砂糖、綿の今日の如く出來るやうになりましたのは全く支那人の御陰であります、リマの市中に支那人の大きい商人が十軒あります其十軒の組合長をして居る支那人の如きはそれは仲々立派なものでありまして、五六百萬圓の資本を積んで盛んに雜貨、菓物などを商つて居ります、秘露の都會リマの市中には澤山の支那人が居ります、所が此雜貨は支那のものではありませぬので純然たる日本のものであります、表に大きな花瓶などを並べ、日本の屏風、日本の陶器漆器、然う云ふものを商つて居ります、南米人は大層然う云ふものを悦ぶのであります。一體智利といふ國は日本人も餘り知らなかつたので、智利でも又日本といふ國を餘り知らないが、日露戰爭の結果、日本を知つて尊敬するやうになり、何でも日本の眞似をせればならぬと云つて居りますから、日本の品は爭ふて買ふといふ有樣であります、我々の廣告によつて支那人は能い金儲をしたらうと思ひます、亞爾然丁は智利や秘露程、支那人の勢力はありませぬが併しながら侮るべからざる力を有てゐます、日本人も三四の人が商業に從事して居ます、亞爾然丁には日本の領事もあつて、日本人も澤山往つて居ります、ラプラタ河門を隔てゝモンデツキヂオといふ都會があります、確かに東京の銀座より奇麗ですが、此所はまだ支那人も日本人も往つては居りませぬ、私は亞爾然丁の事は能くも知りませぬが、亞爾然丁は日本を移民局を初め好まなかつたのですが、私が移民局長に遇つて日本人は米を上手に作る人民であるがといつたら、れそなら悦んで入れやうと云ふ事になつた、ブラジルの方では人が山水を好むから米を作るに上手なのと山水を作るに上手なものならば悦んで入れると言つて居ます、要するに日本移民の性質を是迄知らなかつたからですか、是からは盛んに移民を歡迎するやうになるであらうと思ひます、ブラジルには獨逸の製造品を盛んに輸入さして居ります、日本も今にドシ／＼輸入するやうになれば自然獨逸と競爭しなければならぬと考へます、獨逸人、英國人などは始めから大資本を出してやつて居りますが日本は富の度合からさうは往きますまいから始め小さくして段々大きくやる方針か宜しいのです。

又南米と取引を爲やうと云ふには引札の必要があります、これも西班牙語若くは佛語で記しましてドシ／＼引札を配らなければ不可ませぬこれを要するに日露戰爭後南米諸國では、非常に日本に尊敬の念を拂つて居りますから、此際盛んに交通の途を開らき、物品なり人間なりを輸入すれば大に好からうと思ふのであります。（拔萃）

●●●文藝雜考　佐々醒雪

右は紙面に限りあり本號の雜錄欄に收め得ざりしを憾とす次號には必ず掲ぐべし。

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨附記を乞ふ

綠蔭叢書第壹篇

島崎藤村著

小說

破戒

定價金七拾錢
小包料金拾錢

鏑木清方筆挿畫●千曲川流域の圖入●紙數五百七十八頁●四六版新裁●全壹冊讀切

發賣元 上田屋

東京神田區裏神保町壹番地

この書は長き文學の勞作より得たる收獲なり◎書中寫すところは種々なる生活狀態に觸れて、光景多樣なりと雖も、要するに鬱勃たる新興の精神を以て全篇を貫きたり◎版本の素質はすべて讀者の爲に親切ならんことを旨とし紙數多きに關らず殊に廉價を以て發賣す、請ふ淸讀を賜へ

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

夏目漱石氏著

小說鶉籠

橋本五葉氏裝畫

目次

坊っちやん

草枕

二百十日

大冊美裝●近刊

發兌元　東京日本橋　春陽堂



あん火

佐藤紅綠

一

奥州は津輕の城下に、名高い七夕の佞武多祭が濟んで門に火を焚く盆の頃になると、林檎が其れ〴〵に美くしい色を染め出す。地福村といふのは弘前の町から半町となき西南の小さな村で、遠く館野の方から見ると只た一帶の林檎畠。特に朝の靜かな眺めは格別なもので、薄く白い霧の中に包まれた一廓は滑らか葉を濡る紅、黄、紫などの林檎の色に、恰ら朧の中の五色の繪を見るやうな氣がする。其の朧の片端れから更に色濃き朧の煙が、もや〳〵と心ありげに立騰る、其れが此地福村三十戸の竈から吐き出す朝の息である。と軈て竹螺の聲が西の丘から聞ゆる。

竹螺を吹くのは此の畠主の佐吾十爺で、彼が此村を起してから二十年餘、朝と正午と夕方と一日も休んだ事がない。此音が聞えると畠の中は荷車の音、牛の吼える聲、梯子の上で林檎を捫ぐ鼻唄、草拔の女共が和解なしに笑ふ聲など、急に賑かになつて、朝日の活々とした力が木となく葉となく、土となく

流れ渡る。

いつも佐吾十は其岩疊な銅色の大きな左の拳を少し曲がつた腰の後ろに當てがい、右手に竹螺を持て家を出ると、両側の疏水の溝が堀てある適宜に廣い畠中の路の眞中に、大きな林檎の古木が、此畑の王樣ともいふ樣に枝を張て居る。古木の太さが一抱許て、六尺程上から二股に裂けて棚の上に枝を匍はし、幹の肌は二十年間風雨と戰つた衰へを示して一體に蝕んだやうになつて居るが、四方三間餘りに擴がつた梢は未た生々として「なに子僧共に負けるものか」と言たやうに青い葉の間から美人の頰のやうな若い色の實を勢よく列ねて居る。佐吾十の往復ともに、此の古木の下で一休憩をするのが例になつてるので、石油箱二つに板を渡した腰掛に花茣蓙が敷かれてある。

機嫌の好い時には、此處に若い者を集めて爺さんは餘り下手もない聲て、

「骨が粉になりや粉が骨になる汗は重たい金になる」と唄ふのであるが、迂濶油斷をすると、其れから直ぐに身の上話を始められるので、慣れたものは唄が濟むと、

「あんと巧えもんてごすな」と賞め捨て丶颯々と逃げて了ふのだが、氣の利かないものは大抵爺さんに白羽の矢を立てられる。

「汝等あはあ、此唄の譯は知んめえが、あんてもはあ働かんにや娑婆の飯あ食えねえだ俺あ見ろよ、此年ではあ四十二の厄年から」と丁寧に指を折て、

「今年て六十五だもんて、二十三年の間てこれ丈の仕上を爲るにや骨よ粉にしただ、其粉がはあ骨になつただ」

といふを冒頭に長々しい自慢話に取掛るので、若者の中には爺さ々の話の前提から大尾まて一句も漏

らさず暗記して居るものもあるので、

「其りやもう此間も聞て知つてるだよ」

と言ふものがあると、爺さん急に不興顔になつて、

「其んねえに知つてるだあら、あんて怠けくさるだ、はあ今の若え者あ年寄べいだ思つてどん底に聞かねえだから竈の殖えべい理窟あ無えだ」と再び本題に緒を戻すので、近頃は相成べくは此の大林檎の下を避ける樣にして居る。

此の大林檎といふのは爺さん半生の紀念樹で、爺が人の馬を曳いて歩いて居た時、弘前の町で西洋人が喰ひ捨てゝ行た林檎を拾つて其種子を植ゑて見たのが抑々の濫觴、其時は西洋林檎といふものが殆んど絶無であつたので、實植ゑから接木、其れから其れと瞬く間に殖えて、今では津輕の名產になつた、其名產の母とも言ふべき木は此れなので、彼は此木に自分の姓の地福といふ名を付けた。

實際佐吾十が地福の下に腰を下した時は、老勇士が其の瘡痕を撫つて昔の戰を偲ぶ其れと同じ樣な氣持て、當時の苦しかつた事悲しかつた事を想出す度に、今の自分がいつの間にか昔の自分となり、其の昔の自分が最後に今の自分に復る一瞬間の覺醒際に得も言はれぬ快味を感ずる、其れが又た誰かが相手となつて回顧談の矢面に立て呉れた時には爺は獨りでは想出し得ぬ微細い事まで自づと口から迸り出るのだが、今日は一人も相手がないので暫時此處に休んで、其れから西の丘に登ると、夕日は松原の上を一尺許り離れて、一日の勞働から安息に歸る靜かな光を眼に眩ゆくない程に畠の上に抛げて居る、此れが作吾十の最も得意な時て、其の懷襟に擴がる一望の畠を緩くりと見渡し、扨て腰から煙草入を取出して、掌に灰殼をはたき〳〵四五服喫み續けると澄み切た靑空を背後に眞直に立つて例の竹螺を吹出

した。と畠の隅々、木々の蔭から三々五々、人影が現はれて、鍬を肩にするもの、梯子を擔ぐもの、籠、笊、叺などを運ぶもの、其等が一同に牛小屋に近い井戸の邊りに集まつて、手ん手に足を洗ひ、農具を片付けなどするので、鷄や犬までが賑やかさに引かれて嬉しさうに雜沓の中を跳廻る、此等の有樣を恍と見下して佐五十は丁度一國の帝王にでもなつた樣な氣持に、其の深く刻んだ額の皺から洩るゝ明壯とした眼を優しい光りに潤まして軈て丘を下りた。

「おう黑牛よ、あんではあ吼えるだよ」

と佐吾十が聲を懸けると、牛小屋の前で秣を切て居た與茂作爺が手を休めて。

「あんだか知んねえだが、から吼えけづかつて物う食はねえてがすよ、あのう眼う見て呉れつへいや」

「陽氣の中症ぢやあんめえかなあ、こらあ黑よ、主あ切ねえかよ」

「切なかんべいや、頤たあ泥に浸けてるだあもの」

「おいよ、切なかんべいなあ黑」

と佐吾十は奥の方を向いて、

「おうい、鶴公居ねえかな、おうい鶴公やあい」と叫ぶ、遙かの木の茂みから、

「おうい」と應へる。軈て出て來たのは年頃二十前後の色の白い、額丈け薄く日に焦けた、何處かに氣の利いた處のある若者て、洗濯下ろしの白い襯衣に萌黃めりんすの兵子帶を後ろに結んで、半股引の下からくつきりとした脛が氣持よく縮つて見える、五分刈の頭に阿彌陀に表つた麥藁帽を取つて一寸會釋をすると爺は、

「主あ草臥れたべいがな、黑牛があんだか鹽梅が惡いての、一返床あ洗つてやつて見て呉れろよ」と言

ひ捨てゝ此處を出ると、今しも稼ぎから歴た許りの馬の一群が繋いてある、佐吾十は又た是に聲を懸ける、

「おう芦よ、大儀だつたべえや、おう青よ、赤よ、耳長よ、瘤よ、皆んな御苦勞だのう」

といふて畠の中に入ると、其處に秋桃や梨や、榲桲が、靜かに風の末葉を戰がして居るので、爺は是にも聲を懸ける、

「皆な早く大きくなれやのう、實い生るやうになつたら好い肥料をやるべいよ」

と一々に言ふのが此爺の癖なので。

今までの騷々しさが、ひたと止んで、四邊が急に靜かになると、畠中の林檎の香が夕暮の乾いた空氣を搖かして、ほつと暖かいやうな氣持に流れ渡る。此間を佐吾十は横顏の皺々を夕日に照られし、後ろ手を組みながら、のそり〳〵と歩いて來たが、呼止めるものがあるので、振返て見ると其れは牛番の與茂爺てあつた。與茂爺は佐吾十と同じ年配てあるが、佐吾十に比べると五つ六つ程多い樣に見える。

「床あ洗つただかな」と佐吾十の方から聲を懸けると、一寸腰を屈めて、

「洗つただ、洗つただがな、黒の野郎あんともはあ、癒らねえだ」

「其んねえに早癒るもんでねえだよ」

「其うだんべいかな」と横の方を向いて。

「其んて旦那、ちよつこら相談のうあるだて」

と佐吾十の歩き出す背後に從いて行く、

「はあ何んだ」

「他事でも無えだが、又た一軒殖やさんにやならねえだ」と黒い顔から白い齒を露出して笑つた。

「はあ誰だ」と佐吾十が笑ふ。

「新太の奴だがの、何んでも今の若い者あ敏捷えもんだ、かよ子と何時ん間に出來たかな、もう五月だあによ、俺あ打魂消だよ」

「彼奴あ仕事う働くでの、兎だら樣に跳廻るだから、俺あ愛がつてやつただが、もう女娘の尻窺つただかね、其んだら早く家拵へさつせい」といふ中に、例の地福の下に來たので、花茣蓙に腰を下した。一體佐吾十は氣が短い代りに又よく人に情けを懸けるので、自分の姓を名づけた地福村といふのは、佐吾十の畠に働く若い男と若い女と好いた同士には直ぐに世帶を持たす、家を建てゝやる、長年の中には馬の一匹や田の一枚も與れてやる、其れが今では二十組餘りも出來て、新らしい組が見付かり次第に與茂作が一切の世話係り佐吾十に申込むといふ事になつて居るので、佐吾十は其戸數の殖えそのを喜んで居る、

「俺あ死んだら出雲の神樣に褒められるだんべい」と何かにつけて言ふたものて。

與茂作が去つて了ふと爺は續けさまに煙草を吹いて居たが、急に思ひ出した樣に、

「お福よ、お福やあい」と呼んだ。

爺は朝から晩まで寸時も落着いて居ない、眼の覺めて居る間は用事の有る無しに拘はらず人を呼んで居るので、其れが十五六年前に、女房に死なれてから一層烈しくなつた、其中に最も多く呼ばれるのはお福てある。

お福の素性は誰も知てるものがない、死んだ女房が何處からか貰て來たといふが、拾つたのだらうと

言ふものもある、丁度お福が二歳の時で、其れから間もなく婆さんが死んだので、子もなく孫もない佐吾十は男手一つに育て上げた、這へば立て立てば歩めと段々生長くなればなる程爺さんの可愛がり様は一通りでなく、明けても暮れてもお福をば自分の側から離した事がない、彼は甚麽に腹を立てゝ居る時でも、お福の顔を見ると直ぐ顔の皺が弛んで了ふので。

加之佐吾十はお福の乳呑の時から十七歳になる今まで、今だにお福を抱て寝てるので、村の者が、

「旦那、お福さあも既うい丶女娘盛りになつただに」といふものがあると、彼はいつも機嫌よく笑つて

「こりや俺がの行火だてのう、えらあ足が暖まるだ」といふ、是れが源因になつて村中ではお福に「あんくわ」と綽名を付けた。

「お福やのう」

と爺は林檎の木間から此方へ來る姿を見付けて呼んだ。

桃色の襟を取た白い袖無しから、肉付の宜いむづ〳〵とした白い腕を出して、脇口からふつくりと膨らんだ乳が灰かに見える、腰から下は紅い腰巻一つて紙緒の草履を埃の中に曳きながら出て來たのはお福である。

「何んだし」と爺の前に立つ、同時に口の酸漿がぶうと鳴る。

「何んて草履穿いてるだよ、下駄あるだに」

と爺は笑ひたさうに目と口元の皺を寄せて、

「若え女娘だらいふもの、其んだ埃だらけになるて無えよ」

と顔を見詰める、

「其んても、下駄穿いたら惡くなりしによ」

と夕燒の雲に其の美味さうな頰を薄紅く照られて、再びぷうと酸漿を吹く。

「惡くなつたら買てやるべいに、足よ怪我したら奈何しる積だ」

「下駄あたら欲しく無えによ」

「何が欲しいだ」

「何んても」

「何だよ」

「笑うだもの」

「笑はねえによ。」

「そんだら」

「そんだら何だ」

「あのう何に」

「あのう何に」

「は丶丶」とお福は大きく口を開いて轉げる樣に笑ひ出した。

「同じ事言ふだによ爺さん」

爺も同じく笑ひ出して、

「はあれ、汝から笑つたて無えかの、そんては家さ這入つてから聞くべいやのう」

と、爺が先になつて家近く來たが、又考へ出して、

「お福よう」
「あんだし」
「あのう、黑牛が鹽梅惡いての、忘れた事しただ、鹽う食はせりや癒るだのに、汝ちよつくら行て鹽やつて來いよ」
「牛小屋しけえ」とお福は言捨てゝ其方へ足を向けた。
「お福よう」
と何か又思ひ出して言た時、お福の影が、向ふの百合畠の中に隱れて了つた。
「早え足だのう」
と爺はにや〱笑て家の方を向いた。
日は全く沈んだけれども、西の空の夕燒は凡ての林檎の上を彩つて御光のやうに薄雲を抹すと、柿の木の梢高く突出た風見鴉が、恰ら書の中に浮き出た樣て、渾然とした奥州の眠れる如き天の底の方から靜かに薄紫、赭、水色に變り行く中に、軈て末廣がりに綿を千截つたやうな小さな白い雲が、龍の鱗の如く青地の上に撒かれた。
「鰯が取れるだんべいよ」
と言て見たが、家の中は何の音もなく、椽側の鷄が二三羽、遠慮會釋もなく上り込んで居る、灯ともすに早い奥の間を淋しさうに覗いて、爺は、對手が欲しいといつた風に四邊を見廻した、遙かに黑牛の吼える聲がする。
て、爺は椽側から腰を放すと、手籠を持て木間を歩きがてら、薄明りに見える目の力を便りに、落ち

た林檎を拾ひ溜めた。

籠が張りきれる程に積込んだ頃、爺は何時の間にか畠の南端、雜木林近い秣小屋に近く來た事に氣が付いた。其處には溝を引いた水門があつて、其れが垣根の外に音たてゝ落る。伐り倒した許の材木や、冬構に使ふ杉皮の束や、跛になつた唐箕や、古ぼけた水車や挽臼など、秩序もなく置てある其奥から、晝の日光に蒸された秣が乾いた明るい香を送り出すと、未だ暮殘る蜩が一つから〳〵と鳴いて居る。

不圖、小屋の中で人聲がするので爺ははつと足を停めた、別に足音を忍ばすといふてはないが、斯る時に偶然の物音を聞く時には誰れしも自分を隱して見たいやうな氣がするもので。爺は窃と小屋を雨除に圍んだ黍殼の間から中を覗いて見た、途端に其の兩肩を搾めて棒の如く立悚んだ。

行火のお福と乳搾りの鶴公が、秣の中に半分づゝ身體を埋めて互に抱合つて小聲に話して居たので。

一旦足を戻して、再び覗いた時には佐吾十は獵犬が手强い獲物を嗅ぎ當てた樣に、總身の慄ひを强て抑えて立て居たが、軈て急ぎ足てすた〳〵と引返した。

二

佐吾十は茫然として家に入つた。

いつもならば、黑光りの廣い板椽に、舶來の燈籠と名を付けた岐阜提燈を吊るして、行火の御酌で五勺ばかりの酒に胸まで赤くし、骨が粉になるを二三度唄ふと、直ぐ横になる、同時に鼾が聞える、と其れをお福が俵を扱ふやうに轉がして寢床の上に乘せると決まつて居るのだが。此夜はさつと飯を濟ました限り、何思つたか每もの寢間の次の納戸へ、別に寢具を敷かした。

早過る程早く寢たので、佐吾十は中々眠られない、臺所の爐邊ではお福始め奴共――年期抱の奉公人

——五六人が、笑ひまじりに話してる其聲が耳を喫かす樣に聞えるので、聞くまいとすればする程、自分を嘲るかの如く耳に從く。爺は一寸舌打をして、

「お福よう」と呼掛けた、此れが聞えたかして話聲が急にひたと止むと、奧齒で殺してる樣な笑聲が、いかにも堪へきれぬといつた樣に互ひに目昫してる光景が眼に浮ぶ。

「お福よう」と再び呼んで見た。

「あい」と言て次の間に來た足音の方を向て、

「あんてはあ騷がしいだ、皆なに寢てしまへと言へよ、汝もはあ寢て了へよ、ぐちや〳〵面白くもねえ事饒舌くるて、其んで朝寢しるだあに」

「そんても爺さん未だ八時だあよ」と襖越に言ふ。

「何？八時だあ？八時が七時でも用も無えだに油あ點してる事無えだよ」

「そんだら寢りいすよ」

と何かぶつ〳〵言て行た樣子、爺も同じく何やら呟やいて、枕を引返して又頭を着けた。臺所では、

「あゝ寢べいかよ」

「二日分寢て置くだ」

「殿樣御機嫌が惡いでの」

「寢る程の程が無えだ」

など手ん手に當付がましく言て、氣の拔けた欠伸が交る〳〵に聞えると、夜具を取り出す音がこそ〳〵と、聽て晝の疲れの眠るに早く、急に靜かになつて了つた、其靜かさに引込まれて爺も何時の間にかう

と〱となつた。

不圖目が覺めて四邊を見廻した。いつもならば自分の左傍にお福がぐつたりと柔かい胸を出して眞白い腕を自分の胸の邊りにかけ生體なく眠つて居るので、爺は其手を握つて見たり口に當てたりしてる中にゆつくりとした樂しい思に再び眠に入るのだが、今ま急にお福を隣室に追ひやつた事に氣が付くと其れが俄かに擽つたいやうな淋しさを覺える。月は恰も窓の方へ廻つて居る、格子の影ながら鮮やかに拋げ込む光りは、其處に積てある絲枠や、繭外しの器械などの影をも冷たく枕元の疊に落す。と、暗い壁の方から蚊の聲が一つぷうんと聞える、

「うるせえ奴だ」と呟やいて怚と考へて居ると、蚊の聲が次第に耳元に近くなる、ぴしやりと掌で打つと手應がない、默つて居ると又來る、又打つ、又反れる、忌々しいといつたやうに爺は起上つて枕元の手燭に灯を點ける、て、其れを如何しやうといふでもなく其儘其處に置て扨て再び横になつたが、既う眠らうといつても中々眠られない、只だ顔がかつ〱と逆上せて來る。

何を考へるともなく爺は半時餘り、天井に瞳を据えて居たが、隣の室に枕を更ゆるやうな音がしたので、暗がりて何かに逢つたやうにはッと驚いて其方を見向いた、

「お福よう」と聲掛けると

「あいよ」と直ぐに返事をする、

「汝あ未だ眠ねいて居るだか、早く眠つて了はつしやい」と腹立たしく言ふ、

「眠よう思つても眠れねいだもの」

「眠よう思つたら眠れねい事あねいだ、何にをうちや〱と身體べい悶えてるだ」

「爺さんもあんて眠ねえだし」
「何んてつて其んだら阿呆こくもので無え、眠て了つしやい」と譯なしに怒つて、ジリ〳〵と燃え盡さた蠟燭をぷつと吐き出すやうに消して了つた、何處かで盆踊の音が遠く聞ゆる、はアほいといふ聲、手を拍つ、足踏みをする、其れ等が自分を嘲けるやうに枕に響くので、
「腹あ減らしめが」と獨りで言つて眠らう〳〵と力めて見たが、只だ不思議に胸が焦けつく自分が眠られずに居ると同じくお福も目が覺めて居た、其れが恰も自分の意氣地なく悶へて居る始終の樣子を悉皆知られた樣な氣がするので、益々劫が煮えて來る。
すると、先刻の一つの蚊が又たぷうんとやつて來る、目をぱつちりと開いて見ると、蚊帳を釣つてない事に今更ら氣が付く。窓の月明りにがらりと廣々とした室の眞中に自分が一人丈け寢て居る其の姿が自分ながら何となく淋しく眺められた。
「お福よう」と再び聲を懸けたが返事がない。
「お福よ、汝あ淋しく無えかよ」といつても答がない。
「此處さ來ねえかの、爺さんとこさ寢ねえかの」
仍且默つて居る。
「眠つただかな」と手燭を點けて立上つて障子を明けた、と、お福はふつくりと二重にくびれた頤を仰向けて枕からせり出した顏は一體に圓みを帶びて、小さな鼻、濃い眉毛、ふさ〳〵と柔かい產毛のやうな毛の生際に殘つて居る額、其れが何となくあどけない趣を持て小褄を乳の上まで掛け、其上に兩手を載せて居る。すると其の枕元に座つて佐吾十は瞬もせずに寢顏を見詰めて居たが、堪えきれぬとい

つたやうに、ぐつたりとしたお福の手を取て、自分の顔につけて見て、ほろ〳〵と涙をこぼした。

暫時其儘に身動もせずにあつたが、急に起上つて椽側の雨戸を繰りあけた。ほの〳〵と明けにかゝつた林檎畠は、木並の奥から白い薄明りを送つて、細雨まじりの霧が一面に深く立籠る、中に、草に落る林檎の音がほたり〳〵と重さうに聞える。爺は草履を引掛けて外へ出た、じみ〳〵と肌に染み込むやうな霧が眉に雫と落ちて顏に流れるのも拭はうとも思はず、一夜眠らずに勞れた老の身は、底に耳鳴りがする程逆上せて居るので、恰ら虚空を迷ふ拔殼のやうに、畠中の路小路を當て度もなく廻つた。

牛小屋の前へ來ると黒牛が苦しさうに泡を吹いて居たが、主人を見て、もう〳〵と二聲ばかり鳴いた、いつもならば、何とか聲を掛ける處だが爺は默つて此處を過ぎ、西の丘へ登ると、暮るゝにも急な此土地は明くるにも急で早や全く夜が明け放れたが、薄氣味の惡い霧は雨になりさうな空色を濁して木といふ木は全て死んだやうにそよと動く葉もない。此處に暫らくの間、物思に沈んだ爺は、例の竹螺を吹いて地福の下に來た頃は自分ながら疲れ切て居るのに氣が付いたので力なく花茣蓙の上に腰を下したが直ぐごろりと横になつた。

眼の覺めたのは彼是十一時近くてあつた、日がぢり〳〵と顏を照らして頭の上では蟬が油を煮る樣に啼き出して居る。

「ほう〳〵」と氣短かに二三度續けて怒鳴つても逃げない、起き上つて石を拾ふと蟬は賢こくも飛んで行たので、其の寢覺めの不機嫌な顏を一層六つかしくして後を見ると與茂爺が何か言ひ度さうに腰を屈め佐吾十の顏色を伺ふ樣に立て居る、

「旦那眼え覺ましたけえの、あの黒牛が大變てごすよ」

「如何しただ」
「眼ら閉めて舌出しますだ」
「牛が舌出す？　其れが不思議けえ」
「はあ平常と違ひますだて」
「汝あ牛の係りだんべいに、舌出すも尻尾出すも俺が知た事けえ」と遠くの蟬に、
「何んてい八釜しいだ」と苦りきつて居る。いかさまにも只ならぬ機嫌と與茂爺は幾度も頭を下げて默つて立去たが、霎時すると又た戻つて首を縮めながら、
「旦那さあ」
「何んだよ、汝も何年ちうもの牛飼つてゐだよ」
「いんにや其話ぢやごつせんて、あの……」
「何んだか知んねえが、今時分其んだ話し面倒臭えだよ」
「ちよつらて宜いだが」
「早く言へよ」
「新太とおかよの事だあに、家建てべいに木柄見て呉せいよ」
「新太とおかよ？」と佐吾十は何か考へて、
「其んだ事聞きたく無えだ」とぷつと唾吐いて、鷄の羽を繋いだ鳥除の繩をぐつと引張ると、鳴板がから〳〵と奥の方で響く。傍を見ると與茂作がもう居なくなつて居るので、何だか張合が無くなり向ふを見ると、與茂作が大きな土瓶を提げてほく〳〵行く姿が見える。霎時其の後影を見詰めて居たが、突然

に大きな聲で、

「與茂作やあい」と呼んだ、呼ばれた與茂作は土瓶を木の根に置いて、神妙に再び其の頭と腰と足との調子を取て前屈みにやつて來る。

「旦那呼ばれだけえの」と頭を突出して主人の顔色を窺ふと、佐吾十は俄かに慌てゝ、

「うむ呼んだがな、用いつても別に用ても無えだが、爾だ、あのう鶴公何してるだ」と横を向く。

「今の先刻まで秣あ切て居たが、何處さ行たか今見えねいだ」と與茂作が答へると、暫時默つて、

「汝あお福知んねえかな」

「いんにや、今朝つから、から見ねえやうだ尋ねて來べいか」と與茂作が言ても答がない、どんよりとした眼で地面の或一點を見詰めて居る其の顔色を、ちらりと見て與茂作は足音のせぬやうに此處を立去つた。

日が眩い程に照て來る、蜩が次第に喧しくなる、與茂作は倉皇と逃げて行て了う、滅多に晝寝をした事のない自分が、午前丈けを眠つて了つたので、其間何だか係う馬鹿にされて居たやうな氣持がして、見るもの聞くもの悉くに突り散らしたいといつた風に胸の底から小焦躁たくなつて、煙管を吸うと火が消えて居る が、直ぐに燧石を打たうともせず、其儘に煙管を啣え直した。奥の方では元氣のいゝ女の聲で、

「姐子居たかと窓から見れば」と一人が唄ふと、

「親父あ横座で縄綯てるよう」

と一人が和する、白い手拭で頬冠りした後姿が、ぱくり〳〵と林檎を捫ぐ毎に揺れる木葉の隙から見

ゆる。

「没意らねえ」

と舌打して爺は、其方を尻目に懸けて、反對の方を向くと、追駈ける樣に續て唄ひ始める。

「色の黒い奴情夫に持てばあ」といふと、

「鴉見るたび思ひ出すよう」といふ、彼是三十分許も此那唄を聞くともなしに爺は何か沈思へて居ると突然楢合の木間から、

「お福樣居ねえだよ」

と與茂作が顔を出した。

「あんだ？」と向直ると、

「お福樣目つからねえだ、不亂に尋ねだが」

と與茂は小さくなつて居る。

「誰れが尋ねろと言つただ」といふ聲が稜張て居る

「お福樣知んねえがつて聞かしやつたけえに」

「聞いだは聞いだ、尋ねろと言つたて無えだ」

「はあれ、わりい事したたかな」と與茂作は謝罪る、佐吾十は益々澁い顔して、

「用の無えもの何んで尋ねるだ」

「はあ、思え違えしただ、はあ善く無え事しただ」と頻りに繰返してる中に佐吾十は何時の間にか默つて別な思に走つたので、双方顔ばかり見合つて居たが、

「與茂作よ」といつた佐吾十の聲は劃然と優しくなつた。

「汝許に女娘あるだあな」

「あるだ」と與茂は急激の變化に驚きながらも直ぐに答へた。

「ありや何處かさ嫁にやつたかのう」といふ調子は平素と違はぬ、

「いんにや、やらねえ、が、其事だてのう旦那、あの通りの御多福だで、若え男あ構つて呉れせんし、本當によ旦那、嫁の口一つ懸つた事無えだ、あゝいふ面に生れたのあ、わが身も沒意らねえしな、親の身から見ても無情くてなんねえだ」と佐吾十の顏の雲行を見い〳〵、吻と息をついて、

「如何だ處でも若え中に結緣べえ思つてるだに、好きだ男引張て來る手腕も無えだし」と暫時言淀む、

「好きだ男つて、汝あ其んだに男持たせ度えかや」といふ佐吾十の聲は餘程穩やかである。

「考えて見さつせい、若え時にや、男の欲しいものたあ女娘て、女娘の欲しがるものあ若え衆だによ、男はそんでも辛抱するだがの、女子は爾は行かねえだ、婿う欲い〳〵思つてても、そら口にや言へ無えだし、嫁盛りが過ぎると氣が重くなつて身體が大儀になるだ、女子に男持たせるのあ車の心棒に油あ塗ると同一事たて、誰だか知んねえが能く言ふたもんてな」

「其れも其んだが、汝あ只た一人の女娘を外さ與れてやつたら、汝あ淋しかんべいよ」

「どうて淋しいだ、年老れば段々淋しくなるだ、揚句にや墓さ入るだからの、墓は一番淋しい處て無えかの、其んて物あ諦め樣だて、淋しいものだと決めて了つてゝ、其代りにや子供に寸時も早く面白え思させりや、死んでも後生が善いだ」

「其うだのう」と佐吾十は何か考へて居る。

「其れを御前樣、自分あ淋しいからつて色氣付いた女娘を無理に引張て置た日にや、女娘の方で男作えて親置いてとつ走るだ、其れよか早く男當てがつてやりや、こら程大丈夫な事あ無えだてのう、汝にした處が、汝の御蔭て、此村にや親不孝が一人も出た例が無えだ、あんでもはあ繭の蝶だ樣に、くつ着いたら夫婦にして了うと、そらい〻子が出來て種が取れるだよ」

「發明な事言ふたな」と佐吾十は初めて笑つた、與茂は猶ほ饒舌り續ける

「汝あもう忘れたんべいよ、が、俺あがては女房があるての、こうでも二人て昔の話などする時あるで、若え時の事忘れねえだ、あんでもはあ其時の事考えると、今女娘の事を何んだ彼だと叱言べひ言はれねえ樣だ氣がするてハ、、、、」と笑つたが、對手が再び曇つた顏になつたのを見て。

「どうら、黒牛もう一返見て來るべい」と逃げる樣に小足に急いで去た。殘された佐吾十は再び口を尖らして伏目になつたが、不圖眼を擧げると、丁度一間許前の木の下にお福が默つて立て居たのを見て、自分に薄暗い事でもあるかの如く非常な驚き樣て、つと立上り

「汝あ何んて人の話を立聞してるだ」と腹立たしく言つた。

三

四五日の間、佐吾十は此那風に日を暮らした。近頃は滅多に彼の傍に近寄るものもない、畠のものは皆な、黒牛が死だから機嫌が惡いのだといふて居る、て、其の弔詞を言ふものがあると、爺は苦りきつた顏て、

「生物だあにや死ぬ時もあるべいやー」と素氣なく言ふ。

或日爺は氣分が惡いといふて一日朝から室に引籠つて居た、此んな時にはいつもお福を呼び通しに喚

ふのだが、此日はお福をも室の中へ入れぬ事にして、食事の時だけ、茫然と出ては飯を白湯で搔き込み、其れが濟むと直ぐに引込んで物思に沈て居た。

夕飯時になると、爺は何となく氣持よさゝうに庭を逍遙して居たが軈て與茂爺を居間に呼んで長い間しんめりと話をした。

其翌日此村中で肝を潰す樣な話が與茂爺の口から他の口口へと傳へられた、其れは行火のお福と鶴吉の祝言の事で、與茂爺は飛んで廻はつて村中の人を集め、早朝から家普請に取掛つた、一軒は新太と御かよの家で、一軒は鶴吉夫婦の家。

地均しをする、石を据える、材木を組む、壁を塗る、百姓は大工の業にも慣れたもので二三日の間に家が出來上つた、壁が未だ乾かないといふに性急の佐吾十は、其まで待て居られぬといふので、急に建具、疊やら大騷ぎをやつて漸やくの事に此に引移るまでになつた。

庭の柿の木の下に荷車が二輛、轅に酒樽の臺をした一輛は、戸棚、手桶、大盥小盥、臺所道具を積んで、今出る許りにして居る、一輛は丁度四五人てがやがや言ひながら椽側から持ち出す黑塗の簞笥、同じ色の長持、其れを積ふと罵り噪いで居る背後から、指圖がましく聲掛けて居るのもある。

「ほら出たぞ〳〵」

「あんてい重ていだ、どつさり這入つてるべい」

「どつさり這入つてるべい、そらどつこい、こゝらだ」

「うんにや、もう寸尺左さ推せやい」

「右さ引けやい」

「上が明いてるだ」
「行燈を乗つけるべいよ」と一人がいへば
「針箱がある筈だ」と二人がうろ〳〵して居る。
「もう些と乗つけてもいゝによ」と梶へ廻つた男が、一寸上げて見て言ふ。
「もう何にも無えだ」
「行火あ乗つけるべいかよ」と誰やらがいふと
「はゝゝ違えねえだ」と一同が笑ひ出して柿の木の方を見ると、佐吾十が其處に莞爾ともせずに立て居たので、申合した樣に顏を見合せて口を噤んで了つた。
「旦那御目出度うごす」と大勢の中から與茂爺が鉢卷を脫て前へ出ると
「皆なが御苦勞だの」と佐吾十は人に顏を見られるのが蒼蠅いといつたやうに顏を反向ける
「あんてもはあ、急なごんだて、旦那、村の者もはあ、吃驚しましたゞ、旦那淋しかんべいに、よくはあ大事の行火手放したつての、皆なで言つてますではあ」と佐吾十の傍に進み寄る
「村の者あ爾言てだかな」
「へえ、皆んなて喜てな、恁那目出度え事あ無えだに」
「鶴公何んと言てだよ」と佐吾十は妙に言葉尻を力なく言ふと、與茂は足の先で石を搔き寄せながら
「何んて言てるつて御前樣、神樣だあ樣に難有えて言てるだあよ」
「爾か」と、ふいと畠の方へ行て了ふ。——
途端に鶴吉とお福の二人が高笑しながら來るのに礑と出逢つたので、爺は一方ならず慌てゝ立止まつた。

二人とも引越しの埃によごれて、鶴吉は襯衣一枚に半股引、お福はかちんの上つ張を着て眞白な手拭で髮を包んで居るが、色の白い丈けに耳際から襟元まで今更らのやうに美くしく見える。
「汝あはあ行くだあかな」と自分の前に御辭儀をする二人を、熟々と見下して爺は言つた。
「はあいろ〳〵御世話樣になりましたで、あんともはあ」と鶴吉は眼をうるませながら畏こまると
「爺さん、そんでは御暇するだよ」とお福は未だに狎へる樣な調子で、一寸會釋した。爺は態とらしく快活に笑つて
「そんだら仲よく暮らせよう鶴公、お福可愛がつてやつてくれろよ」と霎時默つて
「お福、汝あ嬉しかんべいのう」と言て、俯向きながら互に顏を見合はせては耻かしさうに笑つて居る二人の上から直ぐ眼を反らし、
「うむ嬉しかんべい」と再び繰り返して
「そんだらはあ行けよ」と瞳も動かさず何かに見惚れてるやうな目をしながら惝乎といふ
「そんだら旦那」
「爺さん……」と二人は辭儀をして庭の方へ廻つた、返事もせずに爺は其後影を悄と見送つて居たが急に
「お福よう」と呼止めた
「あいよ」と氣輕に答へて振向くと、何やら口を動かし度さうにして、俄かに思い返したといふ風に
「いゝよ、もう行けよう」と手て推しやる樣にして直ぐと後ろ向いて了つた。
が、直ぐと又、足を返して二人の出た方へ來て見ると、既に影もない、無格好によき〳〵と立て居

る柿の大木二三本、其下の土は日當りが悪いので薄い苔を見るやうにじみ〳〵と濕つて居る、其上に酒樽やら、石臼やら、木屑藁きれ、菰きれ、其那ものが他愛なく散らかつて、今までの賑やかさに引かへて大風の後の樣にがらりと淋しく、夕暮近い何處かの隅で、思ひ出したやうに鳴き合はす虫の聲々が際立て聞ゆる。

と爺は茫然と薄闇の空を見詰めながら、がつかりと椽に腰を落し、今までお稲の簞笥や小道具の置いてあつた疊の隅を見廻して又茫然と

「嬉しかんべいの」といつて獨り淋しさうに唇を結んだ。

四

其翌日から佐吾十爺の姿が畠に見えない、朝夕の竹法螺も聞えない、牛や馬や梨や葡萄や林檎にものいふ人もなく、地福の下でのべつに人を呼んでる其聲もなくなつた。其代りに畠の隅々では無遠慮に唄つたり笑つたりする聲が陽氣に起つた、が、其れが底に力のないといつた樣な賑やかさで、畠の中は丁度秋の空の晴れ〳〵とした中に心細い氣の冷えが含である樣に、一體に張合の抜けたやうな淋しさが籠つて來た。

一日二日三日、四五日といふもの、佐吾十は寸時も居間の外へ出た事がない。すると七日目の夜の事である。

牛番の與茂作が一廻り畠を見廻つて家に入つたのは彼れ是れ十二時頃、空は一點の曇もなく胸の底に冷たく浸入るやうな星月夜で、其れがそよと木の葉を動かす風もなき恐ろしい沈默の此の林檎園を謎のやうに濕つぽく照らして居る

「あんと云ふ靜かな晩だべいよ」と與茂作は獨りで言て戸を閉めた。

不意の物音に眼をさました與茂作は、寢床を跳ね起ると、外は何時の間にか洪水の樣な風の音

「やあ大風が來たな」と窓から空を覗いて見ると只一面の灰色、朧の中に萬樹の推し合ひ揉み合ふ影が、丁度七月の眞晝に動く夕立の雲の如く眞黑に上下に猛り狂ふ

物に慣れた爺は直ぐと腰に鉈、六尺棒を取て外に出た。

「火の用心〳〵大風が出るだに用心さつしやい」と皺涸れた聲て村中を呼はつて、眞直に畠の方へ驅け出した。

山が少なく高い處といつては遠くに起伏する一帶の丘陵ばかりて、西は日本海、東は八甲田の麓まて十何里といふ間は、見る限りなき平原を、死の色といつた樣な灰色の雲が瞬く間に一切れの隙もなく頭を壓へ付ける樣に天を塞いて了ふと、ぶうと底に力のない樣に生暖かい風が吹き出す

「やあ風が變つたぞ、そうら變つたぞ」と與茂作は狂氣の如く叫んて、倒れまいと腰を屈めた

「誰だあよ、與茂作爺けえ」と息を窘ましながら薄暗から聲かけるものがある

「おう鶴公けえ、酷あ事になつたぞ」と立止る、鶴公は漸と追着いたが二人は何も言はずに向方を見た。

夜明には間がない。風は今出盛りてある。ごうつといふ聲と共に何處やらて木の裂ける音、棚の落る音がすると、ひた推しに一方に推し伏せられた見る限りの林檎樹が、黄色い斑を帶びた百千の猛獸の如く其枝葉の鬣を振ち上げられて、反對の方に逆さに振ち戻さるゝ、途端に村の方て、竹法螺の音、男女の叫びが起つた。

「爺さんは如何したゞかな」と鶴吉が思ひ出した樣にいふと

「今に來るべいか、はあ、あんて遲え事た」と與茂作は刻一刻に揉まれ行く畠物の光景を手の付けやうもないといつた樣に眺めたが、物に刺された樣に飛び上つた。今迄向ふの野中の大沼がどぷり〳〵と波打つて居たが、其れがどしいんと云ふ堤の切れ出した樣な音がすると、奥の地福林檎の邊りて何かばり〳〵と壞れたので。二人は一生懸命に驅け出した。

夜が明けた、天地は只明るい、物凄く明るい、絶望の色の下に戰つて居る生物の翻蹈の光景が眼前に見られる。其れは此土地で惡魔よりも恐ろしいといつて居る南の生暖い風て、之に吹かれると口も喉も埃に乾くやう、顏が燃えるやうに逆上せる、畠物は堪つたものでない。其れが又、枝摺れ葉摺れの爲めに熱氣を起して葉と云ふ葉は燒かれた樣に爛れて赤黑く錆びて了ふ。恁ういふ日に限つて一滴の雨も持たないので。

二人が家の裏口まで來た時に、お福も駈けつけた。家の奴共は無論起きて居た、村の者は手ん手に、棒、熊手、梯子、などを持て走せ集つた。

風は益々吹きつのる、木葉、木屑、板片、屋根の柾がばら〳〵と勢よく飛び散る、

「家根さ上れやい、家根さ」と與茂が叫ぶと、氣の利いた若者四五人はた〳〵と家根に上つて吹き落されまいと匍匐ひながら何かへ犇と攫つた。

「梯子を立てろ」と再び與茂が叫んだ

庭の大きな柿の木二本其れに二本の梯子を立てゝ、風の向きに枝を支へて犇々と繩て縛つた、其れが吹き寄する度毎に梯子の足がぢりつ〳〵と土を嚙んで竹の如く撓へられる、一同は只ならぬ顏色に其れを見て居る。

と、家の中から

「爺さま居ねえだ、爺さまが」とお福が叫ぶ聲がする。何といふ事なしに與茂作と鶴吉は納戸から駈け上つた。佐吾十の居間へ入つて見ると椽側の雨戸が一枚明けてあるので、其處から吹き入る風は蚊帳の裾を天井まで高く吹き上げて、主人のなき蒲團と枕とを冷やかに見せる。

「旦那やあい」

「爺さまやあい」と叫んだが其聲が直ぐと風の爲めに室の中へ吹き返へされて、其れが三人の胸に只事でないといつた樣な或る恐怖を與へた。

思ひついた事があるので三人は地福林檎の下へ駈け付けた。二十餘年の風雨と戰つて今にも其の若々しい色を誇つて居た大林檎は無殘にも其の眞中の幹の岐れ目から眞直に根元まで裂けて、美くしい木肌を露はし、巨浪の如く疊まつた枝葉を兩方に拋げ出したまゝ、例令ば獅子の屍の大寂莫を以て猛り吼ゆる嵐の吹き弄るまゝに任せて居る、其の一方の枝に腰掛けて、佐吾十は殆んど魅入られたかの如く、裂目の木地を見詰めて居た。

「旦那樣よ」と與茂作が言ても答がない。

「爺さまよ」とお福と鶴吉が代り〳〵に呼んでも身動きもせぬ

二十日許前の佐吾爺とは打て變つて、頰が痩けて口元淋しく、がつかりと肉の落ちた横顔の額際の一段と稜立て見える處に鬢からかけて疎らに搦んだ白髮は、又となき衰弱を現はして居る。

「爺さま」と再びお福は呼びかけて、其の膝の上に手を置き、覗くやうにして下から顔を見上げた、と、佐吾十は突然其手を確乎と握つて瞬きもせずお福の顔を見下し。

「お福か」と夢の樣に小さな聲で言たが、はつと氣が付いた樣に

「お福か」と再び大きな聲に呼び直し、ずつとお福の身體を膝の上に抱き寄せて

「お福よう、汝あもう歸る事なら無えぞ、爺さまはな、爺さまはな」と言て再び石の如く默つて了つた。

（終）

歌

尾上柴舟選

○　大村流外

寂寥の聲ともなりて秋の野を這ふかと思ふ夜の笛きけば

わが君は船して我をまつらしと心さそひぬ鐘は湖より

わが悲たとへば冬の凍てる地に石うつ如き胸さわぎかな

眼とづれば闇にひろごる天地の果なき中にゑみます君よ

秋の雨行方もわかぬわが姉のとひもこずやと柱に倚りぬ

永久に君を忘れぬわれありとわかき心をはぐゝみてゐぬ

○　横田双蝶

ほのかなる野のこもり沼にうす月のしろきがうかぶあさぼらけかな

海鳥がもろ羽ひろげしさまなして島より島に雲つゞきけり

世を秋の霧するあした丘にして泣けばうするゝわがおもひかな

鐘なりぬほすゝきつゞく丘こえて枯葉さゆらぐはちすの池に

宵の灯はしろうともりぬ浪うねる小島つゞきの海のもなかに

○　小川眞清

清水わくいでゆの道の青葉かげ涼風めづるをんなづれかな（洛泉雜詠十五首の中）

山の湯やみどり滴る欄近う枕してきく水のおとかな

いてゆ道鈴ならしゆく馬の上にふまれし草の花惜しみけり

蔓ひけばかなたにゆれて晝顔の花はちひさく草くゞり來も

天の宮にことやおこれる雲はいま山の陣すてとくかけりゆく

○　鈴木ろくし

故郷はもの食む鳩が脊の上に草の實おつる秋の暮かな

弦月は朽木のみなる上つ毛の風吹く山におちにけるかな

○　小林狂霞

ひた走る雲はあめして陣營の細るかゞりになくほとゝぎす

朝窓にゆめくりかへし合歡の花咲きぬと君に文かく日かな

○　山下里子

わが心うつりて咲ける白萩と思ひて立ちぬたそがれどきを

わが魂の千里へだてしおん母の涙にぬれてかへるらん夜か

男の子さへ悲しと云ひぬ初秋の海に夕づく入日を見ては

○　早苗田綠女

君と別れ森をさまよひ乾反葉を踏めば師走の霜ふむ心地

何となく人逝く如き思ひして獨わびしき秋雨の夜や

冬の原みぞれふる日を市すとて牛千疋の集ひ來にけり

こほろぎや罪ある屍かきのせし柩車のきしる音ときく

たち別れ我が行く方は秋雨の降るらん樣に眼くもりぬ

磯やかた夜鳴る潮はわが胸の古りし愁を知るが如くに

秋の蚊の人を索むる如くにも人ぞ戀しき雨のふる夜は

○　工藤工刀

枕邊に草の香湯の香たゞよひて夢まどかなり板

留の宿

○ 秋山琴泉

芭蕉葉に秋風たちぬ歌の集うたゝ涙の字の多きかな

○ 吉村葩人

七草の亂れ咲きたる御壺に連歌しにけり御簾あみ人と

蟋蟀や壁にのびたる蔦はひて樂書したる戀歌の上に

○ 渡邊甚之助

白鳥は使のやうにしのゝめの茜のなかをわたりこしかな

錨ひく裸の子らに月さしぬ夜のおほ船いまうごく時

しほざゐやうすくれなゐの帆とまがひ南に走る初夏の雲

おもひではふと浮びくれ春風に薫じて咲く花かのやうに

秋の山大き樹立の一角にうす雲するを草に寢て見る

若木立芽をふくあたり里の子が笛やふきゆくふるさとの道

○ 若麻績長風

ものゝ音さながら鞆のひゞきして囹圄(ひとや)めきたる秋風の家

蓮の花淨樂界の思して頬に頬するとき開きけるかな

うつ霰ひたひ痛しと海賊の長(をさ)は惡鬼のしかめがほかな

もらひ湯や俳師めきたる翁も來て共に雁きく時雨の夜かな

雪もよひ鈍き日光(ひかり)は亡國の大都のごとく街(まち)をてらしぬ

君が目と吾が目と逢へる中にして白う流るゝ悲しきものよ

○ 渡邊孤帆

たそがれや瓜をひろひに畑に出し母をまつ戸に
なくきり〴〵す
野の家やうす紫とむらさきと朝顔そよぐ露にも
つれて
うす月に君は細戸を片あけて葵のやうに立ちて
おはさむ
靜やかに雨ふる小野は新墓の下なる知らぬ人も
戀しき
やがて來むわが世のさまのあり〳〵と見ゆる如
くも寂しき夜かな

○　曾根朧月

一もとの野のふる樫よ汝が蔭に瞑想ひふけりし
われを知れりや
夜釣する人もありけり對岸の町のともしのほの
さす岸に
秋雨の細々とふる朝あけはひとりうれひぬうれ
ひの日よと

○　上郁萩雄

花の色草のかをりともつれつゝたゞよふ野邊の
日ぞうらゝなる

○　小宮山春子

野葡萄のあまき香吸へばおぼろげに幼き故郷は
目にうつりきぬ
花あはき里のむら小雨はれにけりぬれたる山羊
をぬぐひてやらむ

○　廣浦藻花

冬の國尾上の鹿の毛の色に枯れたる草の原に月
しぬ
ふるさとはすゝき穗に出て夕月の窓こそ白め君
のまたるゝ

應募和歌へ東京市小石川區原町百三十三番地尾上柴舟宛の事

野菊

繞石選

草花帖の野菊淋しや句を題す　帆万千
石切の野菊折り敷く潮籠かな　同
溫泉の道や小松疎らに野菊咲く　同
塚ありて芒に交じる野菊かな　同
毛見衆の鞭弄ぶ野菊かな　同
崖下に野菊靡きて流れかな　同
石殘る御下屋敷や野菊咲く　同
此村の貞女が背戸の野菊かな　同
葬の月塔婆に近き野菊かな　同
吾戀の野菊を撈り捨てなどす　同
沼近く花に乏しき野菊かな　同
松の下に門なき庵の野菊かな　同
野菊路邊の女房が晴衣かな　同
柴折戸を庭へまはれば野菊かな　吟朗
右すれば髮塚道よ野菊咲く　履友

砂あらき川沿道の野菊かな　水泡子
糠雨に濡るゝ野菊も旅情かな　董哉
此家や野菊を添へて書き見ん　冷泉
藪の中の小き流れや野菊咲く　桃村
稻刈の飯食ふ土手の野菊かな　竹馬
駈出て水飲む畔の野菊かな　青城
射的場の人來ずなりて野菊かな　汀泉
野菊咲いて水車へ通ふ道狹き　せつ
稻掛の蔭に一むら野菊かな　石洞
大木の倒れし下の野菊かな　夜光
土饅頭土新らしき野菊かな　蓼花
どこまでも續く細道野菊かな　沐雨
御城下へ出る馬つゞく野菊哉　白水
水いさゝか河原の石に野菊咲く　句仁王
野菊咲く裏の日南や千把扱　垂藤
送り來し湯女と別るゝ野菊哉　方外
松並木盡きて徑の野菊かな　萍也
蜻蛉飛ぶ野菊日和や山の池　四緑

痩馬の鈴振つて行く野菊かな　杜子
海を見て飯食ふ丘の野菊かな　泰山
切り倒す杉に壓さるゝ野菊かな　同
曼珠沙華野菊も交り咲きにけり　巷偲生
山亭の野菊舲や連句會　同
墓續き野菊續きの山根かな　瓢乎
星の宵月の夜明の野菊かな　同
旅の笠古き野菊の一句かな　李王
野菊咲く庵の日和や線香干す　同
水絶えて久し河原の野菊かな　霞翠
野菊咲く一筋道や觀音寺　同
野菊咲く追分塚や晝の蟲　天仙
囮して人ひそみ居る野菊かな　同
毒茸の紅うつくしき野菊かな　鳳梧桐
八瀬人や野菊日和を京に行く　同
末枯るゝ野ばらの藪や野菊咲く　三千丈
馬の尾に打ちはらはれし野菊哉　同
穢多寺の垣の外なる野菊かな　同

畔豆に引き交りたる野菊かな　松濤樓
吾亦紅醉ひぬ醒めたる野菊哉　同
芒が根一もと野菊うねり咲く　同
綿摘んで笊置く畔の野菊かな　同
山の裾のうね〳〵道や野菊咲く　同
新開や凹みの空地野菊咲く　磨劍
山の沼鎌研ぐ岸の野菊かな　同
村の中の火の見階子や野菊咲く　同
沼の水岸に溢るゝ野菊かな　同
豆引けばはた〳〵が飛ぶ野菊哉　同
垣根草みな末枯れて野菊かな　梅痩
矢の根石堀りし凹地の野菊哉　同
野菊咲く近道を地藏詣で哉　同
足折れし蝗かなしき野菊かな　同
蟲の音のたのみ少き野菊かな　同
數々の花とくに凋む野菊かな　同
御造營の石積む原や野菊咲く　寒骨
詩仙堂脊高の野菊窓に咲く　同

庭に野菊を移して秋をいとしみぬ　同
牧場の馬群れ去つて野菊かな　同
野社の祭りや野菊盛りなり　同
小便に出るや野菊の月に蟲　同
姫館跡一ト平野菊咲く　同
小寺嬉し野菊咲く門尚ほ嬉し　同
花芒野菊も挿して月見かな　同
馬の市開く野菊の日和かな　同

募集課題
鷹　十一月十五日限
吹雪　十二月十五日限

・應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事
本號の課題に應じ給ひし人にて一句も採錄すること叶はざりしが十八人の多きに迨べり、御奮勵を望む。



當今の新聞論説

XY生

福地、沼間、末廣、岡本、丸山、矢野諸氏の新聞記者たるや、常に輿論を指導するの意氣あり。其の地位殆んど宗嶽の群山に對するが如きものありき。

今の記者其の人の學識文章、必らずしも前の數氏に讓るとなし。否、其の文才學問共に遙かに數氏の上に在るべし。唯だ世に對する識力程度の差に於て、遠く數氏に及はざるのみ、通俗に之をいへば、彼の數氏と當時の俗衆とは、其の識力に於て著るしき懸

隔あり、數氏者は確かに當時の俗に先んずること十數里なりしも、今の新聞記者は僅かに俗衆と雁行するのみ、甚だしきは則ち俗衆に後るゝものすらあり、一般の學識の迅速に進歩したる結果に相違なきも、新聞記者の進歩の割合の獨り遲々たるや爭ふ可らず。

暫らく吾人をして忌憚なく今の新聞記者の論文を品評せしめよ、單に新聞紙の良否をいはゞ、其の記事の精確且つ迅速にして無用のものなき、文章の簡潔にして選錬なる、筆擧以外侵す可らざる權威ある等、細かに品騭し較量して然る後判定せざる可らずと雖も、吾人は今之を避けて、單に新聞紙の論文のみに就て月旦すべし。

吾人は先づ第一に『日本』の三宅雄二郎氏を推さゞる可らず、氏の筆路近時自在を極め、情勢併せ到りて曲折幾んど盡さゞるなく、殊に氏の問題に對する、一切の情僞に精通するが如く、其の博識洽聞洵に驚くべきものあり。思ふに氏の周密なる思慮は、事實の上に立たざる議論の畢竟空なるを悟つて、一意耳目を博くするに努め。到底耳目の及ぶ可らざる處は、また精しく度り細かに推し、竟に常識を以て之を判斷するの習癖を養成したるに似たり、是れ新聞記者の伎倆として幾んど純理想に達せる也、氏の筆を下すや、妥當を極め周匝を極めて曾て謬ること莫き寔に由緣ありとすべし。

然れども氏は曾て財界の事を論じたることあらず、未だ自から之に精通したりとせざるが故なるべし、一知半解の徒、輕々しく大事を臆斷して、常に識者の嗤笑を招くに視れば、氏や實に太だ智也。

殊に尊ぶべきは、氏の新聞記者としての人格也、氏や文學博士として學問の素養極めて深く、聲望また高きに拘らず、淸貧を娛み、新聞記者たる天職を理想として、是れ以外寸分も他に覓むる所あらず、凡そ人の最も強きは他に覓むる所なきに在り、苟くも覓むる所あれば既に自から屈せざる能はず、新聞記者にして少しく利勢を欲せんか、到底完全に意思の獨立を保つ能はず、時としては富豪に媚びざる可らず、時としては

勢力の意を迎へざる可らざれば也、思へ足を光武皇帝の腹に加へたる嚴子陵も、日光を遮る歷山大王を叱し退けたるダイオゼニスも、共に覓むる所莫かりしが故のみ、我が三宅氏も亦是れ也、故に其の心曾て勢利の爲めに屈せず、况んや其の手何ぞ金錢に穢れんや、當世若し人格に於て其の完全なる獨立、純粹想の新聞記者を求めば、吾人は獨り我が三宅氏を推す、然り、唯だ三宅氏一人を擧げん。

『東京朝日新聞』の池邊吉太郎氏また多く平正の見を以て重きを措かる、素より鐵崑崙時代の精彩はあらざるも、文章其の識力と共に益々老熟を加ふ。

『東京毎日新聞』の島田三郎氏また是を是とし非を非として、侃諤の言說を以て聞ゆ、文章益々圓熟して其の能辯と共に意到り筆また到る、自から『東京朝日』と共に文壇の珍なり、唯だ惜むらくば論文以外の記事往々野卑粗漫に流れて、氏が衣冠束帶儼乎として玄關に立つ其の隣室に於ては、娼婦俳優壯士の徒、紛々然として野態百出の趣あり、爲めに侃諤の說また大に權威を損するヿを。

朝比奈知泉氏を失へる『東京日々新聞』は尙ほ多少の信用を中外の言論界に有し、石河幹明氏が多く執筆せざる『時事新報』は概して穩健の說を立てゝ、屢々時弊に適中するも、其の文章の冗漫なる、近時實に驚ろくべきものあり、文章に一種の風格を具へたる福澤先生の遺鉢を傳へて、暢達明晳多く比類なき文章を出せる石河氏、今知らず如何の狀ぞ

『國民新聞』の德富猪一郎氏また石河氏の如く多く論文を艸せず、故に氏の如き精練の文を論說欄內に看るヿ能はずと雖も、然れども前內閣のため孤壘を守りて天下と戰へる、往々嗤ふべき論調ありしも、猶ほ言ふべきを言ふて曾て殘す所あらざりしを見れば、また論壇一方の强たるに足る、况んや氏の努めて大局に着眼し、努めて穩健の說を立てんとするヿを忘れざるをや、氏の東京便りは實に文壇の逸品にして、其の時々揭ぐる葉書の紀行文と共に、氏が一代の文章家として、到底他の窺窬を許さゞる特長あるヿを明示す、氏にして

若し三宅氏の如き獨立を有せば、當さに天下を風動する大新聞記者たるべし。

三宅氏と德富氏とに於て、最も妙味あるコントラストを看る、哲學者と才人、智愚、敏捷鈍根、畢竟如何の差ぞ、如何か是れ尊ぶべく、如何か是れ悦ぶべき、後進の心あるもの仔細に之を翫味すべき也。

新刊批評

▲情的大革命

伊藤銀月著　東京國民書院發行

世を擧つて淫蕩、頽廢萎靡殆んど救ふべからざるに當つて、忽ち外難あり、上皇親征、遂にその陣歿となる、是ぞ彼等が耳邊の霹靂、卒然長夜の夢より大覺醒の時期に入り、老若戈に堪ふるものは國を空うし海を蔽ふて渡る、義憤の集まるところ豈敵あらんや、群がる强兵を百里の外に切り靡けて、玆に先皇の恨に報え大陸に一大國家を建設するを致す、而も之が爲に、本國に於ける弊風は一洗せられ、人情淳朴道遺を拾はざる理想郷を現ずと、これ本書の梗概なり。見るものその心理的描寫に多少の不用意突飛ありとて咎むるなかれ、著者の意蓋し別に動くところありて作れるもの、心あるものの胸に何者をか喚くべし、更に筆力縱橫、その景を描くところ特に詩情の掬するに堪えたるものあり（定價金五十五錢）

▲成業立志談（上）

若月保治譯　內外出版協會發行

ダニウエル、ウエブスター、シヤフツベリー卿、アブラハム、リンコルン等、十三偉人の立志談を集めしもの、此種の著述は近來甚だ夥しとせざれど、國民をして向上の一路に向はしめ、元氣を鼓舞して衰へしめざるもの、多きを憂へざるものも亦此種の著述なり、原著はウヰリアム、テーヤー氏の作なりといふ、譯文頗る流暢、生硬の點を見ず（定價金參拾錢）

▲佛陀の聖訓

常盤大定纂　博文館發行

阿含部より華嚴部に亘る總計八百八十四部、三千六百六十八卷の厖大なる經典中より金句を輯集せるもの、近頃此種の著述に佛教聖典等ありとはいへ、彼と此とは類別の法を異にす、眞如編、行爲編等に分つ彼も亦一法なるも、言ふまでもなく佛教經典中の文字は盡く一律を以て解せらるべきにはあらず、阿含より始めて華嚴に至る次を追ふて思想の發展あり、之を知りて見んものはよし、然らざるものには望洋の嘆も亦已むべからざらんか、即ち此著の彼に倣はずして專ら敎義發展の逕路を辿りたる所以此處に存す、眼に映ずるは片々の句のみと雖も、心ありて之を誦せば以て整然たる佛理を各自の腦裡に組成するを得ん（定價金八十錢）

▲二十世紀の大覺醒　石川三四郎譯　日高有隣堂發兌

ヂヨサイア、スツロング氏の近著ゼ、ネックスト、グレート、アウエーキングを譯したるものにして、專ら社會主義の精神を基督の教訓中に網れ、そが稱する神の御國とは必ずしも靈のみを支配し未來に於て見らるべきものとはなさず、肉をも支配し現在に於ても見得べきもの、然り、斯くて其國を此世に實現せんとするもの此れ我社會主義の勉むるところなりと說けるもの、附錄として著者の意見二篇を收む(定價金參拾錢)

▲藝術論　有馬祐政譯　博文館發兌

文豪トルストイ伯の著を譯したるもの、藝術の問題、美、藝術と美との區劃、藝術の本務、眞藝術、僞藝術等章を分つこと二十、例の宗教的、道德的、一種の眼光によりて如何に美を論じ、如何に藝術を說くかは此著によりて知るを得ん、而かも、曾て一たび彼の峻刻なる露の檢閱官によりて除去せられ、附加せられ、改竄せられたるものも此版に於て悉く舊に復するを得たりとの原著者の自序もあり、見るもの安んじて可ならん(定價金四拾錢)

▲異本山家集附西行論　藤岡作太郎著　本鄉書院發行

「異本山家集」の名久しく傳へられて、而かも其實物の所在全く知るに由なく、世甚だ之を遺憾とせり。而して今此珍書が「近世繪畫史」及び「國文學全史平安朝篇」の著者にして、其博學達見、殆んと本居翁を偲ばしむる(年齒は素より甚だ異れども)藤岡博士の手に落ちたるさへ、因縁已に奇なるに、加ふるに其書が「群書一覽」の著者尾崎雅嘉の所持したりしものと推せらるゝに至ては益々奇といふべし。「異本山家集」に收むる所の歌數は流布本の半數にも及ばざるも、而かも流布本になきもの百六十五首(其中流布本になくとも新古今玉葉等に載せたるもあれど)あり、又追加として添へたるものには流布本になきもの八十六首あれば、此書に收めたるものにして流布本になき歌數、合せて二百五十首を超ゆ。故人の吟咏一首の湮滅も尚惜むべきに、かくも多數の咏歌を世に傳ふるを得たる寔に悅ぶべし。而して普通の流布本には固より眞僞疑はしきもの多かるべきも、而かも西行の自選也といはるゝ此「異本山家集」が彼の全集にあらざるべきは露伴氏の序言に論斷せられたる如くなるべければ、此集になき所を以て悉く僞作也とするは餘りに暴也。夫れ故に藤岡博士が流布本におつて而かも異本山家集になきもの悉く之を集めて別に「拾遺」として之を載せたるは、其意を用ふることの周到にして其心を盡すことの懇篤なるを見るべし。斯くの如くにして此書に收めたる歌數總計千七百五十首を超え、西行の作歌として傳はれるもの悉く收め盡して一も餘す所なし。眞に學界の珍寶とするに足れり。

附する所の西行論八十餘頁は藤岡博士の筆に成り、文としては「國文學全史」の卷末に載せたる「自然の心友―西行法師」に比して遜色あるを免れざるも、彼の文に論じ殘したる所を補ふて、此出家歌人の面目を躍如たらしめたり。其「撰集抄」の西行の作ならざるを例證論斷せるあたり、最も博士の學者的見識を覗ふに足るべく、其西行の性格を縱横に論じ來りて遂に「主觀を立て、厭世を唱へ、感情を主とし、狷介に傾ける」

行の特色なり」と斷じたるあたり、博士が所謂普通の本讀みにはあらずして、字底に活人情の呟きを聞き、紙背に活人間の息吹を感じ得るの人たるを證して餘りあり。又崇德上皇と西行との關係を叙せる所、識見服すべく、西行の和歌に對する批評はた又動かし難きを覺ふ。我明治の學界亦博士の如き眞摯にして活眼ある學者を産出せる、吾人の甚だ心强しとする所なり。若し夫れ卷頭載する所の幸田露伴氏の序に至ては、堂々たる一篇の西行論として見るべく、其文章識見共に斷然として當代に倫を絶つ。眞に此書の序として最もふさはしきものたるを惑ず。吾人は熱誠を以て此書を江湖に推奨するを禁ずる能はざるもの也(定價八十錢)

▲動物發生學

理學士飯塚啓著
博文館發行

帝國百科全書第百五十三篇として發行せられたるものなり。動物發生に關する精細なる研究は固より專問學者又は專問學生の事業なれども、此等の人の研究したる結果を收容して科學に基ける確實なる智識を養成するは何人にとつても須要缺くべからざる事といはざるべからず。然るに不幸にして我國未だ此種の著述多からず、門外漢をして少からざる缺乏を感ぜしむ。此篇脊椎動物の發生を編述するが爲めに特に蛙と家鷄との研究を記載せり。主として學生用のために作られたるものゝ如く、世上一般の人の興味を惹くが如き趣味ある叙述に乏しきを憾むといへども、こは所謂望蜀の念といはゞいふべし。兎に角吾人はかゝる書を讀んでかゝる智識の普及せんことを希望するものなり。(定價四十錢)

▲文學概論

文學士太田善男編
博文館發行

帝國百科全書第百五十四編として發行せられたるものなり。主として初學者をして文學の概要を領解せしめんとて編述せるもの、體裁は西洋の文學論又は修辭書等により、作例は概ね和漢のもの、殊に明治現代作家のものを多く引きたり。著者の例言にも自白せるが如く本書には嶄新なる意見も奇抜なる論斷もなけれど、たゞすら〳〵と分りよく一般文學の性質分類等を記せるもの中學程度の學生には一種の參考となるべし。(定價四十錢)

▲史劇 ななつ桔梗

山崎紫紅著
如山堂發行

嘗て眞砂座にて興行せる「上杉謙信」を初とし、「日蓮雨乞」「桶狹間」「甕破柴田」其他都合七篇の史劇を收む。何れも皆二十頁前後の小篇にて、一二篇を除くの外は、一幕物のみ也。未だ傑作として取り出てゝいふ程のものもなけれど、劇壇に一旗上げんとする作者の氣鋭と才能とは充分に覗ふを得べし。たゞ〳〵人氣ある小説ならば劇にならうがなるまいが何でも演じて居る下らぬ俳優と、其れを平氣で見に行く馬鹿々々しき觀客の多き、心細き我劇界を憂ふるもの、誰かは新進劇詩人の出現を望まざるべき。吾人は作者の如き年少氣鋭の士の其業の成否を問はず、千万丈の勇氣を振ひ起して其才分を此方面に傾注せられんことを希望するもの也。(定價四拾錢)

▲哲學上の諸問題

田中達譯
教文館發行

米國哲學博士セー、ジー、ヒッベンの著を飜譯せるものなり。原著は可なりに面白きものなる由なるも譯文にて見たる所にては左程に感興の

起らざるは、譯文の到らざる爲めか、又は彼我叙述の體裁の異るが爲めなるべし。たゞ此書の取るべきは六つかしき哲學上の諸問題を、努めて平易に説述せんことを試みたる點にあるを覺ふ。(定價三十錢)

▲徳川榮華物語　松林伯知演　新橋堂發行

松林伯知は現今の講談師中嶄然として頭角を抜くものなり。此書彼が徳川三百年の榮華を物語らんとするものゝ初編にして松之卷と名づく。主として千姫、春日局、大久保彦左衞門の事蹟を語る、固より講談なれば讀みゆくうち、甚だ慊らぬ言葉使ひ、誤りたる句法等も少からねど、そは文學物として見たる上の批難にて講談物にかゝることを望むは望む者の酷なるべし。新聞雜誌の講談物に趣味ある人、又は寄席の講談に足繁き人などには確かに一讀の價値あるべし。(定價五十錢)

▲ホームの神髓　早川宗太郎著　綠書院發行

著者は恐らく一通り法律を學べる人なるべし。此書主として常識と法律との上より家庭問題を論したるもの、嶄新なる節はなけれど、全く價値なきものにもあらず、今の青年の頭腦には大抵此位の考はあるべければ、彼等に對しては左程有益とも思はざれど、チョン髷流の頑固ものと、華や風に隨喜するハイカラ黨にはサッヂエッションを與ふる點も少からず(定價三十錢)

▲男女の研究　大鳥居、澤田二氏合著　光風館發行

一昨年本誌にて批評したるものに「性愛論」と名くる十八頁ばかりの附錄を增加して出版せり。增補十版とは扨ても〱すばらしき勢かな。喜ぶべきか、憂ふべきかは別問題として兎に角男女問題の世の注目を惹きつゝあるの事實を見るべき也。附錄「性愛論」は實にくだらぬものなり。はしがきを見れば馬鹿に大袈裟なことを書きある故、つひ釣り込まれて讀んで見し處、實に〱下らぬもの也。なまじひに不調和なる文學的文句を用ひたるなど殊に嫌な心地す。科學的のものは科學的智識を多く含ますべし。其上にて文學の衣を着するの手際あらば格別なるも、僅か許りの材料を引き伸ばし、チョイ〱嫌味な形容詞などを附せる、全くなくもがなと思はる。(定價五十錢)

編輯だより

▲本誌が前月に於て發行したる「秋期大附錄號が、我丙午文壇をなして掉尾の大活動をなさしめたるの偉觀は、讀者諸彦の熟睹せられたる通りの次第なれば、こゝには何事も申述べまじく候。只吾人は堅く約を履んで寄稿せられたりし諸先生と、精細なる批判を賜はりたる全國の新聞雜誌に向て厚き感謝の意を表するを禁じ能はず候。せめて批評の代表的なるもの許りも本號に掲載致し度存じ候へしも、紙數增加の爲め、其意を得ざりしは遺憾に候。

▲本號が「秋期大附錄號」の後を承けて、最も有益なる材料と、趣味ある作物とを收め、益々發展活動の機運に向ひつゝあることは本號を讀まるゝ人の必らず看過し給はざるべき事實と存じ候。

▲殊に本號文藝欄に收めたる佐藤紅綠氏の處女作「あん火」は近時の小

說界に於ける一傑作と信じ候。此篇に描かれたる佐吾十は全く生きた人物に候。且つ眼の著け所が極めて面白く候。養女として可愛がつて居る娘に對する無意識なり―戀が娘に情夫あることを知りし一刹那に於て忽然として深酷なる苦悶に代り、其苦悶が老僕の何氣なき世間話にサツザエストされて、一轉して光明の道に一歩を踏み入れしも、而かも猶ほ全く苦悶を脱すること能はず、結果の一句「爺さまはな、爺さまはな、」と言て再び石の如く默つて了つた」に至るまで感興横溢して詩情極りなきを覺え候。會話は悉く氏の生地たる弘前の方言を用ひて筆路暢達、背景は色彩饒かなる田園の風光を精寫して俳壇に鍛へたる詩才を充分にあらはされ候。俳人にして小說に成功せし人も少からず候が、氏の如きも確かに其名譽を負ふに足るべき一人と存じ申候。

▲公論欄に載せたる丘博士の「世界語の將來」は近頃大流行の「エスペラント」を學ばんとする人に大なる參考となるべく、呉博士の「見神及び自稱神佛の精神病學觀」は某氏の見し所は幻覺に候の錯覺に候のと輕々しく惡口せし人をして冷汗を流さしむるに足るべく候。又九州福岡より遙々稿を寄せられし福本日南氏の「清廷の大謬見」は經世家、政治家に向て深き反省を促さしむべく候。又雜錄欄に揭げたる富士川游氏の「自殺問題」及び和田垣博士の「細長主義と太短主義」も皆兩氏獨得のものと信じ候。戸川秋骨氏の「歐米旅行見聞錄」は今后も時々本誌にあらはるべく候。其極めて趣味多くして他の形式的通信と異るものあるは、讀者の見らるゝ通りに候。

▲紙面狹隘の爲め、本號に揭載すべくして揭載する能はざりし戸川秋骨氏の「非武士道論」及び千葉破藏氏の「獨逸皇帝と社會民主黨」の二篇は警保局長古賀廉造氏の「死刑存置論」と共に次號の公論欄に揭げるべく候。古賀氏は死刑存置論者の泰斗にして其論文堂々十五頁、前號記載の小河博士の「死刑廢止論」と相對照して殊に興多く覺え候。今次議會に提出せらるべき刑法改正案の死刑問題の運命に關心する人は、豫め二氏の論を精讀し置くの必要あるべく候。(社末一記者)

「現時の新體詩の價値」に對して高見を寄せられたる大家左の如し。

第八號(八月一日發行)には

巖谷　小波　　山路　愛山　　坪内　逍遙
岩野　泡鳴　　正岡　藝陽　　渡邊　虹衣
谷本　梨庵　　末松　謙澄　　兒玉　花外
薄田　泣菫　　福本　日南　　伊藤　銀月

第九號(九月一日發行)には

田能村秋皐　　高安　月郊　　小栗　風葉
笹川　臨風　　白鳥　正宗　　五十嵐　力
伊藤　政女　　戸川　秋骨　　阪井久良岐
高濱　虛子　　河井　醉茗　　大和田建樹

之を本號附錄に載せたる分と併せ讀まば大に啓發する所あるべし。

附錄

現時の新體詩の價値

永井一孝
野口米次郎
大槻文彦
佐々醒雪
後藤宙外
小松玉巖

酒井勝軍
林田春潮
千葉掬香
吉野臥城
小島烏水

現時の新體詩の價値

はしがき

現時の新體詩に就いて聊か願ふところあり、左の書翰

諸啓時下筆硯益々御清適奉賀候。扨弊社發行の『中央公論』は政治、宗教、社會等の諸問題に對し、公平なる批評を下し、以て健全なる思潮の普及を圖ると同時に、更に文學上の製作に向て多大の注意を拂ひ、以て高尙なる趣味の鼓吹に勉めつゝあるは大方諸彥の諒知せらるゝところに御座候。竊に思ふに現時の文壇に在りて最も群疑の府となり居るものは新體詩なるべしと存じ候。或は、字句に、語格に、思想に、今日の新體詩は到底一の謎語のみ、作家等自身の圈内を離れて了解せらるべきものにあらずと難ずるものあり、或は新時象、新詩情を歌ふには凡てに於て新を許さゞるべからず、之を謎語となすは新詩趣を解せざる凡俗の見なりと辯ずるものあり、孰れか是、孰れか非、之を現時のまゝに遺るべきか、之を根底より打砕して新に建設すべきか、蓋し瓦礫を什襲する恐は寶珠を委棄するの恐と擇ばず、斯る諸說紛々の時に當り、文壇諸大家の御判定を得て、その眞價値幾何なるかを江湖に知らしむるは極めて有益の事と信じ候。御多忙の處恐縮の至りに御座候へ共『現時の新體詩の價値』について御敎示を惜まれざらんことを伏して奉懇願候。尙御執筆の御暇あらせられずば御一報次第社員拜趨御高話筆記仕るべく候敬具

を普く當代知名の大家に致し、高見を求めたるところ、何れも請に應じて快く返書を賜はりたること吾人の榮として深く感謝するところなり、一分は已に本誌八號並に九號の附錄に收め、今その殘れる分を又本號の附錄として添ゆ、前號のそれと併せ讀まば、啻に現時の新體詩に就きて一隻眼を開き得るのみならず、奇、正、諷、諧、諸體該ね備はる各様の文致は、各家の風神を逼り出して宛然絕好の寫眞帖に對する想あらん、

○　永井空外

拜復今日の新體詩といふもの、多くは、解せられざる、また、おもしろからざるものかと存候。數ある新體詩のことゝて、勿論、あるが中には、解せらるべきもの澤山あり、おもしろきものも稀には見う

けられ候へども、大方は平々凡々、千古は愚か、百年五十年否十年の後にすら口にせらるゝは覺束なくまことに感服しがたきものゝみに御座候。

されば、かの解せられざるものゝ中にこそ名作もあるべけれと、床しくは候へども、何分語法例なく、用語はた生硬なるもの多きが爲に、その意義容易に通じがたく、再三再四くりかへして、始めて僅にかうもあらうかとたどらるゝ次第に候へば、妙趣、或はあるかも知らず候へども小生には味ひがたく候。これ或は、小生の不能なるによることかとも惑はれ候まゝ、この人はとおもはるゝには、時々意見をも尋ね候へども、大方何れも完全なる明解を與ふるものなく、新體詩といふものは作者自身ならでは解せられざるもの、否、作者自身すら用語どほりには解せられざるものあるべしなど申すものもこれあり候。兎に角、用語の生硬なるもの多きは拒むべからざる事と存候。

遮莫、その思想おもしろく、辭調はたうるはしき所もこれあり候はゞ、用語に多少生硬なる解せられざるふしはありとも、正しく、かの平家物語や太平記やさては近松の文章などのまゝ解せられざるに拘はらず、數多の讀者を誘うてうれしがらする底の趣はあるべき筈かとおぼえ候。然るに、そのこれなきは讀者の感興を惹起すほどのおもしろき思想もうるはしき辭調もなきにはあらじか。さすれば、今日の新體詩といふものゝ價値も、おほよそ、おし測らるゝことゝ存候はいかに。

尤も、これは今日の新體詩の多分について申すことにて、新體詩そのものゝあしとには勿論これなく候從來の和歌俳諧以外形式の大なる新體の詩歌を渇望することは、小生も決して人後にあるものには御

屋なく候。蓋し、新體詩は時代の要求によりて生れたるものに候へば、今日こそ混沌たる狀態にありとも、やがては、かの詞花金葉の上に現はれたる新運の熟して新古今となり和歌の壇上に一新紀元をなししが如く大成せらるゝの時もあるべしと存候。今の新體詩家、作者自身と中學程度あたりの青年とにうれしがるゝをのみあてにせずして、更に勇往精進、事にあたらんことこそあらまほしく候。匆々

○　　　　酒井重勝

凱旋以來病氣勝ちであつた爲めに、出來るたけ世間に御無沙汰を致して居つたので、最も責のある音樂新報にさへ筆を執らない仕末である、然るに過般反省社から三錢切手まで添へて「現時の新體詩の價値」につき卑見を吐けといふ依頼があつた、元來我輩は文人でないから如上の問に對して責任のある返答が出來ぬのである、されば此問だけならば早速お斷りする筈であつたが「特に御願申度は作曲上の御經驗より嚴密なる聲調の上の御批判に有之候何卒懇切に御教示願上候」と特に附記してあつたので、態と題を改めて其責をふさぐ所以である。

諸先輩の多くは新體詩に對して隨分思ひ切つた惡口を試みられる樣である、我輩は該問題に關しては投票權がないが、野次馬の一人に加はつて騷いで見たい、新體詩といへば古來の詩一名舊體詩に對しての名稱であるが、正直にいふと其範圍がまだ極まつて居らぬ、範圍が無いわけてはないが未發地が餘り多いのであるから急いで其範圍を定むる必要がないのである、それであるから新體詩の價値といふて一概に評價することはまだ早い、併し今日の所謂新體詩なるものに對して如何に思ふやといはるれば、我輩

は文學上の評價は出來ぬが、音樂方面より之を見ると實に有望であるといふより外にない、小波君は新體詩はオルガンの様なものではありませんかといはれたが、コレは大に忌味を含めていはれたことだが我輩は忌味なしに新體詩は是非オルガンの様なものになつて貰ひたいのである、オルガンといふと或人は一寸馬鹿にするが洋樂器中オルガンほど上品な樂器はない、斯くいふたからとて今の新體詩が附か上品だと斷じたのではない、是非さうなつて貰ひたいといふのである、我輩は新體詩を心より歡迎する、琴や三味線では今後の日本即ち世界の日本の國民敎育が出來ぬ如くに、舊體詩ではドウも物足らぬ心地がする、何が物足らぬといふのに廿世紀の音樂と握手が出來ぬからである、何故に廿世紀の音樂と握手が出來ぬかといふに其形式に於いて勿論の事、其思想に於いて調和が出來ぬ、勿論詩歌は必ずしも譜を附して歌ふべきものと極まつては居らぬが、譜を附して歌ふことの出來ぬ樣な歌は寧ろなくともよろしいのである、固より舊體詩なりとて譜に合して歌はれぬといふではないが、これから起るべき新音樂とは一致して居らぬといふのである唯に其調ばかりではない其想に於いても然りである、さればとて若し舊體詩の其調を改め其想を易へた日には舊體の價値否其生命が同時に滅亡するから今更舊體詩を彼是することは許さぬ、そこで新體詩の必要を感ずる、然らばドノ樣な體にすべきかといふに其はドウでもよろしい、六七であらうが七五であらうが八八であらうが六五であらうが、調の如きは制限すべき限りではない、出來うるだけ變體でも差支はないが一つ注文したいのは歌はれる歌をつくるといふ事である、併し歌はれるといふても今日多く見受ける樣に音符の數と歌詞の數が同じであるから歌はれるといふ樣

なソンナ馬鹿らしいことをいふのではない、一體詩歌と音樂といふものは非常なる關係を以て居るもので、詩歌て及ばぬところは音樂之を助け、音樂て足らぬところは詩歌て之を補ふといふ工合に出來て居る、之が自然の關係てある、思内にあれば文字に見はれては詩歌となり音に見はれては音樂となるのであつて、唯詩歌を作つただけては天下の人誰一人として滿足はせぬ、必ずや之を誦するであらう、誦するといふは音樂的の讀方て、若し其人が音樂の才能があれば讀むよりは之を誦し、誦するよりは之を歌ふのが自然てある、路傍の乞食の哀訴でも街上行商の賣聲ても凡て音樂を利用してある、否利用して居るのてはない自然にソゥなるものてある、故に音樂と握手しうる詩歌は甚だ幸福てある、幸福てあるばかりてはない否らざれば詩歌としての力が充分見はれぬ、斯くいへば天狗連中には、詩歌は己が心を自由に述べられば足る、俗人の之を歌ふと歌はざると何かあらん云々といふ人もあるが、斯る輩は音樂者中にも少くはない、一體美術家は美術を以て己れ一人の欲を充すための道樂道具と思ふてはならぬ、少くもジョン、ラスキン位な考がなければならぬ、荒木古童翁が尺八を樂器と呼ばずして法器と稱へて居るのは何故てあるか、寶生九郎翁が能樂は天下の人材を陶冶するの機關を以て任ずべきものなりといふたのは何故てあるか、況してや詩人が世間に取りて何等の役があるかを計らずして唯詩を製造して滿足するならば、冀くは山寺に居を移した方がよろしい、泡鳴君が「詩人は世界の靈魂なり詩人なければ世界は死物なり」と壯語した事があつたが、君今何健全なるや否やは知らんが、凡ての詩人は斯くまでの自任が必要と思ふ、そこて凡ての詩人に一つ注文致したい事は、歌はれる歌を作つて貰ひたい事てある、ミ

ルマンやゲーテのいふた如く「詩歌は讀むべきものに非ずして歌ふべきものなり」であるから歌はれるものでなければ其用が乏しいのである、殊に音樂思想がダン〳〵發達しつゝある今日であるから、歌はれぬ歌は文藝倶樂部の埋め草位にしかならなくなる日が遠からず來ると思ふ、そこで我輩は詩人殊に新體詩人に願ひたいのはモ少し音樂思想と音樂の才能とを具備せられんことである、白星君が卒先して數年前已に此點に着目せられたのは感嘆の至りである、其外にも島崎氏の如き、同じ注意を致された人も少なくはなからうが、失禮ながら今日の新體詩では少々不熟である、尤も之に對する音樂とても甚だ幼稚で、殊に作曲の如きはコンマ以下であるから、餘り無理な注文は出來ぬが、互に氣脈を通じて研究したならば必ず完きものが出來やうと思ふ、そこで詩人諸君の御參考までに作曲上の注文を並べて見やう、

一、歌詞と拍子の一致

調の如きは如何に變ずるも差支なし、唯歌詞と拍子と一致するを要す、假令へば七の調を二五とし三四とし、四三とし又は五二とする事は作者の勝手なれども一度び三四となさば終りまで三四とすべく、第一行は二五にて第二行三四第三行は四三と不揃にては歌ふに適せず、今其例を擧げたきも作者に對して氣の毒故之を略す、此種の不調和はツマリ詩人に拍子的觀念なきが故である、

二、可成文字を少く意を深くすること

日本の文字ほど不文明なものはない、漢字よりも遙かに不便である、殊に歌ふといふ事になると不便極まることを更に多く發見する、此點に於いては漢詩の如きは理想的のものである、それも今迄の樣に琴

に合はしたり、謠曲にしたり、三味線に合はしたりするには間に合つたが、新音樂には甚だ不適當である、さればといふて急にエスペラントを使ふわけにも行かないから、ソコデ詩人の大手腕を要するのである、英詩や漢詩では三語で以て完全な思想が現はされうるが日本語ではソレガ出來ぬ、爲めに多くの字數を要する、從つて音符を增さねばならぬ、少しく音符を增すといふと勢ひ音長を節する必要があるから其曲は輕くなる、浮いて來る、爲めに壯大なものが出來ぬ、然らば如何にして字數を減じ而も其意を保ちうるかといふに、其は我輩のいふべき事ではないが、我輩は俳句を適用することが甚だ得策と信ずるものである俳句を並べよといふのではない、あゝいふ風に作つたら良からうと思ふ。

三、健全なる思想を要する事

舊體詩の思想については言ふ必要はないが、苟も新體詩といふ以上は其思想亦新らしき健全なるものである事を要する、さればとて强ゐて變つた事をいふべしといふのではない所謂舊信仰を排斥する事である、嘗つて有名なる詩人から作曲をたのまれたことがある、これを拜讀すると日本の櫻の花は天女が衣を落して其が木に懸つて花となつたのであると書いてあつた、固より哲學的に之を解釋すれば必ずしも非ではないが、小學校の生徒でさへ植物學上の智識を有して居る今日、斯る忘念を書く必要はなからうと思ふ、そこで我輩は直ちに謝した、これは一例であるが此種の思想ではトテモ新日本を支配するわけには行かぬ、勿論歌ひ得ても歌はすべきものではない。

此外尙雜多な注文もあるが右の三つは差當つての大注文である、そこで我輩は是非新體詩人が國民を左

右しうるほどの力ある作物を出されんことを願ふのである、それには是非共歌ひうるものでなければならんことを記臆せられたい、序に御記臆願ひたいことは曲なるものは作曲者の心が作歌者の心と一致し得る時に成るものであるから此兩者の交誼が大に親厚ならんことを希望する、サンキノ氏は「良好なる詩歌は良好なる曲譜を生む」といはれたが實に其通りである、歌詞の自然に成れるものには曲譜も自然になるのは僅かながらも我輩の經驗にて立證することが出來る、處世の歌「野末の川も利根川も」の如きは其一例である。

終りに臨みて我輩は附言したいことがある、即ち我國には未だ國民の歌なるものがない、實に愧づべきことである、歌がないわけではないが未だ國民の信仰や思想や、精神やが其れまでに發達して居らぬ、併し國歌なるものは無理に作りうべきものでないから自然に任すより外に仕方はないが、最も責のある詩人には之は忘るべからざる事と記臆して貰ひたい、我輩は新體詩を歡迎する一人である、それ故に右の樣な注文をも敢へてした次第である。

○　野口米次郎

形式に於けるのみならず思想上に於ても所謂新體詩は明治時代の產物であるから新體詩人は皆「我より古と無す」の決心と抱負が無くてはならぬ次第である詩人としては世論如何を顧みるの必要は無く友を百年の後に待つ、言を替へて云ふと百年も進んだ思想で詩を歌ひつゝあるといふ抱負が無くては大なる詩人と云へ無い、甲論乙駁て、今日程新體詩論の盛大なるはあるまじ、其盛大なりと云ふと雖も新體詩が

人に讀まれつゝあるといふ意義にはあらずと思ふ、英語の詩界には自ら模型となす可きものありてはあるけれども已に日本ては破天荒のもの故依る所が無い、マシユウ、アーノルドは其當然の依る可き所なき混亂時代たるを痛罵して唯古代を便る、のみと云つたことがある、便る可き古代のある英語界は幸福なれども少しも便り依賴し模型とす可きもの無き日本の詩界は不幸此上無し、新體詩は創製されたるもの故新體詩人の技量如何により後世傳はる可き詩人たるを得又後世百代の模型たり得る。といふ、或る一方からいふと幸福の時期て所謂亂世の英雄たり得るの時てある、詩人たる可きの人冀くば奮發せよと云ひたいのてある、而して模型に取る可きものが日本の文學には無い、故に模型に取らんとする必要ありとすれば何等か新體詩人は英語界の詩人を模型に取らざるを得無いのてある、ある人はロセチを讀みたり或る人は誰或る人は誰といふ樣に守本尊のあるのてあらう、もとより其は自然であらう、明治時代に生れて破天荒なる新體詩人と稱せられ英語の詩を了解する知識なり又英語の詩の日本の詩(歌や發句)に勝る所あるを知るに至つて彼等は言語こそ違つては居れど詰り英語の詩人の如く考へ英語の詩人の如く歌はんとする傾向に成つて來るのてある、故に普通の讀者――英文學の知識無き讀者が今日知名の新體詩人の作を讀んて了解に苦しむのは當り前てあると思ふ、それが當然なので了解せりといふものこそ間違つて居るかも知れん、之を要するに其作の拙なると善なるとを問はず新體詩人の作は今日の日本には遙に進んだものであると斷言する、即ち餘程西洋化したものてあると斷言する、而して西洋化して居るのは尙ほ日本に於ける西洋書家の如くてあるけれど、西洋書家はまだ繪の具や刷毛を使ひこなすの技倆無く自分の

情をカンバスに顯はすとが出來ぬと共に新體詩人も英語を日本語に直し得たといふまでに自分の歌となし得無いでは無いかといふ議論はあるけれど、其は詩人の技量の拙劣なりといふ譯て新體詩其物の罪で無い、新體詩にて進んだ今日の感情思想を顯はすとが出來るのであるから、新體詩人の奮發を冀望す可きてあらう、萬物は他からの應援無くては成立せぬ看客無き芝居は成立せぬ新體詩も左うてある讀者の應援があつて初めて發達するのであるから冷罵と『唯分らぬ』の一語て以て放棄せずして新體詩人をエンカレージして呉れ無くてはならぬ、而して余は現代の新體詩人に助言もしたく又不滿の點もあれど今云ふの必要が無いから他日を期するとして、唯此處ては新體詩の必要と有望とを天下に告白して其詩人の熱心正直とを稱賛して止まんとするのてある

〇　林田春潮

御たづねの赴、小生には、充分了解いたし難く候へども、もし、現時新體詩の藝術上に於ける價値の有無と申すやうの意義にて候はゞ、小生は、その有價値を信じ居るものなることを回答仕り度候すべて、藝術と成形いたされ候もの、何物か價値なきものに候はん。模倣にだに價値を與へ候もの、古へ希臘に候ひき。況して、外山氏以來、數多の星霜を經過して、その間に試驗せられ、習作せられ、洗練せられ、研磨せられ、ともかくも舊衣を脱して將さに新裝を着けんとするの域にまて進み來り候現時の新體詩、これを、いかて價値なしと斥け得られ候べき、これを價値なしと見るは、そもそもいかなる理由にもとづくやを知らず候へども、來旨に所謂「作家等自身の圏内を離れて了解せらるべきものにあ

らず」といふが如き難は、對社會上の評價としてならんにはともかく、對藝術上の評價としては一向無價値の理由とするに足らずと存じ候が御賢慮如何にや。もしくは、かの晦澁といひ、印象不明といひ、或は措辭生硬といふが如き、これらも畢竟その短弊に相違なく候べし。されども、これもこれがあるが無價値と申し候はんはいかゞ、これを矢田部(?)の輕騎隊進擊の譯詩に比べ、落合氏の孝女白菊の歌に較べて、小生は、むしろ現時の新體詩により多くの藝術的價値を認むるものに有之、随つて、これを冷嘲し、詬罵し、排斥するが如き口吻を弄するものには全然賛同いたし難き次第に御座候。右まで、匆々尙、新體詩有價値といたし候はゝ、その量幾何、されど、こは、御尋ねの外と存ぜられ候につき、こゝに申上ぐる必要なき儀と存じ候。

〇 大槻文彦

新體詩と申もの近來世に出て目に觸れ候事も有之れど未だ嘗て讀みたる事も無く候へば其趣味を解し得ず随て批評申出てかね候御挨拶迄如此に候也

〇 千葉掬香

拜復。時下貴社愈々御隆盛の御儀奉賀候。「現時の新體詩の價値」に關し御質問の旨拜承仕候。然るところ、小生儀性來新の字の付くもの大嫌ひなどと申す衒異主義にあらずして、新體詩と申すものは所謂食はず嫌にて今日迄未だ曾つて其の一篇をも誦讀致せしと候はず。夫故に新體詩の價値に關しては其の有價なると無價なるとを辨へ申さず候。この頃、一友人の新體詩に趣味を有し候ものの申し聞け候には、

所謂新體詩中の花形評判記ならむにはサシズメ巻頭の位を占むべき徵象詩と申すものは、其に包含せらるる思想觀念の恍恍惚惚、奇奇怪怪、即ち不可解なるは云ふに及ばず、其の章句の晦澀、措辭の幽險なる、そこが所謂深秘的なるにもせよ、又所謂人間の凡響にあらざるにもせよ、恐そらくは作家一人を除きては他人には到底不可解なるべしと。前にも申上候ひしが如く、小生は新體詩と申すものを嗜み申さず、從つて又我文壇に於ける徵象詩の其の如何なるものなるかを知り申さず候へば、如上の友人の言の當否を知り申さず候。然れども今の歐羅巴大陸の徵象詩人諸家即ち、Villiers De Lisle-Adam, Anthur Rimbaud, Paul Verlaine, Jnles Laforgne, Stephane Mallarme, Juris Karl Huysmans, Maurice Macterlink, Eniil Verharlen の詩文は John Gray, T. Sturge Moor, Gertrude Hall, Arthur O'shaughnessy, George Moor, Kegan Paul, Clara Bell, 及び John Arthur Symons の英譯を通じて愛誦罷在り候が、其の詩に包含せらるる思想觀念の高遠なるはあり、されど其の章句措辭は百錬精透にして、少しも晦澀拙滯癡肥粗俗の病所之れなく從つて左までは難解のものとは存じ申さず候。ことに近來誦讀罷在り居り候 Yeats, の Ideals of Good and Gril, Celtie Juighlights, Seren Hoods, Arthur Symons, の Images of Good and Evil, Spritual Adventnres の如きは頗る面白きものと存じ申候。以上貴問に應じ饒舌如此に御座候。不宜

醒雪

○

今日の新體詩といふものはあまり詳しくも知らないが見た限りに就いていへば、その句法も用語も除

に曖晦て、素人には、理解が出來ないといふことが第一の缺點と思ふ。

前號に見えた岩野君の詩を讀む準備的知識が必要であるといふ説もあながち否定すべきではない、詩には特殊の破格も許されやう、しかし、それもこれも程度の問題に過ぎぬ。今の青年詩人は、多くは自分のよく知らない語を、むやみに音調の爲に用ゐて居る、動詞なども勝手次第に活用させる、見も聞きもせぬ假體言が出來る。それも普く古今の言語を探つて、適切な語のない爲に作り出てたとも見えぬので、我等は寧ろ、今の詩人に向つて、作詩の準備たる言語上の修養を要求したいと思ふ。

嘗て佐々木信綱君にもこの事を話したが、氏も頗る同感で、我等御互に、日本の言語の意味はやゝ廣く心得てをる筈のものに、全く解せられないものが、どうして、青年の間には或は幽遠だの高妙だのと評せられるのだらうと言はれたから、僕は、青年には、古語の知識が無いから、作者も讀者も同じ樣な意味を曉り得るのだらうと大笑をした。先日も、下村千王伎君にもこの事を話して今の新體詩の讀者の曉りのよいことは驚くべきである、と言つたところが、氏も平生作歌に心がけてゐるから時々帝國文學などの新體詩評を見るが、その絶妙として引用してある句なども、大概は意味のわからぬものだといつて笑はれた。

中にも、花外や泡鳴はやゝわかる方だが、その代りに用語が頗る粗笨だ。泣菫や有明は優婉ならんとして最も朦朧曖晦なものだ。ともに用語の選擇に於いて、今一段の工夫が必要だらうと思ふ。

さらに、今の新體詩を譬へて見れば、吃の演舌か、或は外國語で喧嘩してゐるものに似てゐる、滿腔の

熱情、迸發せんとして筆端の窘縮に惱んでゐる樣は、殆んど氣の毒なほどてある。しかし、これも今の詩人には至極尤なことてあつて、よし在來の歌詞詩語に通曉してからが元來複雜なる思想を謠つたことのない古歌の詞藻の貧薄なるが上にことに抽象的な詞に乏しい國語を以つて、歐米傳來の新思想を唱ふことは至難の業てはあらう。況や在來の言語をも咀嚼しないでこれを企てようといふのは、殆んど無謀てはあるまいか。偶、少數の讀者のこれを理解するものがあるは、實は同じやうな煩悶の間にある靑年が、同情て以つて悟了するので、その文字上の意味は到底何人にも明白に解せらるゝわけがないのてある。言外の意味が同情によつて味はれることは詩歌の常てあるが、それは言語の意味を明かに知り悉した、それ以外或は以上の餘韻てなくてはならぬ。若し夫れ、空漠にして模促し難い感情を傳達しようとならば、別に音樂といふ美術がある、それは詩歌文章の領域てはないのてある。だから、我等は、先づ國語のあらん限りの力を發揮して、よし多少單純て幼稚てあらうとも、理解し得べき詩歌を見ることを望むのてある。

今一つはリズムのことてあるが、近來は六だの八だの種々の異調も見えるが、要するに日本語ことに歌詞の性質上、甚だ無理が多いやうに見受ける。僕は寧ろ在來の七と五とを種々に錯綜して、その七や五を三音と二音とに種々に變化させて見たらば、案外、變化もあつて流暢なものが出來ようと思ふ。古の歌謠の歷史は、かゝる工夫に尠なからぬ暗示を與へるてあらう。だが、これは專ら敍情の詩に關する意見て、敍事の詩のことに長いものは、七と五とては到底單調に堪へぬ、こゝにはかの晩翠君の調即ち古

の朗詠調が加味せらるれば、自在な變化を盡すことが出來ようし、さらに淨瑠璃の體に傚つて、散文の會話を挿入してもよろしからう。僕はこの點に關しては、ことに南北朝以來の郢曲や舞曲などの歌詞に回顧する必要があると信ずる。

要するに、僕は、古文學の上に基礎を置いた發展でなくては、眞の發達は望むべきでないと思ふ。古人の失敗と成功とに鑑み、略古來の言語文學に通じて、眞に國語の特性を悟了したる後に、新體の創作は初めて企つべきものであると信ずる。

○　　吉野臥城

興來れば、短歌を試み、俳句を試み、新體詩を試み、慰籍をこゝに求め居り候。折節の感想を發露する韻文としては、短歌、俳句、新體詩の何れも捨て難く候へども新體詩は實のあるやうに覺え候。國詩として發達せしめたきものに候。勿論、天才の靈腕に待つより外之あるまじく候。現今の諸家は、將に來らんとする天才の足場を造つて置くやうなものかと存ぜられ候。

折角、築きあげて來たものを根底より打碎するなどは大それた考に候。詩國の建設は、沙上に城郭を築くが如き兒戯の容易さには比すべくもあらず候。

横文の詩が讀めたとて、それを鼻にかけるにも及ばざるべく、眞に國詩の發達を圖るの誠意と熱心とあらば、在來の短歌、俳句は勿論、民謠、漢詩などを研究するの要は之あるべく候。國文典を知らぬも詩人の恥辱に候。この點に就て兎角の批難あるは、諸家のために惜まざるを得ず候。新事象、新詩情を

國語にて歌ふのみが、新體詩に非ざるべく、あまり新體詩の新の字に拘泥せぬが宜しかるべく候。俳句の如きも、月並調が排斥せらるゝ以上は、新體詩とて謎語を以て詩美の極致となす譯もなかるべく、謎語を以て謎語となすは、凡俗の見ても、何でもなく、至當の見解と存じ候。

さはれ、現時の人々（悉くとは言はず）は、讀詩の用意に缺くる所あるは蔽ふべからざる事實に之あり候。愚る人々の前に、詩の金玉も瓦礫と見ゆるは言ふ迄もなく、十寡御話にならずとこそ存じ候へ。兎にかく、新體詩の價値問題は、「時」一の問題に候。現時のみを以てその價値を判定するは、至難の事と存じ候薪炭の價値とは異るやうに思はれ候。先は、貴答まで。

○

宙外生

拜啓。新體詩につきお尋ねの件左にお答へ申上候

現今の新體詩の價値奈何と大體の上から見たらば多くの非難はあるにしても兎に角新機運に應じて現今の狀態にまで發達して來たものであるから、決して悲觀すべきものではあるまい。故外山矢田部兩博士などの新體詩發表の頃から比較して見たらば奈何に新體詩嫌ひの人達でも進步の著きことを首肯せねばなるまい。又今の新體詩は解し難いとの非難も全體に負はすべきものではなく或方面の作者だけに就いて云ふべきである。隨分平明なのも確かにある。併し世に持て囃されてゐる人々の作の中には隨分と解しかねるのを作る仁も見受ける、國も時も違ふ唐代名家の作などに比較して却て同じ國の同じ時代に生れた我々日本人に解し難いと云ふやうなのは何うしても正しい行き方ではあるまい

と思ふ。これは作者側にて充分反省すべき問題であらう。修養の爲めとあらば色々の工夫やら色々の體やらを試みるのは結構至極であるけれど、兎も角相應の教育を受けた輩が讀んでも皆目解せられぬといふやうな作を公けにするのは、何か其所に除かねばならぬ障魔があるに違ひない。高い思想であッても言ひあらはし方に依つては或程度まで解し易くされぬ筈ではないかと思ふ。

○　小島烏水

小生の記憶にして、誤謬なくば明治の所謂新體詩は、故外山正一氏等が編まれたる『新體詩歌集』(?)に始まり候やうにて、その見本は『我は官軍わが敵は』とか『自由よ自由や自由、汝と我とその仲は』といつた調子のものなること、今猶耳に殘り居り、それより梅花道人の『梅花詩集』や、透谷子の雜詩など出て、藤村、泣菫、有明諸家を産むに至り候順序の變遷は、あまり急劇にて、例へば小學校から一躍して高等學校に入りたる如く、中學程度をブチ拔きたるため、至つて少數の斯道專門家、及び一部の書生を殘して、國民一般に新體詩は理解せられず、殆んど國民と沒交渉なるありさまにて、この奇なる現象は、文藝のいかなる方面にも、その對比を見る能はず、卑考によれば、詩歌に對する國民一般の趣味を啓發するために、平民詩人を出だしたくおもひ居候、言ふ意は、或人の注文する如く、國民歌を作れとか、社會主義の詩を誦せよとにあらず、臺閣的なるを悦ばずして、江湖的ならむを欲するに有之候、江湖的とは、輿衆と共に謠はるゝの意味にして、いつかどの學者が、古典や字引を離さずしては、讀むこと能はざる詩の價値を議する傍ら、ロングフエロー亞流の詩人、出でむことを奬勵するも、亦棄つべ

きにあらずと存じ候、斯道の諸賢が、孤高一世を敵として立つの意氣は、敬服なれど、世に阿ねるの譏、俗衆に苟合するの嘲を受けながら、國民一般趣味知識の程度と、即かず離れざるの境地に於て、之を詩國に誘導するの大勇氣には、如かざらむ、今の諸賢が、平易明解を淺俗として鄙しみ、訓詁註釋を待つほどに難解の詩を作り、白眼一世を傲睨する態度は、小生より言へば、寧ろ易きに就くものにて、何人も能くするところに有之、かくして詩を解せざる國民を責むるとも、小生は肯はず候。小生は繰り返へして、平民詩人の出現を翹望するものに候、純感情、純天眞、即ち足れり、今のくろうと仲間にて、評價する第一流詩人、第二、三流詩人の區別の如きは、眼中に無し。議論は議論として、小生が好んで讀む詩は、藤村、泣菫、有明、白星、醉茗、夜雨、清白七家の作にして、この七家の作にして、眼に觸るゝもの、皆讀まざるはなきを申し添へ置き候。(八月十八日、旅裝を釋きながら)

○　小松玉巖

若し現今の散文が文壇の一隅を占むる資格あるものとすれば、現時の新體詩も亦當然文壇に存在するの價値があるであらふ。

日本文藝の稚態を脱するに至らぬことは韻文に於ても散文に於ても皆共に然る處で、穴勝韻文のみが特に劣等の地位にあるものでは無い。若し散文の作家が、鮮く共世界の文壇に誇示すべき者がありとして、我國の誰かかの散文を示すことが出來るとすれば、韻文の作家に於ても優に是に匹敵する作者を擧げることが出來る、が併し悲しいことには現今の我文壇はまだそんなに鼻を高めて共作品を示し得るほどに

は散文にあれ韻文にあれ發達の域に達して居らぬ。然るに世の多くが散文のみ獨り大に發達して現時の新體詩は一讀の價値も無い樣に云ふに至つたのはどう云ふ譯であらふか。

全體我國民は頗る懶惰の性質を有して居るので、特に一般文藝に關する考の如きは、即ち頭を使はないで面白いことを見たり聽たりしたい。文藝など云ふものは晝寢をしながら讀んだり、お辨當をたべながら見たりするものの樣に考へて居る。是は吾々先祖代々からの遺傳的性質で今では中々とり去ることが出來ないほど深く染み込んで居るのである。其れであるから新體詩を讀むよりは小說、小說をよむよりは講談、講談を讀むよりは、いつそ聽いた方がよいと云ふことになる。此の風習は中々恐るべきもので、世に大家とか識者とか云はるる連中でも滔々として皆是であるから、新體詩なぞ見ない。見る修養を積んでなければ從て新しいものを一寸見てもわからぬ。自分がわからぬて默て居ればよいのに、おせつ介にも他人にまで今の新體詩がわからぬつまらぬものだ、朦朧だ難解だ、コケオドカシである、冗物であると云ふことになる。特にこんなことを云ふのは稍々時世に後れた新聞記者や何かに多くあるので、散文の外は、からわからぬ連中である。蠅を取るにも黐が入る。文藝を玩稱するには、是れより少し增し位の用意は必ず入ることとであらふ。此の樣な時代に於ては一般國民に眞文藝の味などを紹介するのは早過ぎるので韻文時代はまだヅット先きのこと、散文でも見せるのが丁度適當であらふ。散文よりも講談、講談よりも落語。

併し作家に向ても言ひ分はある。三四の眞面目な作家はさて置き其他の錄々の子は隨分いかがはしいの

が多い。或は唯々他作家の病所をまね。或は所謂星に菫の戀ばかりの作家、主義も主張も無い弄文の徒、內容も生命も無い空靈詩文（帝文記者より拜借）、六つかしい字や奇麗な字のみを並べる人、隨分から云ふ詩人も多い、是は啻に今の新體詩を禍するのみでない、全く文藝の神聖を穢すものであらふ。併し譯詩にもあれ、創作にもあれ、嚴然として藝苑の珍寶たるを失はぬ作物も決して鮮く無いので、是をも凡て此の駄作と一處にして塵芥の中に葬らうとするのは事實其罪は世の批判家、斷稱家にあるので、今の一般の人々は是等の善惡すらも判別することが出來ぬほど文藝に不忠實なのである。

我國の韻文を否定せんが爲めに、國語の不完全を說くものあれども是とて全く首肯すべきで無い。國語は國に依りて各々差別あるは無論のことて、西洋のは西洋の特長があり、我國のは我國の特長がある。我國のには平仄が無いから、首尾の韻脚が無いから、高低の變化に欠しいから、長短の交錯が無いからと云つて直ちに我國の韻文を否定せんとするのは余りに早計てはあるまいか。平仄が無からうが韻脚が無からうが我國の韻文は韻文として確に存在して居るので、如何に否定しやうが何んと云はうが存在して居るものは存在して居る、否な我國の文章の最も諷誦に値するもの、古來名文として人々に膾炙さるるものは、多くは皆是れ散文に含まるる韻文の部分てある。太平記にあれ源平盛衰記にあれ、近松の作品てあれ、謠曲てあれ、其最も文章として稱揚せらるゝ處のものは皆韻文的色彩を含んて居る部分て、此等の作物の我文壇以外に放逐せられざる範圍に於て我國の律文は永久に其價値を失はぬ。もとより我は此等の文章が皆韻文てあるとは云はぬ、古來是等は散文詩の形として現はれて居るが、併し是れによ

りて我韻文はどれ程までに成功して居るか、どれほど文章の上に於て勢力を以て居るかと云ふことを認めることが出來るので、是等の研究に依りて意外な發見をすることも出來るてあらふと考へられる。韻文の範圍は今日世人の考へる如く、そんなに狹いものでは無くて、もつとずつと廣いものである。特に日本の韻文を創立するには特に此の襟度が必要で、西洋のものなどを例に取て我國のものを論じようとするのは參考には成るが、外國より鐵砲を輸入したように直ちに是を受容るゝことは出來ない。どうしても彼とは形の違た所て成功するので十四行に幷べてソンネットに眞似たり、語尾に韻を押して見たりなぞしても其れは皆徒勞である、尠なくとも我韻文に取つて徒勞の所業てあらふ。又神經過敏の作者や讀者が、一字律則より多いからとか、尠いからとか云ふ穿鑿を過度にやるが、ほんとの韻文の性質はそんな一字の多少等に依るものでは無くて、寧ろ進行してゆくリズムより其の韻律を制定しゆくべきで如何に七五調は七五の文字より成るとは云ひながらリズムの進行より見るときは字の足るも調の整はざるあり、字の足らぬも調の整ふもあり一概に論ずることが出來ぬ、或はリズムの途中休止の位置にあることもあり七五の一聯を終るも尙ほリズムの停止せざる場合もある、此の故に韻文は文字の字音によるものではなくて、作者の呼吸、即ち音樂で云ふリズム、ブレッスによりて制定せらるべきてある。少しく音樂を學んだものは能く記憶して居るてあらふが、リズムは聲に現はれたると默止の狀態にあるとを問はず換言すれば音樂の樂符(ノォト)に現はれたると默符(レスト)に現はれたるとを問はず、リズムは嚴然格平として進行するのである、是れ韻文を作るに於て最も必要なる條件で、縱令或る

調に於て字數の不揃なることありとするも、是れを以て破調の韻律なると見ることが出來ぬ、特に日本語に於て此の邊の注意を要するので、韻文は字數に依りて作成さるるもので無くて其リズム、悉く云へば作者の呼吸より來るもので、是の呼吸あればこそ詩人の内部生命をさながらに窺ふことが出來るので唯徒らに字數を算し行數を詮儀するが如きは詩人の能事で無い。

日本の韻文は此の點より改良してゆかねばならぬ韻文の眞生命は唯此の眞にあるので、西洋も日本も變たことは無い。平仄や韻脚や是れ畢竟韻文に取ては余技である、我國詩人の此の事のみに焦心し、あまつさへ其國語の韻文に不適當なるを論ずる如き少しく本末を誤りたる議論ではあるまいか。

韻文の眞生命は作者の内部の皷動が躍如として其調にあらはれ、調と内容と機微なる結合を成して文字以外に調子以外に、尚ほ或者を讀者に與ふるにあるので、是れなくば韻文は全く其効用に於て他の散文と異らぬ。此の故に押韻や平仄や是れ單に韻文に於ける一修辭法に止まるので、是れ無きが爲めに、即ち是れを有さぬ國語は韻文を作る資格が無いと云ふことは出來ぬ。併し我國詩人に此の用意あるもの果して幾人あるであらふか、唯字を算し行を詮儀する詩人あるが爲めに其詩は形體のみとなり、散文的となり、朗吟するに適せず、讀者に感興を與へず、或は空靈となり、生硬となり、朦朧となり曖昧となるのである、甚しきは形式のみに拘泥して内容の統一の少しも無いものがある、或は調に依りて想を偽り、行に依りて筆を曲ぐるが如きは皆此の作者の不用意から來るものではあるまいか。故に嚴格に云へば詩に依りて各々其調に差別を生ずる筈で、内容の變ると同時に外形の變化するのは當然であるが、先づ比較

的類似したものは矢張り類似した形に納める處からして世に七五調とか六八調とか云ふものが出てくるので、調の如何は是れ全く作者の考へに一任さるべきである。從來の七五調の優美冗長なる、五七調の莊古素朴なる是れ偶ま從來の我國民の暢氣至極なりしを證するもので、如何なる作者も是れに依る如きは素より愚の極、新時代の詩人は又當然彼以外に開拓する處が無くてはならぬ。つまり今の詩人の病所は主として此處にあるので、或は詩を一種の技工なりとし、又は單に西洋のもののみを摸倣せんとし、徒らに押韻に苦み、平仄に鏤心する如きは今の新體詩の不振なる一大原因として見ることが出來よう。苟も新體詩人なるものは今一層眼界を廣くし、徒らに技工に流れず、眞面目に藝術の爲めに盡すならば我韻文の前途は方に春陽の時を望むが如きものであらふ。尙ほ西詩を模倣せんとするは唯研究の資料となさんには妨けなきも、道は却つて近きにあり、是れより一層適當なる方法は日本古典の研究、淨瑠理、義太夫、謠曲、端唄、琴唄、子守唄、馬追唄、の果に至るまで凡そ古來幾萬の讀物、謠物として朗吟に伴ふもの、歌謠曲律を附されたるものは、凡て卿等に向て無上の敎訓を與へるであらふ。くれぐれも日本の詩は西詩の如き形に於て成功するものでは無い。

又今の詩人の音樂的素養なきは一般の云ふ處であるが、此の研究は全く忽せにすべきでは無い。なにも今の詩人に作曲する樣に詩を作れと云ふては無い、唯韻文に於ける約束は、音樂の規則によく似通へる點があることを痛切に感じたからである。音樂的の根本志想の無い人は韻文作家として果して成功するであらふか、其作品を讀んでも調子は確に、字數も揃ふて居るが、何となくリズムに合はぬのがある。

此の様なのはどうしても韻文として感興が起て來ない、から云ふ作者は確に聽覺發達しない、特にタイム、拍子の觀念の乏しい人てあらふ。

作曲すべく詩を作る詩人は又別である。歐洲にても樂詩人と云ふのが別にある相であるが、詩はなにも必ず曲を附して謠ふ必要はない。唯要は韻文は音樂のにほひを失はぬこと、これが大事なのである。樂詩人は又一般韻文家とは別なので、唯韻文を以て立つ詩人は獨立して新詩の旗旌を樹つべきてある。

そへがき

佳禾獨り美田に伸びず、雜草も亦長ず、培ふべきは培ひ、芟るべきは芟る、是れ言はても著く、良農の早きに計を爲すべき處なるべし、我國新體詩の近狀之を以て譬ふべからずや、吾人が書を四方に馳せ、普く諸家の見を問はんと勉めたるの意は實に此處に存す、之にて吾人が新體詩に對する同情の如何を疑はんとするものあらば、そは曲謡にあらずんば迷妄のみ、兎もあれ徼倖に諸家の容るゝ所となり、爾來號を逐ふ三、收め得たる卓說三十有五、而かも各家が各様の感想と論致とは端なく一世の視聽を集め、是々非々、吾人に對する兎角の評も亦之が爲に來る、宛ら幽池の大寂靜が一投石に驚かされしの觀なくんばあらず、驚くものは驚くべし、罵るものは罵るべし、毀と譽と、褒と貶と吾人何ぞ關せん、求むる處は、今の新體詩が世人の眼に映ずる様や如何、之を面り天才的詩人に示して彼れが大靈筆の揮搓に資するところあらんとするのみ、驚くの徒は凡嗣の徒のみ、罵るの聲は固陋の聲のみ、別に達觀的詩人あり、罵らず、驚かず、衆論の多岐を高處より下瞰して、徐ろに自己の取るべき行運を定めんなり、今略ぼ吾人の志を成したりと信ずれば、此附錄は本號を以て終ることゝしぬ讀者諒とせよ。

此廣告よりに御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

山路愛山主筆

獨立評論

三十九年第十一號

十一月三日發行

目次

◉近事評論 ▲韓國論▼

▲雲の如く煙の如し▲齋東野人の語▲京阪電氣鐵道權利株

▲汝の赫面を思へ▲上帝眼分明▲對米の策▲外數項▼

◉史論 ▲豐太閤の人物

◉小説 大盗通信 ▲革命熱▼

每月一回三日發行◉定價壹部金拾錢 半ヶ年分郵税共五十五錢

發行所 東京府下、中澁谷九〇二 獨立評論社

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

特別社告

中央公論（六册代以上本社へ直接拂込まれたる）讀者諸君に謹告す

秋期大附錄號は紙質を精良にし併かも頁數は平素の二倍强に候得ば一部賣價金卅三錢と致し本社直接購讀の諸君に限り普通號の倍額金參拾錢の割と定め候へしを以て御拂込み相成居候誌代の前金切は一ヶ月繰上り可申候事此儀御承知相成度希上候

振替貯金加入

本社は讀者諸君の便利を謀り郵便振替貯金の口座に加入致居候拂込用紙は何れの郵便局にても無料にて渡し呉れ申候

無料安全送金法

口座番號 三十四番　加入者名義 反省社 麻田駒之助

但此法により拂込まんとせらるゝときは登記料金貳錢を加へられんことを希ふ

反省社編輯

空文年表

菊版約三百頁　紙質上等

價金五拾錢　郵稅八錢

◎◎◎本書の世に行はるゝ年表類と異る點は年號紀元等の外には史上の事件を擧る事なく餘白として存したり且つ前後通して十箇年一頁としたれば充分なる餘白を供し得ると共に參照捜索に便利なり

●●●●其配列には特に意匠を凝し斬新なる方法を用ゐたれば緊要なる事項はすべて漏さず記入したるに係らず極めて短簡に且つ明瞭ならしめたり又各年號に對して索引を設け支那歷史中に於ける小覇王の年號は別表として之を卷末に附したり

、、、、各種學校にありて歷史を練習しつゝある人又は專門的に歷史を研究しつゝある人は今後各自に年表の原本を作製するの勞を省き得へし歷史的研究の旺盛なる今日學者須らく之を座右に備へらるべし

年表は攻學者に限らず世上實務に從事する人にも必要あり我國の舊時に於てすら尚各家庭には必ず一部の年代記を藏したり本書は我新時代の要求に應すべき文明式の年代記なり敢て之を江湖に薦む

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地（電話下谷九百十九番）　反省社

中央公論定價表

一冊	金拾五錢
六冊	金八拾五錢
十二冊	金壹圓六十五錢

外に郵税一部一錢宛

●但海外（淸國は本邦郵便局所在地を除く）は一部郵税六錢を要す

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を記し拂渡局所を**東京駒込**と指定せられたし

一弊社は**振替貯金三十四番**（麻田駒之助名義）に加入いたし居り候此規則により御送金の方は登記料貳錢を必ず加えられたく候

一郵劵代用の場合は必ず壹割増のことゝ

一前金切の節は帶封に朱書いたすべきに付早速拂込まれたし然らざれは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべきに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

明治三十九年十月廿七日印刷
明治三十九年十一月一日發行（禁轉載）

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衛門

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）　反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可